
IS インフィニット・ストラトス～一人の十刃～

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜一人の十刃〜

【Nコード】

N5557S

【作者名】

黒翼

【あらすじ】

衝動的に始めてしまったこの小説は処女作です。オリ展開、独自解釈、オリ主がチートなどが含まれています。キャラ崩壊するかもしれません。オリ主が原作キャラにフラグを立てるかもです。それでもいい方はどうぞ。駄文だと思いますがよろしく願います。ちなみに不定期更新の予定です。

プロローグ（前書き）

処女作ですが、よろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

「IS」正式名 インファイニット・ストラトス
宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。
「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。
ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。そして、世界は女尊男卑となった……

某ラボの一室

「起きて、白亜」

「……っん、朝か」

「今日は大事な日でしょ？」

今日はIS学園に行く日である。俺がIS学園に行くことになったのは、ISを使うことができるからだ。そして、今ニュースになっ

ている『世界で初めてISを動かした男』織斑一夏。
ISの生みの親である篠ノ之束の親友、織斑千冬の弟である織斑一夏を護る為だ。

俺は俺と束、もう一人の天才が作り上げたIS、『エスパーダ十刃』の待機状態である仮面をつける。

「あれ？はー君の十刃の今の待機状態、刀じゃないの？」

「斬魄刀でもいいが、さすがに学園につくまで刀を持つのはマズイからな」

「そつかゝ、じゃあそろそろ時間だから、ちーちゃんを待たせちゃダメだよ？」

「ああ。あと少しだが白式と紅椿、織姫の六花は任せた」

「おっけーおっけー、あとは天才束さんに任せなさい」

「じゃあ行ってくる」

「「行つてらっしゃい」「」」

こうして俺、くろがみはくあ黒神白亜はIS学園へと向かった……

ブログ（後書き）

誤字、脱字があるかもしれません。
感想、アドバイス等があれば、お願いします m（
|（
|（
m

キャラ設定（前書き）

主人公はホントにチートです。

キャラ設定

主人公

【名前】

くろがみはくあ
黒神白亜

【見た目】

痩身で白肌、緑眼で黒髪（BLEACHのウルキオラのような感じ
です。眼に緑の仮面紋はなし）

【好きな飲み物】

紅茶

【プロフィール】

誕生日 12月1日

身長 169cm

体重 55kg

一人称は『俺』、基本冷静であるが、キレると人を見下す。口調にブレがある。

篠ノ之束と同等かそれ以上の頭脳を持ち、身体能力が高い。
独学で剣術など様々な戦闘スキルを持っている。

人を見る目は確か。

ISを起動してなくても響転ソニードを使える。

専用IS エスバード 十刃

ヒロイン

【名前】

いのうえおりひめ
井上織姫

【見た目】

B L E A C H の井上織姫そのままです。

【好きなもの】

甘いもの、お笑い、黒神白亜

【プロフィール】

誕生日 9月3日

身長 157cm

体重 45kg（デリカシー？知らん！）

天然ボケだが、白亜達ほどではないが頭がいい。

運動神経が良く、空手初段程度の実力を持つ。

専用 I S 六花^{りっか}

キャラ設定（後書き）

次回は十刃と六花の説明です。

十刃の説明はメチャクチャ長くなりそうです。

機体説明（前書き）

作者はウルキオラが好きなので、ウルキオラ関係なことが多いです。
十刃の説明はとにかく長いです。

機体説明

機体名【十刃】 エスバード

その名のとおり、十の能力の解放がある。
展開時の武装は斬魄刀（薄緑色の拵えの刀。ウルキオラの斬魄刀）のみ。

見た目は機械を想わせない衣の様な感じで、白を基調にしたコート状の死覇装（ウルキオラの様な感じ）
待機状態は仮面か斬魄刀。基本斬魄刀だが、外出時などは仮面。

【基本能力】

すべて十刃のみが扱う能力

ソニード
響転：高速移動能力。ハイパーセンサーに感知されない。

イエロ
鋼皮：絶対防御の上にある特殊装甲。シールドエネルギーを殆ど使
用しない。

セロ
虚閃：エネルギーの集中された閃光。高威力攻撃。帰刃前は指先か
ら放つ。使用頻度が最も高い。

バラ
虚弾：エネルギーを固めて放つ技。虚閃ほどの威力は無いが、速度
が虚閃の20倍。連発可能。

グラン・レイ・セロ
王虚の閃光：虚閃の強化版。エネルギーと自分の血を混ぜて特大の
虚閃を放つ。大きさ、威力共に、通常の虚閃とは比べ物にならない
程大きく、稀に空間を歪ませる。

レスレクシオン
帰刃：十刃の能力の中で最も重要な能力。？によって能力が違
う。？は9〜0。

【帰刃設定】

スベール
？9〜？0まであり、使用頻度は、
セロ

9〃8>7>>6>5>>>4第一>3>2>1>0〃4第二

？5～？0は解放時にエネルギーを回復する（？4は第二開放時も）。

？9～？7までは2つの能力を併用することが可能。

【帰刃？設定】

ヌベール
グロトネリア
？9 喰虚

解号は「喰い尽くせ」喰虚」

多少のフリルを着けた死覇装。

相手の武装を無許可で利用できる能力を持ち、一度使用すれば、喰虚解放時なら、その武装が壊れるまで使い続けることができる。後付武装では無いため、拡張領域とは無関係のため、武装の記憶に限り

度が無い。

『掬花』

水流を纏った三叉の槍。水を使った攻撃をすることができる。

『認識同期』

自分の持つ情報を自分が望んだ者全てに報せる能力。映像を伝えることも可能。ジャミング等を一切受け付けない。

オクターバ

？8

フォルニカラス
邪淫妃

解号は「啜れ」邪淫妃」

背中に4本の細い羽の様なものがつき、羽についている袋のようなものから射撃ができる。

相手の姿、能力そっくりのクローンを作り出し、操る能力を持つ。

発動条件は、「相手に触っている事」

邪淫妃解放時のクラッキングは、ブラックボックスを解析できる程の解析能力を持つ。

セブティマ

？7

ブルヘリア
呪眼僧伽

解号は「鎮まれ」しずまれ『呪眼僧伽』」

神父を想わせる様な白の衣。

『双児響転』
ヘメロス・ソニード

最大で5体までの擬似的な分身を作り出す技。響転と同様にハイパ

ーセンサーを騙す。

『愛』
アモール

目で見つめたものの支配権を奪う能力。支配権を奪われたものは支配した箇所に模様が浮かび上がり、自分の意思に関係なく操られる。範囲はごく一部だが、相手の頭など、中枢器官を支配すれば、全体を支配することができる。エネルギーを使用するため、長時間の使用は不可。

セスタ
? 6 バンテラ 豹王

解号は「軋れ」きしれ『豹王』」

髪が長くなり、色が水色になる。そして、額に仮面につき、鎧の様な衣になり、尻尾、手足に鋭い爪、両肘・両脚には刃が付き、まるで獣人を想わせる様な姿になる。近接特化の帰刃。

『掴み虚閃』
アガラル・セロ

相手を掴んだ状態で、掌から零距离で虚閃を放つ荒業。相手を掴みやすいこの姿でのみ使用する。

『豹王の爪』
デスガロン

豹王最強の技。エネルギーで十本の巨大な刃を両手に創り出し、切り裂く技。飛ばすことが可能。

クイント
? 5 サンタテレサ 聖哭螳?

解号は「祈れ」いのれ『聖哭螳?』」

左右非対称の角が生え、腕が装甲のようなものに覆われた4本に増え、その4本の腕に三日月状の大鎌を持つ。腕は6本まで増やすこ

とができ、腕や鎌は再生が可能。

クアトロ

？4

ムルシエラ
黒翼大魔

解号は「鎖せ『黒翼大魔』」

漆黒の翼が形成され、4本の角の生えた兜のようになる。衣もスカート状に変わる。翼で防御が可能。エネルギーで創られた光の槍の様な武器を扱う。

レスレクシオン・セグンダ・エターバ
『刀剣解放第二階層』

？4のみが可能な二段階目の解放。

尻尾を生やし、二本の角、鋭い四肢の爪、黒い体毛に覆われた両腕と下半身など悪魔そのものを思わせる姿に変わる。眼球が黒みがある深緑色、瞳が黄色になり、喉元に孔が開く（ウルキオラの第二階層そのまま。仮面紋もある）。前の状態を遙かに上回る性能。

セロ・オスキュラス
『黒虚閃』

通常の虚閃を遙かに上回る威力の碧色に縁取られた漆黒の虚閃。

ランサ・デル・レランバーゴ
『雷霆の槍』

第二階層時に扱う。両手でエネルギーを集中させて作り出した槍を投げる技。着弾点に物凄い高さの火柱を上げるほどの高威力。何度も使えるが、コントロールに難がある。第二解放前の光の槍と同様に斬撃武器として使用可能。

トレス

？3

ティプロン
皇鮫后

解号は「討て『皇鮫后』」

上半身は肩にシオルダーガードをつけ、背中に鮫のヒレのようなものを着け、下半身は、白い装甲に覆われ、スカートに似た装甲をつけた状態になる。

持ち替え可能な鮫の頭部をイメージさせる大剣を持つ。

ラ・ゴータ
『戦零』

剣の刀身から水の塊を放つ技。

カスケーダ
『断瀑』

高圧力の激流で相手を押しつぶす技。

セクンダ

? 2 アロガンテ
髑髏大帝

解号は「朽ちろ」くちろ『髑髏大帝』

頭に王冠、手にはブレスレット、紫色のコートを纏っている。

レスピラ
『死の息吹』

AICが進化したようなもの。広範囲に一時的に相手の動きを停止させるオーラを放つ。攻守共に使用可能。

グラン・カイダ
『滅亡の斧』

巨大な黒い戦斧。右腕から鎖に繋がれて出現する。戦斧を振ると死の息吹と同様の効果を出し、相手を切り裂き、相手を一時的に停止させる。

プリメーラ

? 1 ロス・ロボス
群狼

解号は「蹴散らせ」けちらせ『群狼』

狼の毛皮を想わせる様なコートを纏い、左目に眼帯の様なものを着ける。

2丁拳銃を扱う。2丁の拳銃から、虚閃を連発することが可能。
セロ・メトラジエッタ
『無限装弾虚閃』

一度に大量の虚閃を連発する。一回の無限装弾虚閃での消費エネルギーは通常の虚閃の5発分。

セロ

? 0 イーラ
憤怒

解号は「ブチ切れる」ふちぎれる『憤怒』

自身の怒りの感情で、威力が上昇する。怒りの感情によって見た目に変化がある。
解放初期の状態は体が通常の1.2倍程に大きくなり、ハンマー状の尻尾が生える。

二段階目移行時にエネルギーが回復する。さらに体が1.3倍程大きくなり、背中に巨大な2本の角が生える。さらにこの後にも背中
の角が無くなり、黒い体毛に覆われた姿になる。
全帰刃で最も高い攻撃力を誇る。
虚閃と虚弾を多用する。どちらも高威力。

機体名【六花^{りっか}】

両肩に6枚の花弁をもつ花の形の青色の模様がある。ドレスの様な姿。

機体名の由来はサポートシステムの総称から。

待機状態は、6枚の花弁をもつ花の形の青色のヘアピン。
力にリミッターが掛かっていて、『三天結盾』『双天帰盾』『孤天斬盾』の効果は不完全。

【能力】

両肩の六花から出てくるAI搭載の妖精を想わせる6体のサポートシステムによって発動される能力は、どれも特殊。6対には名前があり、性格もそれぞれ。会話も可能。どれも脆いため、壊れやすい。

「火無菊^{ひなきく}」

『三天結盾』を担う六花。テンションが高い。

「リリイ」

『三天結盾』を担う六花。近未来的な格好をしている。

「梅蔵」
ばいこん

『三天結盾』を担う六花。六人の中では一番の巨体を持つ。

「あやめ」

『双天帰盾』を担う六花。控えめな性格。

「舜桜」
しゅんおう

『双天帰盾』を担う六花でメンバーのリーダー格。

「椿鬼」
つばき

『孤天斬盾』を担う六花。粗暴な性格で、織姫に対し横柄な態度で接する。

『三天結盾』
さんてんけつしゅん

火無菊、リリイ、梅蔵の三体が逆三角形の頂点に位置取ること盾を張り攻撃を防ぐ。十刃の？6の虚閃くらいまでなら防げるほどの強度を誇る。攻撃を防ぐ他、落下の衝撃を和らげる・障害物を食い止めるといった使われ方もする。

『双天帰盾』
そうつてんきしゅん

あやめ、舜桜の二体の間に対象を囲う盾を張り、盾の内側の損傷を修復させる。エネルギーの回復も可能。

『孤天斬盾』
こてんざんしゅん

椿鬼が行う攻撃行動。セシリアのスターライトmk?よりは劣るが、そこそこの威力を持つ。

機体説明（後書き）

十刃の説明ホント長かったな。
次回からストーリーが始まります。

第1話 学園到着（前書き）

気づいている人もいると思いますが、作者はネーミングセンスが無い
と思っていますので、タイトルとかの名前は気にしないでください
m (((m

第1話 学園到着

Side 〱 白亜

IS 学園校門前

「着いたか…」

俺はIS学園の前にいる。

俺は学園に着いたらブリュンヒルデこと、織斑千冬が待っていると束から聞いたのだが、見当たらない。

ブリュンヒルデ
「織斑千冬はどこだ？」

「ブリュンヒルデはやめろ、黒神」

独り言をつぶやいたら、ちょうど来た。なんか顔が引き攣っているように見える。織斑千冬は『ブリュンヒルデ』と呼ばれるのが嫌いらしい。

織斑千冬とは初対面ではない。入試のときに闘ったときの教官だった。束が頼んだらしいが……

「失礼した。織斑千冬」

「ここでは織斑先生と呼べ」

「了解した」

「行くぞ。お前の教室は1-1、私が担任だ。それと弟もいる」

俺は入学式にはでず、わざわざ遅れてきた。自己紹介とかが面倒くさいからだ。

束が言うには転入らしいが……

織斑先生の後ろについて歩いている。
着いたようだ。

「私が呼んだら入って来い」

そう言つて教室に入つていった。

それから7、8分は待たただろうか……そして呼ばれた。

なんかずっこけたような音が聴こえたり、すごい破裂音がしたり、すごい歓声が聴こえたり、何があつたんだ？

「行くか……」

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

俺は今女子の視線が刺さる中、自己紹介をしていた。

『もつと喋つてよ』と言う空気が流れている。話すことが何も無い。どうしたらいいんだ！

……しばらく考えたが何も無い。

「えっと……以上です」

思わずっこけた女子が大半だった。そんなに期待するな。そしてら……

パアンッ！

「つてえ！？」

いきなり頭を叩かれた。後ろを向くと……
狼を想わせる様な吊り目の人物が出席簿を持って立っていた。

「げえっ、関羽！？」

パアンッ！

また叩かれた。あまりの音に周りが引いてるぞ。

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

痛みに身悶えている一夏を放置して、その人物は山田先生の横に立つ。

「あ、織斑先生、用事は終わられたのですか？」

「ああ、山田先生、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任としてこれくらいはしないと……」

「諸君、私が織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。理解出来ない

い者は出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け、いいな」

堂々と暴力宣言をしたのは俺の姉、織斑千冬である。

「キャーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園から来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

キヤアキヤア騒ぐ女子達を、千冬姉はうつとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

千冬姉、人気は買えないんだから、もう少し優しくしようぜ。

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

すごい元気だ。元気だなにより！

「で？おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」
「いや、千冬姉、俺は——」

パンツ！

本日3度目。千冬姉は知っているのか、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬことを……

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

——と、このやりとりがまずかった。つまり、姉弟なのが教室中にばれたバレた。

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で唯一男で『IS』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ。」

最後のは放っておこう。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。最後に、諸事情によって遅れてきた奴がいる。入れ」

遅れてきた奴？どうせ女子だ。どんな奴でもいいや。

S i d e ～ 一 夏 ～ o u t

S i d e ～ 白 亜 ～

俺が教室に入った瞬間、教室の視線がすべて向けられた。そして固まった。

「黒神、待たせたな。挨拶をしろ」

「黒神白亜だ。事情によつて遅れたが、よろしく頼む」

シーンと沈黙した教室。なんかやったか？

「お、男？……」

誰かがつぶやいた

「そうだ。そこにいる織斑一夏と同様にISを使える」

「「「「「キャーーーーー！！」「」「」「」

「綺麗な白い肌！しかもかなりのイケメン！！」

「何？あの白い奴。でもカッコイイ！！」

「護つてもらいたい様な鋭い眼差し！！」

「地球に生まれてよかったーーーー！！」

かなり五月蠅い。大気が震えたような錯覚がした……

「黒神は空いてる席に着け。それではこれでSHRを終わる。では解散！」

俺は織斑一夏の席の一番後ろの席になったため、クラス全体を見渡せる位置に俺は座ることになった。

織斑先生がそう言ってから教室を出た。

俺と織斑一夏の周囲には女子の大群がいた。

「黒神君はどこから来たの？」

「頭につけてるのはなに？」

「ニュースにならなかったのはなんで？」

など質問付けに遭っていた。

ウザイ。とつと消えてくれ。

しばらく女子に囲まれたままだったが、チャイムが鳴った。

やっと消えたか……

一時間目はISの基礎理論授業だった。

一時間目が終わって織斑一夏はポニーテールの子と廊下に出て行った。知り合いか？

まあいい。

チャイムが鳴ってから、織斑一夏とポニーテールの子が戻ってきた。

？織斑一夏が突っ立ったままだ。そして、

パンツ！

織斑先生が出席簿で織斑一夏の頭を叩いた。

SHRのときの破裂音はこれだったのか……

二時間目、山田先生の授業だ。

俺は教科書を開かず、軽く聞き耳を立てて聞いていただけだった。

織斑一夏はキョロキョロしている。理解できてないな……

Side↳白亜↳out

Side↳一夏↳

まったくわからない。理解できてないのは俺だけか、俺だけなのか？
少しキョロキョロしてみたが、皆ノートを取っている。

そんな俺の様子に気づいたのか山田先生が

「織斑君、何かわからないところがありますか？」
と、訊いてきてくれた

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生
ですから」

先生を強調してたように聞こえた。

「先生！」

意を決して訊いてやる

「はい、織斑君！」

やる気に満ちた返事をしてくれた。さすが先生だ。

「ほとんど全部わかりません」

素直に自分の弱さを吐露した。

「え……。ぜ、全部ですか……？」

山田先生が困りド100%で引きつった。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

誰もいない。やっぱり俺だけだったか……

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の隅にいた織斑先生が訊いてきた。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

黒神はため息ついてたな。アイツわかってんのか？

「黒神、織斑に教えてやれ」

あれっ？千冬姉、なんで黒神に頼むの？

「了解した」

そしてなんで黒神は引き受けてるの？

そんなことがありつつ、二時間目は終わった。

S i d e ー 夏 ー o u t

第1話 学園到着（後書き）

こんな感じでいいのかな？

誤字・脱字・アドバイス等あれば教えてくださいm（
|（
|（
m

第2話 イギリス代表候補生からの宣戦布告

二時間目が終わって白亜は一夏の目の前に来ていた。

「織斑一夏、ブリュンヒルデの命令だ、今日からISのことを叩き込んでやる」

「一夏でいい。それと俺白亜って呼ばせてもらっけどいいか？」

「ああ。なら改めて一夏、今日の放課後からISの基礎から叩き込んでやるから覚悟して置け」

「うつ、ところで白亜って、頭いいのか？」

「愚問だな。俺は束の下にいた。知識は圧倒的に上だ。それと束が言うには俺は束以上の天才らしいがな」

「えっ！？束さんのところにいたのか！？それとずっと気になってたんだけど白亜の頭のついてるのはなんだ？」

「さっきから質問ばかりだな……これは仮面、まあ俺の専用機だ」

「専用機！？それって束さんが作ったのか？」

「そうだ。正確には俺と束、それともう一人の天才の三人で作り上げたものだ」

「もう一人の天才？」

「……こいつの話は無しだ。それとこれらの話は俺の許可無しに誰かに話した場合……覚悟しておけ」

「わ、わかった」

白亜が軽く睨んできた。正直怖かった（boy—夏）。

Side—夏—

「ちょっと、よろしくて？」

金髪の女子が話しかけてきた。

「へ？」

「……………」

俺は素つ頓狂な声を出し、白亜は無言で声の主の方を見ていた。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いているけど……どついう用件だ？」

「……………」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「……………」

相変わらず無言の白亜。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？それとそのあなた！何か話したらどうですか！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。隣にいる白亜は呆れたようにため息をついていた。

「あ、あ、あ……………」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

「一夏、国家代表IS操縦者になる候補生のことだ。その程度のこと、単語から想像しろ」

やっと口を開いたな。

「そういわれればそうだな」

「そう！エリートなのですわ！」

おお、復活した。さすがは代表候補生。

ぴしつと俺に向けた人差し指が、鼻に当たりそうなくらい近かった。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ

「……………」

「…………馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だって言ったんだろ。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわ。もう一人の方は織斑先生が任せたのですから少しは知っている感じですけど」

「俺に期待されても困るんだが。それと白亜はたばn「一夏」……悪い白亜」

「？ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「いない優しさだな」

「ISのことわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれなら俺も倒したぞ、教官」

「俺も倒した」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなた達も教官を倒したって言うの？」

「うん、まあ。たぶん」

「本気を出す前に勝った」

「それは本当ですよ！？」

「まあ落ち着け」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キンコンカーンコン。

話を割ったのは三時間目のチャイムだった。

「っ……！またあとで来ますわ！よくって！？」

来るな。

S i d e ー 夏 ー o u t

S i d e ー 白 亜 ー

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い織斑先生の授業だった。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生が思い出したように言った。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにク

ラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

一夏が推薦されたか。

「私は黒神君がいいと思います！」

「私も黒神君がいいと思います！」

……やっぱり来たか。

「では候補者は織斑、黒神……他にはいないか？自薦他薦は問わんぞ」

「お、俺！？」

立ち上がったのは一夏。推薦されたんだ。諦める。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら締め切るぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないといった。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

往生際が悪いな、一夏。
俺は別に構わないが。

パンツ！

「待つてください！納得がいきませんわ！」

セシリア・オルコット……やはり噛み付いてきたか。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルセツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

イギリスも島国だ……

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

貴様如きがこのクラスのトップ……ね

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で——」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

言つたな、一夏……

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「おい女。先に侮辱をしたのは貴様だ」

俺も乗つてやるか……

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけどわざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデはどれくらいつける？」

一夏がそう言つた瞬間、クラスから爆笑が巻き起こつた。

「お、織斑君それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かつたのって、大昔の話だよ？」

「ならいい……」

気づいてないな……

「貴様たちは分かっている。女がISを使うから強いのであってイレギュラーである男である俺達が弱いとは限らない」

俺がそう言ったら

「確かにそうだけど……」

「俺はハンデをつけさせてもらっぞ」

俺がそう言ったら

「結構ですわ!」

「オルコット、黒神にハンデをつけてもらえ」

と、織斑先生。

「な、なぜですの!？」

「黒神は私より強かった。私と黒神は試験のときに戦った。私は暮桜を第三世代並に強化したものを使ったが、黒神は本気を出さずに勝った」

「気づいていたんですか？」

「スベーン トレス
「?9」?3、これらの数字が出てそれ以降の数字があるのはわかる」

「喰えない人だ」

そんな会話をしていたら

「嘘、あの千冬様に本気で戦わずに勝つなんて……」

「千冬様が言ってるんだから間違いはないはず」

「黒神君って、千冬様よりも強い？」

半信半疑の音がクラス中に響いた。

そんな中でもオルコットは

「信じられませんわ！ハンデなど不要ですわ！」

せっかく織斑先生が教えてあげていたのに……

「なら、勝手につけさせてもらう」

「好きにしる。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、黒神、オルコットはそれぞれ準備しておくように。では授業を始める」

月曜が楽しみだ……

Side 〽 白亜 〽 out

S i d e 一夏

放課後、俺と白亜は只今教室に残って勉強中だった。

「ああ、織斑君、黒神君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

山田先生が教室に入ってきた。

「なんですか？」

「えつとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋って決まっていなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらつて話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。政府特例もあつて、とにかく寮に入れることを最優先にしてみたいです。一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「わかりました。そういえば白亜って部屋決まってるんですか？」

気になったので訊いてみた。

「黒神君は決まってますね」

「白亜と相部屋じゃないんですか？」

「黒神に関しては、関係者からの要望があつたからな。今は相部屋ではない」

千冬姉が来た。

「織斑の荷物は既に準備してある。生活必需品だけだがな。着替えと、携帯の充電器があればいいだろう」

さすが千冬姉。すげえ大雑把。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーもありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

そう言ったら白亜が

「一夏は変態か。女子と一緒に入りたいのか」

「なるほど、って俺は変態じゃない！」

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂はいりたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「えっと、それじゃ私達は会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

確か、校舎から寮まで50メートルくらいしかなかったような。どうすれば道草をくうんだ？

「一夏の部屋はどこだ？」

白亜が聞いてきた。

「えっと、1025室だって。白亜は？」

「俺は1026室。お前等の隣の部屋だ」

俺たちは寮につき、

「一夏、明日からお前を鍛えるからな。もちろん勉強もだ」

すでに明日の日程が決まっていた。

「わ、わかった」

そして各部屋に入った。

Side～一夏～out

第2話 イギリス代表候補生からの宣戦布告（後書き）

ヘンな所があると思います。
アドバイス等お願いします。

第3話 部屋と特訓

S i d e 〱 白亜 〱

一夏と別れて今は自室にいる。

ちなみに二人部屋だ。普通なら一夏と相部屋だが、束が何かを言っ
たらしい。

「束に連絡を入れとくか」

俺は束に白式の準備を急がせるために連絡をした。

「もすもす、終日？どうしたんだい、はー君？」

「一夏が早速戦うことになった。相手はイギリス代表候補生のセシ
リア・オルコットだ。一週間後だ。」

軽い説明をしておけば……

「白式の準備を急げってことだね。おっけー、一応はーくんも手伝
ってくれと束さんは嬉しいんだけどな」

「悪いが束、俺は一夏にISについて教えなければならなくなった。
ブリュンヒルデの命令だ」

「ちーちゃんが言ったのなら仕方ないね、わかったー白式を最優先
で仕上げるね」

「まだ公には俺のことは報せていないのдар？」

「そうだね。それなら私から声明を出しておくよ。明日のニュースにはなってると思うから」

「わかった。白式の準備任せたぞ。それとわざと遅らせるなよ?」

「はー君はどうせ気づいちゃうからやらないよ」

「そうか、じゃあな」

「バイバイ」

ピッ!

そうして通話をやめた。

……一夏の部屋が騒がしいな。
わざわざ今聞かなくてもいいか。

「十刃の待機状態を斬魄刀にしておくか…それと一応異状がないかも調べておくか」

俺は持ってきた俺専用のPCを使い、3分ほどで十刃の待機状態を元の姿である斬魄刀へ戻した。

十刃のメンテナンスは他のISよりも時間がかかる。理由は機能が
多いからだ。

1時間ほどたったか…やっと終わった。これをそこらの研究者とかがやったら少なくともあと2時間は掛かる。まあ、十刃のメンテナンスは俺か束、あとは藍染くらいだ。藍染は前に一夏に教えた十刃を作り上げたときのもう一人の天才のことだ。(説明は何れします)

……今の時刻は7時を過ぎている。適当に作るか

パパッと調理して出来上がり。所要時間10分。

肉と野菜を混ぜたもの。俺ながら適当だ。味は普通にいける。

食事を取った後、シャワーを浴びてまだ9時ほどだが特にやることもないので寝ることにした。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

朝の8時、一年生寮の食堂にいる。隣には白亜と箒がいる。

ニュースでは白亜のことが報道されていた。束さんが声明を出したらしい。

「なあ……」

「……………」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

「……………怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

「一夏、この女子になにをした？」

白亜が訊いてきた。

「えっと、訊かないでくれ」

あまり教えたくはない。箒のバスタオルしか巻いていない姿を見たり、斬りかかられたり、いろいろとあった。

「それと、誰だ？」

あ、白亜には教えてなかったけ？

「篠ノ之箒。俺の幼馴染で、俺の部屋のもう一人の住人。束さんの妹だ」

「ほう、こいつが束の妹……紅椿の操縦者になる女か……」

「最後の方が聞こえなかった。なんだって？」

「気にするな。ただの独り言だ」

「……たしか黒神、だったか？なぜあの人を呼び捨てにしているのだ？」

「お前になら教えてもいいか。俺は束の元にいた。それだけだ」

「あの人のところにいたのか！？」

俺と大して変わらん反応だな！

「ああ。最後に、隣まで聞こえていた。もっと静かにしろ」

「す、すまん」

「す、すまない」

そうして白亜は教室へ行った。
しばらくして、

「お、織斑君、隣いいかなっ？」

「へ？」

トレイを持った女子が3名、俺の反応を待ちわびるが如く立っていた。

「ああ、別にいいけど」

俺がそう言ったら、周囲からざわめきが聞こえた。

「ああ、っ、私も早く声をかけとけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」

「なんですって！？」

昨日、俺の部屋に一年生が八名、二年生が十五名、三年生が二十一名が自己紹介に来た。正直、名前と顔が一致しているのは殆どいな

い。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめ取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ。ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

……間食は太るんだぞ。しかも健康によくないかそれ？

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ。また後でな」

「織斑くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「お、同じ部屋だって聞いたんだけど……」

「ああ、まあ、幼馴染だし」

「え、それじゃあ——」

そこで手を叩く音が食堂に響いた。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

千冬姉の声が響き、辺りは騒がしくなった。ここのグラウンドは一周5キロある——冗談じゃない。俺も急がなければ。

ちなみに千冬姉は一年生の寮長も務めているらしい。いつ休んでいいのかわからない。

（今はISについて勉強しなければ。まあ、なんとかなるだろう）

——なんともなりそうではない。

二時間目が終わった時点で早くもグロッキーだった。

「大丈夫か？一夏」

白亜が来てくれた。

「単語は大丈夫だけど、内容がさっぱりだ」

「内容はこれから教えてやる。それより一夏、お前は中学のときに運動はしていたか？」

「？なんでそんなことを聞くんた？まあいいや。三年間帰宅部だったぜ」

そう言ったら、

「篠ノ之箒！、ちょっと来い！」

箒を呼んだ……

「なんだ？黒神」

「今日の放課後から一夏を鍛えなおせ。今のコイツではセシリア・オルコットに勝つことは出来ない」

なんでわかる……

「なぜ私に頼む。黒神がやればいいではないのか？」

「別にいいが、今の一夏では俺の特訓についていくことは不可能だからだ」

コイツは俺になにをさせるつもりなんだ？

「それと朝から気になっていたのだが、黒神の腰にある刀はなんだ？昨日の白い奴はどうした」

「そういえばそうだな。仮面は白亜のIS待機状態じゃなかったけ？」

「この刀は『斬魄刀』、本来の待機状態だ」

「そうなのか。刀を持つということは剣道はできるのか？」

箒がなにか期待を込めた感じで聞いている。

「できないことはない。だが、俺の剣術は普通じゃない」

「一夏を鍛えることは引き受ける。だから放課後に剣道場で、一度手合わせを願いたい。」

「わかった。一夏、放課後は剣道場で訓練、終わったら俺の部屋で勉強だ」

俺、倒れちゃうよ？

「わ、わかった。」

「決定だ。それでは、篠ノ之箒、任せるぞ」

「箒でよい。その代わり、私は白亜と呼ばせてもらう」

「わかった」

そんな話をしていたらチャイムが鳴った。

「黒神、昨日の仮面はどうした。それとその刀は何だ？」

三時間目早々、千冬姉が気づいたのか、白亜に斬魄刀だっけ？……について聞いていた。

「教えてなかったか。これが本来の待機状態だ」

「そうか。振り回すことはないと思うが気をつけろよ。」

「わかっている……」

毎回思うが、白亜って千冬姉によくあんなしゃべり方できるな。

そんなこんなで放課後になった……

専用機が来るって話を聞いた。どんだけ特別だよ。

Side～一夏～out

Side～白亜～

今、剣道場で箒が一夏を叩きのめしている。弱いな。

「そろそろ時間だ。白亜、手合わせ願おうか」

「約束だからな。竹刀を貸してくれ。胴着はいい」

そっいたら箒が

「胴着はいらない？どついうことだ？」

「着るだけ時間の無駄だ。やるぞ」

「片手！？怪我をしてもしらんぞ！」

俺は片手で竹刀を持っている。

箒の剣道の腕は相当なものだ。しかし……

「甘い！」

箒が踏み込んだ瞬間、俺は箒の懐に入り、胴に入れた。

「なに！？私が手も足もでなかった……さすがだな、白亜」

「すげえ、白亜。箒を瞬殺しやがった」

この打ち合いを見ていた周りの女子が

「篠ノ之さんって剣道の大会で優勝するほどの実力者だよね！？」

「その篠ノ之さんをこんなあっさりと……」

「っ、強い……」

などの声が聞こえた。

「あと少しやったら、勉強だ」

「わかった……」

この程度ではてるのか……ホントにキツイな。

その後10分ほど箒に打ちのめされた一夏は今、俺と箒と一緒に食堂にいる。

「これから毎日お前には箒と特訓をしてもらう。ISを起動させるつもりは今のところない」

「なんでだ？」

「今のお前は体力がない。そして、知識もないからだ」

そう言ったら一夏は言葉をつまらせた。

「白亜、時々でもいいから私と打ち合ってもらえないだろうか？」

「一夏の特訓につき合わせている身だ。構わない。ただし、一夏を最優先だ」

「わかった。ありがとう」

夕飯を食べながら話していた。

そして一夏は今は俺の部屋にいる。

「ワンオフ・アビリティ単一仕様能力はなんだ？一夏」

「えっと、その機体だけの特殊能力、だっけ？」

「まあそんな感じだ。第二形態でないと発動はしない。まあ発動しないことが多いがな」

こんな感じの勉強が進んでいた。

「もう、9時を過ぎた。今日はここまでだ、一夏。ちゃんと復習を

しておくように」

「わかった。なあ、毎日これをやるのか？」

ん？そんなこと

「当たり前だ。倒れないように俺が看ているんだ」

「う、わかった。じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

こんな感じで一週間が過ぎた……

S i d e ～ 白 垂 ～ o u t

第3話 部屋と特訓（後書き）

やっぱり駄文ですね。そして違和感満載。

全く進歩がない作者ですが、アドバイス等お願いしますm（| |）

m

第4話 クラス代表決定戦！ 一夏VSセシリア（前書き）

今回は一夏がメインです。

第4話 クラス代表決定戦！ 一夏VSセシリア

Side 一夏

「ついに来たな、決闘」

今日はセシリア・オルコットだっけ？からの宣戦布告から一週間後、つまりクラス代表決定戦の日だ。

それまで俺は筈に叩きのめされ、白亜にはISについて叩き込まれた。ちなみに白亜の宣言通り、ISはここ一週間動かしてはいない。そして、まだ俺の専用機となるISが届いていない。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生が第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきた。本気で転びそうでハラハラする。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

山田先生は本気で息を止めた。まさかやるとは……

「……ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

パアンッ！

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「千冬姉……」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

教師とは思えないお言葉。

「そ、そ、それですねっ！来ました！織斑くんの専用IS！」

——え？

「織斑、すぐに準備をしろ。黒神が待っている」

——はい？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

——あの？

「早く！」「」

三人の声が重なった。

ごごんっ、鈍い音がして、ピット搬入口が開く。

——そこに『白』がいた。

そして、白亜もいた。

「今から初期化と最適化を時間ギリギリまでやる。早く装着しろ」

「お、おう」

白垂に促されるがままに、白いISに背中を預けた。

そして、この白いISと『繋がる』

「一夏、このISの名は『白式』。お前の専用機になるISだ」

3分もたたずに試合時間となった。

「あとは試合中に初期化と最適化を終わらせる」

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

千冬姉の微妙な声の震えに気づいた。——ああ、心配してくれて
いるんだ。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

ほっとしたような声に聞こえた。

「篤」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

ゲート解放後、セシリアの目の前に現れた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

腰に手を当てたポーズが様になっている。

セシリアが纏うのは、青色の機体『ブルー・ティアーズ』。

特徴的なフィン・アーマーを4枚背に従え、どこかの王族騎士のような気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手には二メートルを超す長大な銃器、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握られていた。

アリーナ・ステージの直径は200メートル。すでに試合開始の鐘はなっているのに、いつ撃つて来てもおかしくない。

「最後のチャンスをおげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくってよ」

——警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認。

ハイパーセンサーが告げた。

「そういつのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら——」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を撃ち抜いた。

「うおっ！？」

——バリアー貫通、ダメージ46、シールドエネルギー残量、521。実体ダメージ、レベル低。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

俺の武器は『近接ブレード』と書かれた装備しかなかった。

S i d e ー 一 夏 ー o u t

S i d e 〱 白亜 〱

今は一夏の様子を見ながら、白式の説明をしている。

「実のところ、アイツの武器は近接ブレード一本だけだ。」

「どういうことだ？黒神」

「白式については俺も少なからず知っている。あいつは、あの刀しか今は使えない」

「今は？何れは使えるようになるということか？」

「シュミレーションでは、第二形態では別の武器がでると出ている。だが、あの刀一本だけでも十分戦える。見ていればわかる」

「そうか」

奴の第一形態になったときに持つ武器は『雪片式型』。かつてブリュンヒルデが現役時代に扱っていた『雪片』の後継武器。使い手によるが、十分戦える。……一夏を鍛えなければな。

考え事をしているうちに、一夏が追い上げていた。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「なっ……！？無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

セシリアは距離をとり、空いている左手を横に振る。それまで周囲の空間に待機していたビットが俺に向かって飛んできた。

——よし、わかってきたぞ。

レーザーをぐり抜け、一閃。ビットを一機撃墜した。

「くっ……！」

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかも——」
軌道を先読みし、ビットの後部推進器を破壊して落とす。これで二機！

「その時、お前はそれ以外の攻撃が出来ない。制御に集中させているからだ。そうだろ？」

「……………！」

図星だな。残りビットは後二機。
見えてきたぞ。勝利の光！

「はああ……。すごいですねえ、織斑くん」

「あの馬鹿者、浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へえええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいところまでわかるなんて」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……………」

ぎりりりりっ。千冬のヘッドロック炸裂！

「いたたたたたっっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離し——あうううっ！」

ずっとモニターを見つめているのは筈だった。

「心配するな。白式はもうすぐ一次移行するはずだ。一夏が油断しなければ勝てる」

「う、うむ。そうだな……」

——獲った！

セシリアの間合いに入った俺は、振り下ろした刀でビットを撃墜。
そのままIS独自の無重力機動でビットに回し蹴りををして、4機
のビットを破壊した。ライフルの砲口は間に合わない。確実に入る！

「——かかりましたわ」

セシリアが笑うのが見えた。——まずい！間に合わない。

ウンッ——。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

回避は間に合わない！これは……『弾道型』！？

ドカアアアンッ！！

爆発に俺は包まれた。

「やっとか」

「機体に救われたな、馬鹿者め」

白亜と千冬がそう言った。

煙が吹き飛ばされ、その中心には、純白の機体があった。

真の白式の姿で――。

「ま、まさか……一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

俺の専用機となった白式は、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的だった。

そして、武器は……

――近接特化ブレード・《雪片式型》。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

3年前も、6年前も、そしておそらく15年前も。あの人はいつでも俺の姉だ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは――

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？あなた、何を言って――」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好が付かない。そう、あの格好いい千冬姉が格好が付かないなんて、「冗談もいいところだ。しかも、笑えない。」

「というか、逆に笑われるだろ」

「だからさっきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

ビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。だが――

（見える……！）

ギンッ――！

横一閃。両断されたビットは、けれど慣性のまま俺の横を通り過ぎて、そして爆ぜた。

「おおおおっ！」

俺の手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪片式型の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

（いける……！）

懷に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

――が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

俺だけでなく、みんな「なんで？」と言う表情をしていた。

ただ二人、白亜と千冬姉だけは「やれやれ」という顔をしている。

何が起こったかわからないまま、試合は終了して、結果俺は負けた。

S i d e 一 夏 一 o u t

第4話 クラス代表決定戦！ 一夏VSセシリア（後書き）

今回は白亜と十刃の初陣です。セシリアのフラグ、どっちに立てよう……

アドバイスをお願いしますm（――）m

第5話 クラス代表決定戦！ 白亜VSセシリアor一夏（前書き）

白亜とセシリア、一夏の試合を両方書いています。

第5話 クラス代表決定戦！ 白亜VSセシリアor一夏

Side～一夏～

結局俺は負けた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

「武器の特性を考えずに使うから負けたんだ。明日からはISを使った特訓にしてやる。死なない程度に手加減しながらやってやるから安心しろ」

全く安心できない。千冬姉は何も言わないのか。ホントこの人達は人間なんだろうか。

「おい、一夏。今俺らが人間なんだろうかと思っただろ」

なぜわかった。

「特訓の内容を新しく考えなければ……」

小声でブツブツ呟いていた白亜。なんて恐ろしいことを考えるんだ！

「すいませんでしたっ！！」

即行で土下座。これが一番。

「やっぱり考えていたか」

謀ったな。謀ったな、シ〇ア！じゃなくて、謀ったな、白亜！

「まあいい。織斑先生、次の試合は何時からだ？」

「一時間後だ。それまでに準備をしておけ」

「わかった。それでは一夏、今から勉強の時間だ」

「……なんの？」

「もちろん、お前の専用機『白式』についてだ」

「わかりました……」

それから40分は白亜に有難い勉強会が開かれた。「会」と言っているが、受けているのは俺だけなんだけど。

そして、白亜の試合が始まる。

S i d e ー 一 夏 ー o u t

S i d e ー 白 亜 ー

時間となり、ピットには、一夏のと看と同じメンバーがそろってい

た。

「そろそろ時間だ。黒神、遊んで来い」

「そうさせて貰おう。一夏、俺の戦いを見ておけ。力の差を見せてやる」

力の差から生まれるのは一方的な攻撃だ。

「お、おう」

「じゃあ、行くか」

そう言つて、俺だけの専用機、エスパーダ十刃を展開する。

「「「なっ!?!」」」

一夏、箒、山田先生の驚愕する声が聞こえる。

「白亜、それは本当にISなのか?」

一夏が聞いてきた。俺のISは機械的な見た目ではない。まるで衣の様な見た目だ。

「そつだ。じゃあ俺は軽く遊んでくる」

そう言つて、アリーナに出る。

「なっ!それはISですよ!?!」

セシリアも一夏たちと同じ反応をする。

「そうだ。いつもこいつも同じ反応しかしんのか……」

本当にコイツを始めてみる奴は大体同じ反応をする。と言っても、見たことあるのは数人しかないが。

「しかも、武装はその刀一本だけとは……ふざけていますの!？」

「斬魄刀を使うかどうかも定かではないがな」

そして、試合開始の鐘が鳴る。

「来い」

「余裕ぶってられるのは、今のうちだけですわよ!」

セシリアはスターライトmk?を構え、撃ってくる。俺はそれを、

——片手で弾いた。

「なっ!？レーザーを避けなくて、弾いた!？片手で!？」

「その程度か？代表候補生の実力は。もっと俺を楽しませろ」

「っ！踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テ
ィアーズの奏でる円舞曲で!」

そのセリフ、言っていて恥ずかしくないのか？

ビットを展開して、攻撃してくる。俺はレーザーの雨の中を普通に避ける。

「当たらない！？ちょこまかと、逃げてばかりではなくあなたも攻撃したらどうですか？」

「いいのか？すぐに終わるぞ？」

「ありえせんわ！さあ、来なさい！」

「なら……遠慮なくやらせてもらおう」

俺は腕を軽く振り、ビットを二機破壊した。

「っ！いったい何が起ったの！？」

説明してやるか

「今は虚弾^{バラ}。こいつの基本能力の一つだ」

そして俺はビットの残りに手刀と蹴りを叩き込む。

「こつもあつさりとビットを破壊されるなんて……」

「そろそろ終幕か？」

セシリアの懐に入り、弾道型のビットを使う前に手刀を叩き込む。

「手刀でこの威力！？どういうことですか！？」

「十刃には鋼皮イエロと呼ばれる特殊装甲があつてな、鋼皮装甲は『絶対防御』の上にある装甲でな、一種の鎧のような感じだと思ってくれても構わない。そして鋼皮装甲は鋼のようなものだ。素手でもそこらの近接武器並みの威力は出せる。」

「普通じゃありませんわ!」

「勝手に言つてろ。終わらせる」

さらに手刀を叩き込み、響ソニート転を使った。

「消えた!?!どこにいましたの!?!」

「後ろだ」

後ろに回りこみ、指先にエネルギーを集中させる。

「終わりだ。虚閃セロ」

そして、赤黒い閃光を放った。

『試合終了。勝者——黒神白亜』

ピットに戻った俺は一夏と篤に質問をぶつけられた。

「なぜ消えたのだ?」

「最後の赤黒い光はなんだったんだ?」

「あれは響転と虚閃。基本能力だ」

「遊びすぎだ。最後の響転も虚閃も使わなくても勝てただろう？」

「余裕で勝てた。だが、少しでも力の差を実感させた方が伸びるかな。結局一度も斬魄刀を使わなかった」

「まったく本当にぶっ飛んだ性能だな」

呆れたような声だった。

「それじゃあ一夏、とっとと始めるぞ」

「エネルギーの補給はいいのかよ？」

「するだけ時間の無駄だ」

そういつて、俺と一夏はアリーナに出た。

既に試合開始の鐘はなっている。

「一撃でも入れることが出来たらお前の勝ちでいい」

「なめやがって。言い返せない自分が憎い……」

「来い」

「はあああああ！ー！」

一夏は雪片式型を上段から振り下ろした。俺はそれを

——片手で受け止めた。

「さっきのセシリアのときといい、お前は化け物だな」

「無駄口叩く暇があるなら攻撃を仕掛けろ」

「言われなくてもわかってる！」

振られる斬撃を避けて、手刀と蹴りを叩き込む。

「ぐはっ！」

吹っ飛ばされた一夏は、雪片式型を握りなおし向かってくる。

「いいだろう。受けてたっ！」

俺は斬魄刀を抜き、一夏とつばぜり合いになる。

「刀を抜いてくれたな、白亜！」

「お前はさっきの戦闘の途中に成長した。なら俺を楽しませるほどに強くなれ！」

「なってやる！だが今は、お前に一撃入れるのが目的だ！」

つばぜり合いになったまま、話しつつける俺と一夏。

「だが、そろそろ終わらせる！」

響転を使い、一夏の目の前から消えた。

「なっ！どこだ！」

「ここだ」

一夏の背中に複数の衝撃が走る。

「ぐっ！」

体勢を崩した一夏にとどめの一撃。

「虚閃」

一夏の正面から虚閃を放つ。

『試合終了。勝者——黒神白亜』

こうして、クラス代表決定戦は終わった。

ピットに戻った俺達は、織斑先生に半分命令のような感じで「帰って休め」と言われ、今は俺と一夏、篝の三人で寮への道のりを歩いている。

「それにしても、白亜のIS、エスパード、だっけ？すげえな」

「十刃の力の10%も見せていなぞ？」

「マジかよ。どんだけ強いんだよ」

「知らん。ただ、織斑先生より強い」

ここで話題がなくなったのか沈黙が続いた。
この沈黙を破ったのは箒だった。

「一夏、負けて悔しかったか？」

「そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そ、そうか。それなら、いい……明日からはISの訓練が始まるのだな」

「そうなるな。白亜、何をするんだ？」

特に考えてなかったな。

「あゝ明日までに考えておく」

「わかった」

Side～白亜～out

Side～セシリア～

（今日の試合——織斑一夏には勝ちましたが、黒神白亜、彼には一方的にやられましたわ）

今日の試合のことについて、思い耽っていた。

（最後の一撃、あれが当たっていればどうなっていたのでしょうか…）

未だにいきなり一夏のシールドエネルギーがゼロになったのかはわかっていない。

（わたくしが勝ったのに……）

けれど腑に落ちない。なんだかすっきりとしない。

（——織斑、一夏——）

あの強い意志の宿った瞳を思い出す。

出会ってしまった。理想、の強い瞳をした男と。

「織斑、一夏……」

Side～セシリア～out

第5話 クラス代表決定戦！ 白亜VSセシリアor一夏（後書き）

セシリアのフラグは一夏に決まりました。

白亜に1人はフラグを立てる予定です。

感想等、お願いしますm（| |）m

第6話 クラス代表決定！

S i d e 一夏

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

——えっ？

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になっっているんでしょうか？両方に勝った白亜の方が俺よりも適任だと思うんですが」

「それは俺が辞退したからだ」

なんでそんなことをした！

「お前は初心者だ。そしてお前は実戦の方が伸びが速い。だからセシリアと相談して辞退させてもらった。それに俺が代表になったら対抗戦とかが無意味になるからな」

「で、本当は？」

「面倒なことなんで遠慮させてもらった」

「やっぱりかああああ！」

パアンッ！

「黙れ、静かにしろ」

「で、でも千冬姉！」

「織斑先生と呼べ、いい加減学べ」

「……すみません」

なんで俺がこんなことに……

「二人が辞退したんだ。残るのはお前だけだ」

「そんなあああああ！！！」

パアンッ！

「黙れと言ったであろうが、馬鹿者」

白亜め、いつか絶対負かしてやる。いつになるかわからんけど……

「クラス代表は織斑一夏、依存はないな」

俺を除く、クラス全員が返事をした。

Side 一夏 〓 out

S i d e 〱 白亜

「ではこれよりISの基本的な飛行実践を実践してもらつ。織斑、黒神、オルコット。試しに飛んでみせる」

俺たちは今、織斑先生の授業を受けている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

俺が展開し終わった後、女子共が騒ぎだした。クラス代表決定戦で見なかったのか？

「黒神君のIS、本当にISなの？」

「格好いい……」

「まるでどこかの衣装みたい……」

またこの反応か、いい加減うざつたいな。

「うるさい、黙れ。黒神、黙らそうとするな」

なぜ気づいた。殺気でも漏れたか？

「全員展開し終わったな。よし、飛べ」

俺はすぐに上昇した。俺に次いで、セシリア、一夏の順だった。

「何をやっている。スペック上では黒神のはともかく、オルコットのよりは出力は上だぞ」

昨日教えたが今一わかってないな。

「一夏、教科書は例えだ。イメージは自分で掴め」

「白亜さんの言うとおりですわ。イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

試合の後、セシリアは俺らのことを名前で呼び合うようになった。理由は一夏に惚れたからだろ。

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いているんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「それを説明すると日が落ちるぞ」

「わかった。説明しなくていい」

「そう、残念ですわ」

あの試合の後、一夏のコーチを買おうとしているが、生憎すでに俺がいる。なので一夏の訓練に参加することになった。

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」

第、セシリアと話しているのが気になるのか。さすがに山田先生のインカムを奪ってまで叫ぶほどか？

「織斑、黒神、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ。黒神は地表から5センチだ」

何で俺だけ5センチなんだ？余裕だけど。

「一夏、セシリア、先に行くぞ」

そう言っただけで急降下する。結果はもちろん成功。地表から3センチのところまで止まって見せた。

次はセシリア。さすがは代表候補生、成功だ。最後に一夏。

ギョーンッ——ズドォォンッ！！

……墜落した。グラウンドにクレーターを作り上げた。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。白亜に教えてもらっただろう」

確かに教えてもらったな。半分忘れてた。

「一夏、今俺がやってきたことを半分否定しなかったか？」

否定はしてない。忘れていただけだ。

「大体だな一夏、お前というやつは昔から——」

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

「……ISを装備していて怪我などするわけないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

箒とセシリアの口論勃発。

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりはマシですわ」

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている」

ブリュンヒルデの登場だ。

「織斑、武装を展開しろ。黒神は既に展開されているからいい」

俺の基本的な武装は斬魄刀一本だ。帰刃すれば変化はあるが。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

一応一週間は訓練させたがまだ遅い。もっと訓練させなければ……

「オルコット、武装を展開しろ」

一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめる。横に向かつて銃身を展開させて黒神を撃つ気か。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「……はい」

ブリュンヒルデは絶対だ。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

頭の中で文句を言っていたな。絶対。

手の中の光はなかなか像を結ばず、空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もっつ！《インターセプター》！」

初心者用の手段であるため、代表候補生であるセシリアにとっては相当屈辱的なことだろう。

「……何秒かかっている。お前は、実践でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑と黒神との試合で初心者の織斑に対しても簡単に懷を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

正論を言われて反論できないか。

『あなたがたのせいですわよ！』

なんでだよ。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

大変だな、一夏。自業自得だけど。

「俺は手伝わんぞ」

そう言ったら一夏は少し落ち込んでいたように見えた。

S
i
d
e
~
白
~
o
u
t

第6話 クラス代表決定！（後書き）

次回は、中国娘の登場です。

感想等、よろしくお願いしますm（―）（―）mスマン

第7話 中国代表候補生登場！（前書き）

鈴が登場する回です。

第7話 中国代表候補生登場！

Side 〱 白亜 〱

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

クラッカーが乱射される。寮の食堂で騒いでいいのか？ブリュンヒルデが来そうだが。
隣では一夏がブルーになっていた。

「クラス代表、がんばれよ。一夏」

「元と言えばお前が辞退なんてするからこんなことになったんだ
！」

逆切れするな。

「サポートくらいはしてやるさ。それに訓練は今まで通りやるんだから」

「訓練は有難いけど、クラス代表のことはお断りだったんだ！こういうのはお前のほうが適任だろうが！」

「諦める。もう決まったことだ」

「絶対見返してやる」

「精々頑張りな」

そう言ったら、一夏がさらにブルーになった。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と謎のISを駆る黒神白亜君にインタビューをしに来ました〜!」

俺と一夏ぐらいだろ、盛り上がってないの。

「あ、私は二年のまゆずみかおるこ薫子。よろしくんね。新聞部副部長やってます」

そいつって名刺を渡してきた。随分と画数の多いことで。

「ではまず織斑君!クラス代表になった感想を、どうぞ!」

「まあ、なんというか、頑張ります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に障るとヤケドするぜ、とか!」

古いセリフだな。久しぶりに聞いた気がする。

「自分、不器用ですから」

これもまた久しぶりに聞いた。

「うーん、じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

ちゃんと仕事しろよ。

「じゃあ次に黒神君、あの謎のISは何！」

「トップシークレットだ。能力は、後々わかるだろ。教えるつもりはない」

「えー。教えてよ。あのISは普通じゃないんだから、みんなの疑問なんだよ！だから教えて！」

しつこい奴だ。

「確かに普通じゃない。気になるなら、俺に本気を出させることだな」

「あの織斑先生を倒したと言うあなたを本気にさせろと」

「そうだ。そうすれば、俺の力の一部を見せてやる」

「これはこれでいい記事が書けそうだわ」

これだけ言えば捏造はされないだろう。

「セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね」

満更でもないだろ。髪の設定がいつもよりも気合入ってるし。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したか

「というと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造をしておくから。よし、織斑君に惚れたから
つてことにしよう」

いきなり核心を突いたな。

「なっ、な、ななっ……！？」

その動揺はそれが真実だつて言ってるようなものだ。気づかないのは一夏くらいだろ、超ド級の唐変木だからな。

「じゃあ、注目の専用気持ちのスリーショットもらうよ。あ。握手とかしてるといいかもね」

握手はそんなに好きではないんだが。それと悪いなセシリア。ツーショットじゃなくて。

「俺は遠慮したいんだが」

一応提案してみる。

「却下。男子が写らないなんて女の子たちが五月蠅いじゃない」

面倒くさい。

「わかりましたよ。しょうがない」

「ならとつと並んで」

逃げることは出来るが、響転はあまり見せたくないんでね。別に見せてもいいけど。

「じゃあ撮るよー。 $35 \times 51 \div 24 \times 13$ は？」

「966・875」

「そうなの？」

答えを知らんのに出すな。って、

「何で全員入ってるんだ？」

行動力すごいな。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

うまく丸め込まれたな。

ともあれこの、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は10時過ぎまで続いたらしい。

らしいって言うのは隙を見て響転を使って逃げたからだ。

で、今は俺の部屋。

「東、紅椿と六花はどうだ？」

「紅椿はもう少し、六花はそろそろ完成だよ。六花のほうが進みは早いかな」

「六花は俺と東、織姫の三人がいないと完成はしない。俺の邪淫妃フォルニカラスで解析しても詳しいことはわからない。あのリミッターはなんなんだ？」

「はー君の十刃の邪淫妃でわからないなら東さんでもわからないよ」
「？」

織姫のISとなる六花には謎のリミッターがかかっている。

「でも、解析した結果でわかったのは私たち3人がそろわないと、六花の第二形態移行はしないってこと。どうして第二形態にならないと六花の本当の能力は開花されないんだろっね？」

「わからん。まあ、いつ頃できそうだ？」

「うーん、あと一、二ヶ月はかかると思うよ？」

「夏休み前には完成させてくれればいい。」

「おっけー。じゃあまたね」

ピッ！

六花はまだかかるか……

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

今はまだ4月。このIS学園への転入は条件が厳しい。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになっていいる。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

セシリア・オルコットは今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合う。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

筈がいつの間にか俺のそばに来ていた。

「どんなやつなんだろうな」

「む……気になるのか？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん……」

「今の一夏は女を気にするほどの余裕があるのか？来月はクラス対抗戦があるんだぞ」

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「もしあつさり負けたら訓練内容2倍だな」

「織斑くんが勝つとクラスのみんなが幸せだよー」

セシリア、篝、白亜、クラスメイトの順で好きなことを言っていく。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているクラスは一組と四組だけだから余裕だよ」

「——その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。

「二組も専用気持ちでクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなつ……！？なんてことを言うのよ、アンタは！」

「おい」

この声は……

「なによ！？」

バシッ！鬼教官の登場。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

昔から千冬姉のことが苦手のようだ。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組に向かって猛ダッシュ。昔のままの鈴だ。

「っていうかアイツ、ISの操縦者だったのか。初めて知った」

なんとなく口に出したのがまずかった。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で——」

クラスからの集中砲火。ああ、馬鹿……。

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿者ども」

千冬姉の出席簿が火を噴いた。いつの間にか白亜は席に戻っていた。

そして昼休み……

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

開口一番がこれかよ……

「なんでだよ……」

この二人は、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬姉に三回叩かれている。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

「素直じゃないな、お前ら」

「「な、なんのことだ（ですわ）！？」」

なんて言ったんだ、白亜は。聞こえなかった。

俺は今日も、日替わりランチ、白亜は揚げ物、箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチだった。

「待ってたわよ、一夏！」

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に通

行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待っていたんでしょうが！
何で早く来ないのよ」

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりか。元気にして
たか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさい
よ」

「どつという希望だよ」

「一夏、注文の品が出てきたぞ。向こうのテーブルが空いている。
行くぞ」

白亜に促され、移動する。人数が多いと移動するだけでも時間がかかる。

「一夏、そろそろどつという関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの！？」

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」

「そつだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「幼馴染み……？」

「あー、えつとだな。箒が引つ越したのが小四の終わりごろだった
だろ？ 鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。で、中二の終わりに
国に帰ったから、会うのは一年ぶりくらいだな」

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼馴染で、
俺の通ってた剣道場の娘」

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

「で、そっちがもう一人のISを使える男ね？」

「ああ、黒神白亜だ。鳳鈴音」

「鈴でいいわよ、そのかわり白亜って呼ばせてもらってから」

「よろしく、鈴」

「「こちらこそ」」

「シンンッ！ 私の存在を忘れてもらっては困りますわ。 鳳鈴音さん
？」

「……誰！」

「なっ！わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。もちろん、白亜にもね」

「鈴、白亜に勝つのは無理だ」

「な、何だよ。一夏！」

「千冬姉が言ったんだよ。本気でない白亜に負けたって」

「嘘っ！？あのブリュンヒルデの千冬さんに勝つなんてありえない！」

「それが事実だって。千冬姉本人が言ってたし、白亜も認めてる」

「白亜、今度私と模擬戦して」

「暇だったらな。一夏たちを教えているからいつ出来るかわからんぞ」

「それでもいいから。一度でも模擬戦してくれるなら」

「そうか。日時は俺が教えよう」

「わかったわ」

話が進んでいく。なんていうか鈴は相変わらず軽い。

Side ～ 夏 ～ out

第7話 中国代表候補生登場！（後書き）

最近白亜サイドが少ないような気がする。
感想等、お願いします。

第8話 クラス対抗戦（前書き）

戦闘場面が特にダメですが、今回も投稿しました。

第8話 クラス対抗戦

Side（白亜）

放課後、いつも通り一夏の訓練に付き合っている。

「あぶねっ！」

「回避が甘いぞ一夏！」

今一夏は俺の虚閃から逃げ続けている。

「軽く撃ってるんだ。これくらい避ける！」

「無茶言うな！虚閃って範囲が広いんだよ！響転も使うからどこから撃ってくるか余計に避けにくいんだよ！」

「……仕方ない。響転は使わない。だが、今から10発の虚閃をすべて避ける！」

「おう！」

十刃の速度は、かなり速い。響転を使わなくても十分に。だから、一夏は俺の虚閃に翻弄されている。

「1 / 2 / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / …… 10」

最後の10発目、一夏は回避に失敗し、虚閃を諸に喰らう。

「一夏、最後に気を抜いたな」

「いや、気を抜くわけねえだろ。最後の虚閃だけ速くなかったか？」

「多少威力を戻して撃ったが、アレでも65%くらいだぞ」

「アレで65%！？」

「最終的には全力の虚閃を避けてもらうつもりだ」

「できる気がしねえ」

「まあ、回避に関しては大分マシになってきたな。よし最後に俺と軽く模擬戦するぞ」

「おう」

「準備は言いか？一夏」

「大丈夫だ。始めようぜ」

「なら、スタートだ！」

始まった瞬間、一夏は突っ込んできた。

「先手必勝か？」

「そつだな」

「甘いぞ、一夏。接近したら虚閃と虚弾は撃てないと踏んだか」

「なにっ!？」

一夏は接近して、雪平式型を振り下ろそうとした瞬間、虚弾を受けて、体制を崩す。

「考えが単純だ。もっと観察しろ」

体制を崩した一夏に手刀と蹴りを叩き込む。

「つぐ、さすがだな」

「瞬時加速は使えるようになったんだろ？お前のすべてをぶつけて来い！」

「そんなことわかってる！」

虚弾を撃っているため、近づけていない。

「攻撃の隙間を見つけれ。穴はあるぞ？」

虚弾を放っているが、攻撃に隙を作っている。

「っ！ここだ！」

瞬時加速を使って急接近してくる。

「そうだ。攻撃の隙を見つけれ。今のはよかったぞ。だが――」

「っ！」

一夏に焦りの表情が出たが、もう遅い。

俺は虚閃を放ち、一夏のシールドエネルギーを一気に0にした。

模擬戦が終わり、更衣室にいる。

「最後の瞬時加速はよかったぞ。相手を観察し、攻撃のタイミングをうかがえ。」

「おう。白亜、本当に虚弾の雨の中に隙を作ってたんだな」

「隙を作らなければ練習にならない。俺の一方的な攻撃になるだけだ」

「……たしかに」

そして俺は鈴が来たので先に戻った。

部屋に戻ってしばらくしたら、また一夏の部屋が騒がしくなった。

「毎度毎度あいつらは学ばんのか？」

しばらく女の口論が続いていい加減イラッときたので、文句を言おうと部屋を出たら、一夏の部屋から鈴が出てきた。しかも泣いていたように見えた。

「おい一夏、今度は何をした？」

「えーとだな……鈴を怒らせたようだ」

「なぜお前が鈴を怒らせるようなことをしたかは知らんが、五月蠅い。まったく、お前らは静かに出来んのか？」

「す、すまん」

「何があつたかは訊かんがちゃんとやることはやれよ。じゃあ静かにしろよ、馬鹿」

「お、おう」

一応釘をさしておいたが、どうせ何もやらないだろうな。

で、翌日、クラス対抗戦の一回戦の一夏の相手は鈴だった。

結局、数週間経つても、一夏は鈴に謝った気配が感じられなかった。

「一夏、来週からクラス対抗戦が始まる。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質今日が最後の特訓だな。気を引き締めろよ」

アリーナに入ったら、

「待ってたわよ、一夏！」

何で鈴がいる。

「貴様、どうやってここに――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題無しね」

なんていう自分ルールだ。

「……で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「おい、一夏。前にやることはやれと言ったが何もしてなかったのか？」

「おう。鈴が避けてたからな」

……コイツは本当に救いようがない唐変木だな。

「謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！」

「あっ切れた。まだそんな寝言言ってるんの！？約束の意味が違う

のよ!」

「説明してくれたら謝るっつーの!」

「せ、説明したくないからこうして来てるんではないか!」

一夏に恋する奴は大変だな。

「じゃあこうしましょう!来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何なんでも1つ言うことを聞かせられるってことでいいわね!?」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらっからな!」

「せ、説明は、その……」

「なんだ?やめるならやめてもいいぞ?」

「誰がやめるのよ!アンタこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ!」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは!この朴念仁!間抜け!アホ!馬鹿はアンタよ!」

「うるさい、貧乳」

あーあ。言っちゃたよ、この馬鹿。

ドガアアンツ！！

「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」

無茶苦茶だな。

「ちょっとは手加減してあげようと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。全力で叩きのめしてあげる」

特殊合金製の壁に30センチのクレータか。

「……パワータイプですわね。それも一夏さんと同じ、近接格闘型……」

セシリアが言っていることは正解だ。さすがは代表候補生。

一夏は謝ることが確定した。胸の事に触れるのはダメだろ。この馬鹿は、はあ。

試合当日、第二アリーナ第一試合。相手は鈴だ。

鈴の機体は『^{シエンロン}甲龍』だ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、今は一夏と鈴が空中で向き合っている。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げたあけるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

鈴の言っていることは事実。ちなみに十刃の全力の一撃ならおそらく操縦者も消せる。

だから、『殺さない程度にいたぶることは可能である』

まあ、今の一夏なら大丈夫だろう。

『それでは両者、試合を開始してください』

一夏と鈴が動いた。

ガギンッ!!

三次元躍動旋回は物になったな。

ドンッ!!

っ!今のは……

「なんだあれは……？」

モニターを見ている筈がつばやいた。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、第三世代型兵器ですわ」

砲身が見えないのは相当厄介だ。しかも鈴の甲龍は砲身角度に制限が無さそうだ。

ハイパーセンサーがなければ今頃一夏は負けているだろう。虚閃と虚弾からの弾幕鬼ごっこが効いたようだ。

「本気で行くからな」

ふと一夏がそんなことを言った。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

一夏は瞬時加速を使い、鈴に急接近する。

ズドオオオオオンッ！

一夏の雪平式型の刃が届きそうになった瞬間、突然アリーナ全体に走った。

アリーナの遮断シールドを貫通して侵入してきたのは全身装甲のI

S
だ
っ
た。

S
i
d
e
〜
白
亜
〜
o
u
t

第8話 クラス対抗戦（後書き）

今回は白亜サイドのみにしました。

ようやく白亜がメインって感じが出た気がします。

次回は、やっと十刃の帰刃がでます！

感想等、お願いしますm（| |）mスマン

第9話 襲撃者（前書き）

今回は白亜無双です。

第9話 襲撃者

Side 〱 白亜 〱

（あれはゴーレム！？なぜここに！？束の仕業か！？）

「ブリュンヒルデ！今すぐ一夏たちを避難させろ！それに俺にISの使用許可を！」

「私にもISの使用許可を！」

「今やっている。黒神は許可しよう。だが、遮断シールドがレベル4に設定されている。しかもすべての扉がロックされている。おそらくあのISの仕業だろう」

「なぜ白亜さんだけですの！？数は多い方がいいでしょうに！？」

「お前がいたら黒神の邪魔になるだけだ」

「山田先生、そこをどいてくれ」

「え？いったい何を？」

「このセキュリティにクラッキングを仕掛けてロックを解除する」

「そんなことできるんですか！？」

「ああ、だからどいてくれ」

「はっ、はい！」

すぐにクラッキングを始めて、約20秒ほどで終わった。

「は、速い……このセキュリティをこつとも簡単にクラッキングするなんて……」

すぐに十刃を纏い、一夏たちのいるアリーナに出た。

アリーナでは一夏たちが苦戦していた。

「一夏、鈴、今すぐ退け！」

「なによ、あたしたちが足手まといになるって言うの！？」

「エネルギーを消耗している今ではどの道邪魔だ。とっとと戻れ」

「白亜！任せたぞ」

「一夏、白亜だけに任せるの！？」

「ああ、あいつが負けたことを見たことがない。アイツはいつも本気じゃない」

「わ、わかったわよ……」

「絶対無傷で戻って来いよ！」

「とつと行け」

一夏たちはピットに戻った。

「いくぞ、十刃。帰刃？^{レスレクシヤノ}9、喰い尽くせ『^{グロトネリア}喰虚』！！」

「なによ、あの姿……」

「あれが黒神の十刃の能力。帰刃だ」

「あれが白亜の力の片鱗……」

「アイツの全力がどこまでなのかは私でも計り知れない」

白亜が叫んだ後、白亜から光が出て、光が止んだ瞬間、白亜の見た目が変わっていた。

コートのような衣から、フリルをあしらった衣に変化し、手には三叉の槍を握っていた。

「しっかり見ておけ。あれがやつのだ」

俺の手には三叉の槍、『^{グロトネリア}掟花』がある。

「いくぞ！」

掟花をゴーレムに突く。ゴーレムの左腕は切断された。

そして、槍から水を生み出し、巻き上げた水流をぶつける。

飲み込まれたゴーレムは、水流により、どんどん装甲が削られていく。

ゴーレムは右手のレーザーで水流を吹き飛ばした。

響転を使い、ゴーレムの懐に入り込み、突き、切り裂く。

「止めだ」

水を生み出し、水流を操作して水の槍を無数に作り出しゴーレムに放つ。

「喰虚流術、『死の突く雨』」

水の槍に貫かれたゴーレムは、動きを停止した。

ピットに戻った俺は、ブリュンヒルデに呼ばれた。

「お前はアレについて知っているようだな」

「ああ、アレは東が作り出した『ゴーレム?』だ」

「やはりアイツか……はあ、もういいぞ」

「失礼する」

なぜあのタイミングでゴーレムを？聞いたです必要がありそうだな

……

「白亜はやっぱりすごいな！」

「あんたには勝てる気がしないわ」

「アレはいつたいたいなんでしたの！？」

「帰刃とやらはいつたいたい何なんだ？」

一夏、鈴、セシリア、箒の順に訊いてきた。

「帰刃は十刃の基本能力だ。ちなみに言うておくが、喰虚の本気ではない」

「あそこまでもすごくても本気じゃないのかよ……」

「アンタってほんと化け物ね」

「アイツは無人機だ。でないとあそこまでの攻撃はしない」

「無人機！？嘘っ！？無人のISが存在するなんて……」

「それと、おそろく口止めされると思っから黙っておけよ」

それだけ言って部屋に戻った。

シャワーを浴びて、束に連絡を取っていた。

「今日のゴーレム、どういうつもりだ？」

「もちろんいつくんを鍛えるためだよ？」

「疑問形で返すな。結局俺が止めたが、どうせ俺に帰刃を使わせるのが目的だろ？束」

「さっすがはー君、よくわかってる！」

「はぁ、やっぱりか。一夏は俺が鍛えている。今はまだまだだが、一夏は伸びる」

「はー君が言うなら間違いないね。ゴーレムを飛ばした理由はもう一つあるんだよ？」

「しっかり守れているか確かめるためか」

「大正解！さすがはーくん。それと六花のことだけど」

「六花がどうかしたのか？」

「完成したからもうすぐひーちゃんが行くからねっ！」

「それは本当なのか？束」

「そっだよー今はーくんが二人部屋独占してるよね？」

「まさか……」

「そう！そのまさかだよ！ひーちゃんをそっちに行かせて同じ部屋に住んでもらうってことなのさ」

「なぜそんなことをする……」

「なんでだろうね？」

「はあ、ふざけやがって」

「もう過ぎてしまったことは仕方ないのだよ」

「今度遭ったら覚悟しておけよ……」

「それじゃあねー、ばいばーい」

一方的に切りやがったな。

「織姫が来るか、厄介なことになりそうだ」

あいつはとにかく天然だ。やつの天然は稀に面倒なことになる。

「今日はもう寝るか」

Side～白亜～out

第9話 襲撃者（後書き）

死の突く雨、わかる人はわかりますね。
はい、モロパクリです。
感想等、お願いします。

第10話 生徒会長の侵入（前書き）

楯無さん登場です。

第10話 生徒会長の侵入

Side 白亜

朝、俺の部屋。ちなみに日曜日。

ふにゅ。

「?なんだ……」

布団をめくると

「……誰だお前は」

見知らぬ女が寝ていた。

「おはよう、白亜君」

「だから誰だ貴様は。名前を呼ばれる筋合いはないぞ」

「私は更識楯無。ここ、IS学園の生徒会長よ」

「で、その生徒会長がなんで俺の部屋で寝ているんだ?」

「なんででしょう?」

「織斑先生ですか? 一年生寮の1026室に不法侵入者が――」

「ごめんなさい。それだけはやめて」

「何でいるんだ？鍵は掛けたが？」

「そこは生徒会長権限でちょちょっとね」

職権乱用するなよ。

「で、なんのようだ？態々来たんだ、何かあるんだろう？」

「あなたは一体何者？」

「ただの高校生だ」

「ただの高校生が謎のISを使っていると」

「別に話してもいいが、誰かに言ったら——“消すぞ”」

殺気を出して告げる。

「わ、わかったわ」

少し殺気を出しすぎたか？更識楯無に少し動揺の色が見える。

「あのISを創ったのは俺と束、俺の知り合いの天才の3人で作り上げたものだ」

「束って、篠ノ之博士のこと？」

「そうだ。そして俺は——普通じゃない」

「普通じゃないって?」

「このことを教えるつもりはない。これ以上話すつもりはない」

「そう。普通じゃない高校生ってことでいいわ」

「用がないならとつと帰れ。邪魔だ」

「それって酷くない?先輩よ?」

「知ったことか。強い奴しか部外者に興味はない。ここには俺に勝てる奴はいないからな」

「すごい自信ね」

「ブリュンヒルデに勝てる人間がここにいるのなら話は別だがな」

「それもそうね。織斑先生に勝てるのはそうそういないわね」

「学園最強と言っても所詮学生だ。ブリュンヒルデに勝つことは不可能だ」

「確かに勝てないわ。でも学園最強が生徒会長よ?あなたは興味ないの?」

「そんなものに興味はない。面倒なだけだ」

「ここまで言われたのは久しぶりだわ……」

「帰れ。更識楯無」

「楯無でいいわよ」

「なら楯無、とつとと帰れ」

「言い方きつくなってるない？」

「さあな」

「じゃあまたね。黒神白亜君」

そついつて部屋から出て行つた。

あいつは一体なんなんだ？

態々生徒会長である楯無が来るほどのことではない。

「なにが目的だ？」

俺の声は虚空に消えた。

で、今は学園の外に來ている。

「久しぶりの学園外だな」

今は一人で学園の外に來ている。十刃の待機状態は首に着く仮面にしている（スタークVer.）。

「特に用はないがしばらくふらついてみるか」

時々視線を感じるが気にしない。まず来たのは紅茶の茶葉を扱っている店。

最近飲んでいないが、紅茶は好きだ。

次に来たのは、CDショップ。よく聴く曲は「D・t・c n o L・f e」、「ア○ターダ○ク」などなど。

軽く見て終えた。それから学園に戻った。

ガチャッ

「……………」

寮の自室の扉を開けて動きを停止した。

「…………なぜここにいる。楯無」

「お出迎え？」

「それとその格好はなんだ？」

「裸エプロン？」

「とつとと着替えろ。そして帰れ」

「いいじゃない少しくらい」

「不法侵入者、通報するぞ」

「一応聞くけど、誰に？」

「ブリュンヒルデ」

「織斑先生はやめて」

「なら着替えて帰れ。やることあるんだが」

「もう、ホントに酷いんだからっ」

「帰れ」

「じゃあね、また来るわ」

来るな。

ほんとなんなんだ、アイツは……
いつアイツにフラグを立てた？

荷物置いて、夕飯を食べに行くか

「「黒神君の私服、カッコイイ……」」」

食堂へ向かっていると女子の口からこんな発言が連発していた。そういえば着替えてなかったな。

「はっくんの私服かい？」

変なあだ名で呼んできたのは一夏曰く、『のほほんさん』

「はっくんは決定事項か」

「そうなのだよー。それよりなんで私服なのー？」

「少し外に行ったからな。着替え忘れたただけだ」

「へー。では一緒に夕飯しよう」

「……お前の連れはどこかへ行ったぞ？」

「おわー。ほんとだーいないー。あー……待つてー」

そしてのほほんさんもどこかへぺたぺたと走っていく。……遅い。

食堂について、女子の群れに目が行った。何してるんだ？

「よう、一夏、鈴」

「お、白亜。珍しく私服だな」

「アンタの私服って始めて見たわね」

「少し外に行つててな、着替え忘れたただけだ」

「へえ」

「隣いいか？」

「おう、いいぜ」

「なあ、あそこの群れはなんだ？」

「トランプでもやってるんじゃないの？それか占い」

「にしては俺と一夏の名前が出た気がするんだが」

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」

「マジで！」

「うそー！きゃー、どうしようー！」

黄色い声がさっきから響いている。

「あ———っ！織斑君と黒神君だ！」

「えう、うそ！？どこ！？」

「ねえねえ、あの噂ってほんと——もがつ！」

噂？なんのことだ？

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」

「——バカ！秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし……」

秘密？話が掴めない。

「噂って？」

「う、うん！？なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も365日って言うよね！」

「な、何言ってるのよ！49日だってば！」

それも違っただろ。たしか75日だった。

「何か隠しているだろ」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ！？」

「黒神君の私服カッコイイ……」

誰だ、全く無関係のこと持ち出したのは。

「俺は戻るぞ、一夏」

「はやっ！まだ俺らは残っているのに」

「俺は話しながらも手を動かしていたからな」

「そうか。じゃあ、また明日な」

「ああ、じゃあな」

部屋に戻って、シャワーを浴びてから、しばらくCDを聴いてから寝た。

Side ~ 白亜 ~ out

第10話 生徒会長の侵入（後書き）

http://pic.prcm.jp/gazo/bbc/aq
yKgd.jpeg

外出のときの服装はこんな感じです。

楯無さんってこんな感じでいいのかな？

アドバイス等もお願いします。

第11話 3人の転校生（前書き）

シャル、ラウラ、織姫登場です。

第11話 3人の転校生

Side 白亜

「やっぱりハヅキ社製のがいいかなあ」

「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜の朝、クラス中の女子たちが手にカタログを持って談笑していた。

「そつえば織斑君と黒神君のISスーツってどこのなの？」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どつかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞してる」

よく覚えていたな。

「俺は少し特殊でな。使っていない」

十刃の装甲は服といっても通用するからな。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませ

「なのであしからず」

さすが先生ってことか。

「山ちゃん詳しい!」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん?」

「山ぴー見直した!」

「今日が皆さんのスーツの申込日開始ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー?」

入学してから約二ヶ月。既に山田先生には8つくらいの愛称が出来ていた。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃないじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

「あれ? マヤマヤの方が良かった? マヤマヤ」

「そ、それもちよつと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す?」

「あ、あれはやめてください!」

マヤマと言っあだ名にトラウマでもありそうだな。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか? わかりましたね?」

返事はしたがわかってないだろ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

ブリュンヒルデの登場。騒がしかったクラスが静かになったな。スーツが夏用が変わっているようだ。一夏がやったな。たぶん。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

そこくらいは構ってやれよ。

仮にここには男子が二人いるんだから。

「では山田先生、ホームルームを」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも3名です！」

「「ええええええええっ！？」「」」

一人は織姫か。

分散させるのか？

「失礼します」

「失礼します」

「……………」

入ってきた転校生を見て、クラスが固まった。
その一人が男の格好をしていたからだ。

「井上織姫です。ちなみに専用気持ちです」

天然状態の口調じゃないな。

問題は……

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

——」

「きゃ……」

「はい？」

やばい。

「きゃああああ——っ！」

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜〜！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

「……挨拶をしるラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ドイツの軍人か？　そういえば前に束が言ってたな。ブリュンヒルデがドイツにいたって。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

もう少しなんか言えよ……

「あ、あの以上……………ですか？」

「以上だ」

一夏と目が合ったようだ。
ヤバイ。

「！貴様が――」

ラウラが振り上げた腕は、振り下ろされることはなかった。

「やめておけ」

なぜなら俺が腕を掴んでいるからだ。

「貴様は初対面の相手を殴るのか？だったら変わった挨拶だな」

殺気を出して睨む。

「っ！離せ！」

「白亜、離してあげなよ」

「ん、ああ」

織姫に従い腕を離す。

「いつの間に前に来たの？」

「急に現れたように見えた気が……」

「井上さんって黒神君と知り合い？」

「あー、黙れ。黒神、席に着け」

「ああ」

「ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！！」

さっさと移動するか。

「おい黒神、デュノアの面倒を見てやれ。織斑では心配だ」

「君が黒神君？僕は――」

「話は後だ。移動が先だ。女子が着替え始める」

俺はシャルルの手を取り移動を開始した。今は移動しながら説明している。

「男子は空いているアリーナの更衣室で着替える。これから実習のたびにこの移動だ。早く慣れろ」

「う、うん……」

「どうした、トイレか？」

一夏がたずねた。

「トイレ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

「急ぐぞ」

速度を落とさず移動している。

「ああっ、転校生発見！」

「しかも織斑君たちとも一緒！」

「いたっ、こっちょ！」

「者ども出会え出会えい！」

いつからここは武家屋敷になった……

「織斑君と黒神君の黒髪もいいけど、金髪ってのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！見て見て！黒神君と手！手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

ちゃんとしたものをあげろよ。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

「男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

やはり……

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男子なんて今のところ俺達しかいないんだかる？」

「あっ！——ああ、うん。そうだね」

「一夏、囲まれたぞ」

「やばい、どうする？」

「悪い。一夏、それとデュノア」

「え、どういうことだ？」

「っ！？うわぁ！」

「きゃあああ！」

「お姫様抱っこ！」

「いいなあ……」

「先に行くぞ、一夏」

響転を使い、アリーナの更衣室まで来た。一夏の悲鳴が聞こえた気がするがスルー。

「悪かったな。デュノア」

「い、いいよ、別に……」

訊いとくか

「お前、女だろ？」

「っ！な、なんのことかな？ぼ、僕は男だよ！？」

「俺は人を見る目は確かだ。男っぽく見せてはいるが細かく見ればわかる。まあ、普通の人間にはばれないレベルだな」

「……こんなに簡単にばれちゃうなんて」

「言いふらすつもりもないし、聞くつもりもない。時間はある。悩め女。俺は行くぞ」

「ねえ、黒神「白亜でいい」……白亜、なんで黙っててくれるの？」

「さあな。急いで着替えろよ。一夏が来るぞ。じゃあな」

俺が到着して、しばらくしてから一夏たちが来た。

「遅い！」

バシーン！

「くだらんことを考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

よく響くな。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

セシリアが一夏に絡み始めた。

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

「白亜に見捨てられた」

「なに？白亜に見捨てられたの？バカじゃないの？」

「——安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ご愁傷様。

バシーン！

本当によく響くな。何でだ？

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習のため、人数はいつもの倍だ。

「くうっ……。なにかというすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

鈴のは呪いの言葉だな。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。——凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

完全なとばっちりだが諦める。ブリュンヒルデは絶対だ。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

文句を言いつつも二人は前に出ている。

「お前ら少しはやる気を出せ。——アイツにいいところを見せられるぞ?」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね!専用機持ちの!」

単純だな。

「それで、相手はどちらに?わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが?」

「ふふん。こっちのセリフ。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

キイイイン……。

「ああああーっ!ど、どいてくださいっ!」

ドカーン!

一夏の元に山田先生が墜落した。

白式の展開は間に合ったようだが、一夏が山田先生の胸を掴んでい

る。

セシリアと鈴が怒り、一夏に攻撃を仕掛けたが、山田先生に防がれた。

「山田先生はああみえて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔の話ですよ。それに代表候補生どまりでしたし……」

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちなら直ぐに負ける」

負けるといわれたのがよほど悔しいのか、二人は瞳に闘志をたぎらせる。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。

「手加減はしませんわ！」

「アタシも手加減は無し！」

「い、行きます！」

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

「山田先生が使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七力国でライセンス生産、十二力国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サイドパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

結局鈴とセシリアは負けた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳、黒神、井上だな。黒神と井上はこっちに来い、八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは黒神と井上以外の専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

俺と織姫が呼ばれ、他は動き出した。

S
i
d
e
~
白
壁
~
o
u
t

第11話 3人の転校生（後書き）

半分くらいまで書いてから、ミスって内容を0にしてしまったため、泣きたくなりました。そのせいで、内容が薄くなった気がする。感想等お願いします……

第12話 IS自習と白亜の同居人

「織斑先生、なんの用だ？」

「お前らの知識は他の奴より——ちよつと待て。この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声だな。すぐにグループが出来上がった。

「最初からそうしろ馬鹿者どもが……話の続きだ。お前等の知識は他の奴より圧倒的に多い。特に黒神、お前の技術は学園トップだ」

「つまり、俺らのグループになった奴らだけずるいと言うことが」

「そういうことだ。だからお前らにはサポートに回ってもらおう」

「了解」

「わかりました」

「織姫は鈴とセシリアを頼む」

「わかったよ、白亜」

「じゃあ行くか」

「……一夏、何をしてるんだ？」

一夏の周りに女子が一行に並び、お辞儀をして手を出している。

「わからん」

「はあ、とつとと始める。一夏、なんかあったら呼べ」

「わかった」

次にデュノア。

「お前らもか……」

一夏たち同様お辞儀をして手を出され、困っていたデュノア。
俺が一喝して訓練を始めさせた。

「デュノア、大丈夫か？」

「白亜、大丈夫だよ。それとシャルルでいいよ」

「じゃあ次行くからなんかあったら呼んでくれ」

「わかったよ」

最後にラウラ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、しっかりやれ。織斑先生に迷惑を掛けるな」

「お前に言われる筋合いはない。黒神」

「訓練が進まないと困るのはお前だぞ」

「知ったことか。こいつらが勝手にやればいい」

「はあ、お前ら、進めてくれ。どうしようもないときだけ俺が織姫、先生を呼べ」

「」「」「はい」「」

織姫は終わっていたようで、全体を見ている。

「織姫、どうだった？」

「大丈夫そうだったよ」

「白亜はラウラさんがいたから大変だったでしょう？」

「まあな。勝手にやらせていたからな。一応進ませたが、どうなるかな」

こんな感じで進んでいった。

「では、午前の授業はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班ごとに集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

訓練機を運び終わった俺たちは

「シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええつと……僕はちよつと機体の微調整をしていくから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

「ん？いや、別に待つてても平気だぞ？俺は待つのに慣れ——」

「いくぞ、一夏。シャルルが待たなくてもいいって言っているんだ。態々待つてことはお前は変態なのか？」

「俺は変態じゃない！わかつたよ。先にいつてるからな」

「う、うん。わかつたよ」

更衣室。

「白亜、箒に屋上で昼飯食べる約束したんだけどお前も来るか？」

箒は二人つきりで食べたいだろうが、

「行くか。シャルルには俺から誘つておく」

「任せた。じゃあ先に行くから屋上でな」

「ああ」

一夏は走って更衣室から出て行った。

「シャルル、一夏に屋上で昼飯を誘われたんだが、来るか？」

「あ、白亜。行かせてもらおうかな」

「なら行くぞ。待ってるはずだ」

「うん。さっきはありがとね」

「気にするな。正体を知っているのは今のところ俺だけだからな」

「そうだね」

屋上

「一夏、シャルル連れてきたぞ」

「おう、白亜。あれ？そっちの子ってたしか井上さんだったけ？」

「よろしくね、織斑一夏君」

「なんで一緒に来てるんだ？」

「知り合いだから」

「にしては仲いいな」

「一緒に住んでたしね」

「はっ？一緒に住んでた？付き合ってるの？」

「付き合ってたない。幼馴染かな？」

「そうなるのかな？」

「さあな」

「じゃあなんで一緒に住んでたんだ？」

「その話はいつかしてやるよ」

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな？」

シャルルが切り出した。

「一夏が誘ってきたんだ。文句は一夏に、な」

「飯は人が多いほうがうまいしな」

シャルルが来て1日目でもう分かったことだがかなり遠慮深い。

俺たちがこの学園にきたときのように、男子争奪戦とばかりに一年一組には大量の女子が押し寄せてきたのだが、貴公子のような外見と変わらず丁重に丁重を重ねた対応で全て断っていた。しかも

『僕のようなもののために咲き誇る花の一時を奪うことは出来ません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってますいそうなのですから』

とかいうセリフまで言っていた。そのときに手を握られていた三年生は失神したし、そのあとは他の女子もアピールが恥ずかしくなったように積極的なアピールはしてこなくなった。

「男同士仲良くしようぜ。わからいことがあつたらなんでも聞いてくれ。ISについては白亜に聞いてくれ」

「人任せか、馬鹿」

「白亜のほうが知識も技術も上だし」

「協力くらいはするか……」

「私も協力する！」

「ありがとう。みんな優しいね」

「い、いや、まあ、これからルームメイトになるだろうし……ついでだよ、ついで」

「一夏さん、部屋割りがもう決まったのかしら？」

「いや、普通に考えたら俺が白亜の部屋だろ。男だし」

「おそらく一夏の部屋だな。織姫が俺の部屋に来るはずだし」

「なんでわかんのよ？」

「どっかの馬鹿の天才が仕向けやがったからな」

「仕方ないよ。束さんなんだから」

束の名前に反応したのは一夏と篤以外だった。

「束って、あの篠ノ之博士のこと!？」

「篠ノ之博士と一緒にいたって言いますの!？」

「あれ？白亜、言ってなかったの？」

「面倒になるから隠しておいたものを……面倒なことを起こしやがって」

「ごめんね、白亜」

「しょうがない。このことをばらしたら容赦なく叩きのめさせてもらうからな」

「わ、わかったわ」

「わ、わかりましたわ」

どうして顔が引き攣っているんだ？しかもみんな。

「白亜、殺気出してるよ。たぶん無意識だろうけど」

「そうか？悪かったな」

そのあと、昼飯を食べたのだが、一夏のせいで一夏ラブの奴らが騒ぎ出して、うるさい食事になった。

今は夜、俺の部屋にいる。

「よろしくね、白亜」

「ああ」

やはりシャルルは一夏の部屋になった。

「なにか飲むか？」

「久しぶりに白亜がくれる紅茶が飲みたいかな」

「そうか、少し待ってろ」

そういつて簡易キッチンで紅茶をいれた。

「できたぞ」

「ありがとう」

受け取った織姫は一口飲んだ。

「やっぱりおいしいね」

「そうか」

紅茶を飲みながら話し始める。

「六花は？」

「これだよ」

そういつて頭の髪飾りを渡す。

「問題無さそうだな」

「あまり動かしてないけどね」

「完成したのは最近だろ？仕方がないさ。それに近々学年別のトーナメントがある。そのときにデータを取らせてもらおうさ」

「わかったよ」

「あ、そうだ。お前も一夏の訓練に付き合うか？」

「やらせてもらおうかな」

「わかった。一夏には俺から伝えておく」

「お願いね」

こうして、馬鹿の天才に仕組まれた俺と織姫の同居生活が始まった。

Side 〱 白亜 〱 out

第12話 IS自習と白亜の同居人（後書き）

最近白亜サイドが多いですね。

他の人のサイドも作らなければ。

感想等お願いします。

第13話 ドイツの黒い雨とフランスの疾風（前書き）

こんなタイトルになってしまいましたが半分もラウラは出てません。

第13話 ドイツの黒い雨とフランスの疾風

Side 白亜

織姫たちが転校してきて5日が立っている。

「一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

最近の特訓はシャルルに任せることがある。

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

今日は土曜日。アリーナが全開放されるので他の生徒がいる。

「知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、『瞬時加速』も読まれてたしな……」

「一夏のISは近接格闘だけだからな。射撃武器の特性を深く把握してないと勝てんぞ。」

「特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあまり無理に軌道を変えない方がいいよ。」

空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「……なるほど」

ちなみに箒、鈴、セシリアは離れたところで眺めているだけである。

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？」

「ああ、何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いていないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「一夏の『零落白夜』がそうだ。拡張領域が埋まっているのは零落白夜のせいだ」

「へえ〜」

「じゃあ、射撃武器の練習を試みようか。はい、これ」

一夏に渡したのは、55口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

「え？他の奴の装備って使えないじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ」

「でも白亜って雪平式型使わなかったか？」

「あれは喰虚の能力だ。気が向いたら教えてやる」

「へえ」

「撃てみて」

「おう」

何発か撃った一夏の結果はそこそだった。

「どうだった？」

「なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

周りが騒がしくなった。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

そこにいたのはドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒだった。

「おい」

解放回線か。

「……なんだよ」

「貴様も専用機だそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「いやだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

束に聞いた話だと、第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦当日に一夏が誘拐され、決勝戦を捨て、一夏を助けたらしい。情報提供したドイツに借りを返すために、1年ほどドイツ軍で教官をしていたらしい。ラウラはブリュンヒルデに相当惚れ込んでいる。だから二連覇の邪魔をした一夏が憎いつて感じだろう。

「貴様がいなければ教官の大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

正解だった。

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

実弾砲を発射してきた。

ゴガギンッ！

シャルルが割り込み、シールドでラウラの一撃を止めた。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……」

「やめておけ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「っ！黒神、白亜……！」

俺は響転を使い、十刃の待機状態である斬魄刀をラウラに突きつける。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけたのか担当の教師の声がありーナに響く。

「……ふん。今日は引こう。黒神白亜、貴様も覚えておけ」

「せいぜい頑張ってみろ」

俺の言葉に反応することは無くラウラは戦闘状態を解除してありーナゲートへと去って行った。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「白亜、いつの間に来たの？」

「今さっき」

「響転使ったの？」

「ああ」

俺はISを展開せずに響転を使える。知っているのは織姫だけだ。

「白亜ってさつきIS展開してなかったよね？」

「ISがなくても響転は使えるぞ」

「白亜って人間離れしすぎだよな」

「悪かったな」

「話はそこまでにしてもうあがるつか。4時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「おう。そうだな。あ、銃サンキユ。色々と参考になった」

「それなら良かった。えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、いや」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「というかどうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」

質問を質問で返すな。

「どうしてって……その、は、恥ずかしいから……」

「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ」

「いや、えっと、えーと……」

そろそろ助け舟を出すか。

「なあ、シャル——」

「とつとと行くぞ、変態」

「誰が変態だ！誰が！」

「おまえだ、変態。嫌がっている相手と着替えようとするのはどうかと思うが？」

「俺は親睦を深めよう——」

「だが、引き際を知らんお前は屑だ」

「ぐはっ！」

俺のセリフに一夏はダウンした。

「俺はこの屑を連れて先に行く。シャルルは後で来い」

「う、うん」

響転を使って更衣室に戻った。

「き、消えた!？」

「デュノアさん、アレが響転だよ。高速移動術の類いの技だよ。」

「井上さんはさすがに白亜に詳しいね」

「幼馴染だから、ね……」

更衣室に到着。

「一夏、とつとと着替えろ」

「……白亜、あそこまでいう必要はないんじゃないのか?」

「本当のことを言ったまでだ。ホモの屑野郎」

「ぐはっ!お、俺はホモじゃない……」

「ならとつとと着替えろ」

「お、おっ……」

コイツは本当に女に興味があるのか?

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「よし、着替え終わり」

「あのー、織斑君と黒神君、デュノア君はいますかー？」

「はい？えーと、織斑と黒神はいます」

山田先生のようにだ。

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりますー？」

「大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は織斑君たちと実習しているって聞いてましたけど」

「あ、まだアリーナの方にいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんが、どうかしましたか？大事な話なら呼んできますけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、伝えといてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになりま

す。結局時間帯別になると色々と問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！」

とても重要な話だ。やっと風呂に入れる。

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

仕事であつても今の俺は感謝の気持ちでいっぱいなのだ。

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます」

「そ、そうですね？　そう言われると照れちゃいますね。あはは……」

ふと気がつく。俺は熱心に女教師の手を握っている。まずい気がする。白亜は呆れたように見ている。

「……一夏、何してるの？」

ドキッ！

なんだシャルルか。ふう。

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるの？」

「あ、いや。なんでもない」

「なんでもないわけないだろ。一夏が山田先生に何かをしようとしてたんだから」

「何もしようとしてない！ただお礼をしていただけだ！」

「……一夏、先に戻ってっていったよね」

「お、おう。すまん」

なぜシャルルの言葉に棘を感じるのだろうか。

「喜ベシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

「ああ、そういえば織斑君と黒神君にはもう一件用事があるんです。職員室まで来てくれますか？」

「わかった」

「わかりました。——じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使ってくれよ」

「うん。わかった」

「じゃ山田先生、行きましようか」

Side 〱 白亜 〱 out

「……………。はあっ……………」

寮の自室に一人だけとなったところでシャルルは吐き出すように息を漏らした。

（何をイライラしているんだか…………）

さっきの更衣室の態度が今になって恥ずかしい。きつと一夏たちも面食らっていたに違いないと思うと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

（…………。シャワーでもして気分を変えよう）

S i d e 一 夏

「はー、終わった終わった」

用件とは白式のこと、書類を書いていた。

「ただいまー。って、あれ？シャルルがいないな」

と思ったがすぐにシャワールームからの水音に気づく。

（シャワー中なのか。——そういえば、確か昨日ボディーソープが切れたって言っていたっけ）

クローゼットから予備のボディーソープを取り出す。

（うーん、たぶん今シャルルも困っているよな。届けてやるか）

とりあえず脱衣所まで持って行って、そこで声をかけたらいいだろう。

双思って俺は洗面所へと入る。

ガチャ。

——ガチャ？

また扉の音がするのはおかしい。ああ、シャルルがシャワールームのドアを開けたのか。きっとボディーソープを探しに来たのだろう。

「ああ、ちょうどよかった。これ、替えの——」

「い、い、いち……か……？」

「へ……？」

シャワールームから出てきたのは、見たことのない『女子』だった。

「え、えつとだな、えーと……」

「きゃあっ！？」

ガチャ！

我に帰った女子が慌てて胸を隠しながらシャワールームに逃げ込む。

「……。えーと……」

「……………」

ドアの向こうから言葉はない。

「ぼ、ボディーソープ、ここに置いとくから……」

「う、うん……」

ええと、なにがどうなっているんだ？シャワールームにはシャルルがいるはず——って、さっきのはシャルルなのか！？

（いやでもおかしいだろ。なんでシャルルに胸があるんだ？そう、
胸——）

さっきの光景が離れない。

（胸……きれいだっとな）

ってバカ。そうじゃないだろう。いや否定しきれないところではあるんだが。

（いかん、考えないようにしよう。心頭滅却すれば火もまた涼し、
浪速のことは夢のまた夢）

ガチャ……

「!？」

「あ、上がったよ……」

「お、おう」

背中越しに聞く声はやはりシャルルのものだった。俺はばくばくとなる心臓をなるべく意識しないようにしながら振り向いた。

「――」

女子が、そこにいた。

Side――夏――out

第13話 ドイツの黒い雨とフランスの疾風（後書き）

シャルルの正体ばれるところは書かせていただきました。省いてもよかったです。シャルロット党である作者は書きたかったです。

大した内容の変化はありませんが。

感想等お願いしますm（――）m

第14話 シャルルの秘密と白亜の過去

Side ～夏～

「……………」

「……………」

かれこれ一時間はこうしているだろうか。俺の目の前にいる女子——
——というかシャルル本人なんだろうか——はお互いのベッドに
腰掛けて向かい合い、そのくせ視線はそれぞれさまよったまま無言
のときを過ごしていた。

「あー、その」

俺から声をかけると女子シャルルはびくつと身を震わせる。

「お茶でも飲むか？」

「う、うん。もらおうかな……………」

お互い、何かしら飲み物があつたほうが話しやすいと思ったのだろ
ここにきて初めて意見の合致を見た気がする。ともあれ、俺は電気
ケトルでお湯を沸かすとそれを急須へと注ぐ。

「……………」

「……………」

お茶が出来るまでの時間がまた沈黙だった。しかしまあ、仕方がないといえば仕方がないので、俺は早く茶葉が広がるのを願ってやまなかった。

「もう大丈夫だろ。ほい」

「あ、ありがとう——きやつ」

湯飲みを渡すときに指先が触れ合って、シャルルが慌てて手を引っ込める。そんなこんなで俺は思わず湯飲みを落としそうになり、握りなおした反動でお茶が手にかかってしまった。

「あちちつ。水っ、水っ」

「う、ごめん！大丈夫？」

「ま、まあたぶん。すぐに冷やしたから火傷にはならないだろ」

「ちょ、ちよつと見せて。……ああ、赤くなってる。ゴメンね」

シャルルは俺のそばに來ると強引に手を取ってお湯のかかった場所を痛々しげな表情で見つめる。

「すぐに氷もらってくるね！」

「ま、待て待て。その格好で外に出るのはマズイだろ。後で自分で取ってくる」

「でも——」

「それより、その……なんだ。さつきから胸が、な。当たってるんだが……」

「!?!」

やっと自分の体勢に気づいたのか、シャルルは俺から飛びのくように離れると胸を隠すように自分の体を抱く。

「……………」

若干弱々しくはあったが、シャルルはまさしく女子特有の抗議の眼差しを送ってきた。

「心配してるのに……一夏のえっち……」

「なあっ!?!」

しかし気のせいだろうか、シャルルの眼差しは抗議だけでなく、全体的には恥ずかしそうでそのくせどこかうれしそうな表情をしている。

「ふう……。ここまで冷やせば大丈夫だろ。じゃあ、まあ、改めて」

「その前に白亜を呼んできてくれない?」

「白亜?なんで?知る人は少ない方がいいだろ?」

「もう白亜にはばれちゃってるんだ……」

「マジかよ!?!」

「すぐに気づかれちゃったけど、ずっと誰にも言わないでくれたんだ」

「そうか……わかった。少し待っていてくれ」

そう言って俺は部屋を出て、隣の白亜の部屋に来た。

「白亜、少しいいか？俺の部屋で話があるんだが……」

「……わかった。織姫、少し行ってくる。何かあったら来てくれ」

「わかった。ゆつくりしてても大丈夫だよ」

「そうか。じゃあ少し行ってくる」

「いってらっしゃい」

戻って俺の部屋。

「シャルル、呼んできたぞ」

「ありがとう、一夏」

「お、おう」

「シャルル、なぜ俺を呼んだ？」

「それはね、今まで黙っていてくれた白亜にも教えなきゃいけないかなって思ってたね……」

「そうか……」

「じゃあシャルル。何で男のフリなんてしていたんだ？」

「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」

「うん？実家って言うと、デュノア社の——」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

「命令って……親だろう？なんでそんな——」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

……。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でISの適応が高いことがわかって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットやることになってね」

俺も白亜も黙ってシャルルの話を聞いている。

「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本低に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。本妻に人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれてたら、あん

なに戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声はちっとも笑っていないかった。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？だってデュノア社って量産機ISのシェアが世界第三位だろ？」

「一夏、デュノア社のリヴァイヴは結局第二世代型のISなんだよ。IS開発は物凄くお金がかかって、ほとんどの企業は国からの支援があつてやっと成り立っているところばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

「話を戻すね。「もういい」え？」

「もういい。事情はわかった。つまり、デュノア社は第三世代型のISを開発していたが、イグニツション・プランから除名され、国からの援助がなくなったため、シャルルを広告塔として送り込んだ。そして俺と一夏のISのデータを取ってこい。ってところだろう？」

「そうだよ。同じ男子なら日本で現れた特異ケースと接触しやすからってね」

話を聞く限り、その父親はシャルルを道具として扱っているってことか。それでシャルルは父親なのに他人行儀に話すのか。

「とまあ、そんなところかな。でもばれちゃったからきつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は……僕にはどうでもいいことかな」

「……………」

「……………」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘ついててごめんね」

深々と頭を下げるシャルルを、気づいたら俺は肩を掴んで顔を上げさせていた。

「いいのか、それで」

「え……？」

「それでいいのか？ いいはずないだろ。親が何だっというんだ。どうして親だからってだけで自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなこもんは！」

「い、一夏……？」

言葉が止まらない。なにより、感情が抑えられない。

「親がいなければ子供は生まれぬ。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！ 生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親

なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

言いながら気づいた。きっとシャルルのことを言ってるんじゃない。たぶん自分のことを言ってるんだ。

「一夏、落ち着け」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなってしまつて」

「らしくないぞ、一夏。どうしたんだ？」

「俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

「……………」

おそらく資料で知っていただろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳無さそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしなくてもいい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親なんて今更会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって……時間の問題じゃないのかな。フランス政府も事の真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないのかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

「……だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

暗記させられたテキストの文がすらすらと言えた。

「——つまり、この学園にいれば、少なくとも3年間は大丈夫だろ？それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけれられる。別に急ぐ必要もないだろ」

「あ！白亜が言ってたことってそういうことだったのか」

「ああ。あの時は理由は知らなかったが、デユノアが関係していることだけは想像できたからな。考えるだけの時間はあるってことは伝えておこうと思ってたな」

「それにしても、一夏はよく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「……白亜に覚えさせられたからな」

「そうなんだ。ふふっ」

やっとシャルルが笑った。

「ま、まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えてみてくれ」

「うん。そうするよ」

コンコン。

「「!?!」」

「一夏さん、いらっしやいます? 夕飯をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか?」

いきなりのノックと呼びかけに俺とシャルルは身をすくめる。

「一夏さん? 入りますわよ?」

まずい。まずいまずい、それはとてもまずい。今のシャルルの姿を見たらどんなに鈍い奴でも女とわかってしまう。

「ど、どうしよう?」

「と、とりあえず隠れろ」

「落ち着け。布団の中にも入れ」

「あ、ああっ、そっか!」

あわただしく動く俺とシャルル。冷静な白亜のおかげで事なきをえた。

「よ、ようせシリア！なんだ？どうした？」

「一夏さんはまだ夕食をとっていないようでしたので、ご一緒しようかと思ひまして。偶然わたくしもまだでしたので」

「そ、そうか。シャルルは具合が悪いみたいで、俺が看っていたんだ。飯がまだだから白亜に頼んでシャルルを看てもらって、その間に夕飯を食べに行こうと思っていたんだ」

「そういうことだ。ゆっくりして来い。シャルルは俺が看ておくから」

「お、おう。悪いな」

「デュノアさん、お大事に。さあ一夏さん、参りましょう」

俺は腕をとられ、部屋を出た。

S i d e 一夏 out

S i d e 白亜

「行つたか。……シャルル、お前一夏に惚れたろ？」

「ふえっ！？な、なんでわかるの！？」

「お前、一夏に対しての笑顔が今までで一番偽りがないように見えた。大方、初めて自分のために怒ってくれた一夏に惚れたんだろ？」

「……そんなところかな。道具として生きてきた僕に初めて僕のために怒ってくれた。優しくしてくれた。そんな一夏にきつと惚れちゃったのかな」

「俺は応援してやる」

「ありがとう、白亜」

そして、俺がシャルルの話を聞いて考えたことを告げた。

「シャルル、お前が望めば、デュノア社がやってきたことを世界にばらす事ができる。デュノアを消すこともできる。それに父親との縁を切ることもできる。どうする？シャルル・デュノア」

「例えばだけど、あの人との縁を切ったら僕の名前はどうなるの？」

「デュノアのままでもいい。俺の名をやってもいいが、それはお前が望んだ場合だ。偽りの名前をつけることもできる」

「白亜の名って黒神？」

「それでもいい」

「それでも？」

「俺の名は偽名だ」

「ぎ、偽名!？」

「俺の本当の名は過去と共に捨てた」

「そ、そうなんだ……」

「で、どうするんだ？お前にとってデュノア社はどうでもいいんだろ？」

「……少し、考えさせて」

「そうか」

「ねえ、白亜。何で僕にそこまで考えてくれるの？」

「俺とお前の生き方が似ていたからだ」

「それって白亜も道具だったてこと？」

「……俺の過去を話したほうがわかりやすいだろう。誰にも言っただけでも聞くか？」

「……うん」

「……俺は道具として創られた人間だ。いや、人間ではなかった」

「人間じゃなかった？」

「俺はあるプロジェクトによって生み出された人外だ」

「プロジェクト？」

「『プロジェクト虚』^{ホロウ}。それは人間を遙かに凌駕する戦闘能力を持つ、生物兵器を作るプロジェクトだ。そして、プロジェクト虚によって生み出されたものは人とはかけ離れた姿をしていた。その姿は化け物と表したほうがいいだろう。胸には大きな孔があり、そして仮面をつけていた。そして、その化け物は人間を遙かに凌駕する戦闘能力を持っていた。『ヴァストローデ級』、『アジューカス級』、『ギリアン級』の虚。その化け物じみた姿を人に似せ、さらに能力を上昇させようとしたのが『プロジェクト破面』^{アランカル}」

「プロジェクト破面……」

「大丈夫か？嫌ならやめるが」

「大丈夫だよ、続けて」

「そうか……プロジェクト破面によって変化を遂げた虚は割れた仮面をつけた。破面となった虚は孔の位置が変化した。しかし、プロジェクト破面は不完全だった。虚の変化にはブレがあり、完全に人型になるものは少なかった。孔と破面化はあったが、それ以外は人間そのものだった。そのため、変化によって階級があった。『ヴァストローデ級』、『アジューカス級』、『ギリアン級』。その中で完全に人型になれたのはヴァストローデ級だけだった。それ以外は少なからず虚の特徴を持っていた。虚の特徴を持つものほど理性、知性が低かった。破面は人間に近い感情と思考を持つ。そして破面の中で戦闘能力が高い10人の破面は『十刃』と呼ばれた」

「十刃って白亜のISの名前だよね？」

「そうだ。この話はもう少し後だ。話を戻す。十刃には体のどこかに110数字を刻み、『フラシオン従属官』と呼ばれる直属の配下を持つ権利があつた。従属官は何体でも従えることができ、数字持ちヌメロス以下の成体破面を上限無しで従えることができた。」

「数字持ちって?」

「数字持ちは、成体の破面のことだ。数字持ちには111の数字が与えられた。数字持ちの戦闘能力はブレがあり、強い者と弱い者がいた」

「話を戻していいよ」

「十刃の中には従属官を選ぶ者と、全く選ばない者がいた。従属官は大した関係はない。そして十刃にはそれぞれが人間が死にいたる要因である十の死の形を司っていて、それらが各々の能力・思想・存在理由となっている」

「ねえ、白亜。もしかして白亜って……」

気づいたらしく、シャルルが聞いてきた。

「そうだ。俺は十刃だった。俺が司っていた死の形は『クア虚無』。第4十刃、ウルキオラ・シファア。それが俺の本当の名だ。そしてあるとき、一藍染という男と共に他の破面たちをすべて殺した」

「その藍染って一体何者なの?」

「藍染はプロジェクトに参加していた研究者だった」

「反逆者ってこと？」

「そうだ。なぜか俺と藍染はお互いに認め合っていた。あるとき俺に施設を潰さないかと持ちかけられた。内容は藍染が持つ力と俺の帰刃で、施設諸共消す。俺はそれに乗った」

「白亜の仲間だったんじゃないの？」

「俺の司る死の形は何だった？」

「えっと……あつ、虚無……」

「そうだ。だから、俺は慕っていた藍染に協力した。すべてを破壊した俺は十刃としての力と、十刃たちの力を模造し、リミッターとしてISに封じ込めた。そのときに俺の胸にあった孔を塞ぎ、破面化したときの仮面が消えた」

「だから十刃の待機状態は仮面や刀なんだね」

「このISを完成させたのは、束とあつてからだ。大分欠陥機だったからな。リミッターの役割しかなかった。そしてそのときに織姫とであり、心を知った」

「今の白亜がいるのはその藍染って人と篠ノ之博士、織姫さんのおかげなんだね」

「ああ」

俺は元々人ではなかった。これが伝わればよかった。

「そろそろ一夏が来るはずだ。このことは誰にも言つなよ」

「わかってるよ」

「それと一応考えておいてくれ」

「うん。わかった」

しばらくして、

「た、ただいま……」

「あ、一夏おかえり。——ってどうしたの？なんだかふらふらし
ているけど」

「ああ、いや、気にしないでくれ。それよりお腹すいただろ。焼き
魚定食をもらってきたんだが、食べられるか？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

「じゃあ、俺は部屋に戻らせてもらつ」

「おう。ありがとな、白亜」

「ありがとな、白亜」

「またな」

そう告げて部屋に戻った。

S i d e ~ 白亜 ~ o u t

第14話 シャルルの秘密と白亜の過去（後書き）

白亜の過去は急な思いつきなので、あまり深く考えていません。
変なところがあると思いますが、そこは目を瞑っていただけると助
かります。

アドバイス等、お願いしますm（　　）m

多少変更しましたが、大した変化はありません。
少しずつ変更を頑張っていきます。

第15話 黒い雨の襲撃

S i d e 〱 白亜 〱

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソはついてないでしょうね!？」

月曜の朝、教室に向かっていた俺は廊下にまで聞こえる声になぜか警戒した。

「何の騒ぎだ？」

「なんだ？」

「さあ？」

隣にいるのは一夏とシャルル（男装）である。

「本当だってば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき——」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃああつ!？」」「」」

このバカ……。話しかけなければ内容が聞けたのにな。

「で、何の話だったんだ?俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと」

女子たちが散っていった。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

「一夏が邪魔しなければわかっていたさ」

Side～白亜～out

Side～第～

（な、なぜこのようなことに……）

今噂になっているのは『学年別トーナメント優勝者は織斑一夏と交際できる』だ。

誰かのせいで白亜とシャルルも噂になっているが、私にはどうでもいい。

（あの約束は私だけであろっつ！）

大声で言ってしまったのが間違いだっただのであろっつか。
今では学園中に知れ渡っている。

（まずい、これは非常にまずい……）

（と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない。今回はあのときの
ようには——）

（あの時とは違う。大丈夫。大丈夫……なはずだ）

そんな思いに更けていた。

S i d e 〱 幕 〱 o u t

S i d e 〱 一 夏 〱

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと——」

「第三アリーナだ」

「「わあっ!?!」」

そこにいたのは第3だった。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことではびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているのではないが……」

頭を下げるシャルルに、氣勢を削がれたようだ。

「ともかく、だ。第三アリーナへ向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬線もできるだろう。白亜はどうしたんだ？一緒ではないのか？」

「あー、白亜はなんか用があるから先に行ってるだつてさ」

さつきから廊下を走っている生徒がいる。どうやら騒ぎは第三アリーナで起きているらしい。

「なんだ？」

「何かあったのかな？こっちで先に様子を見ていく？」

観客席へのゲートか。確かに普通にピットに入るよりも早く様子を見ることができそうだ。

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。でもそれにしては様子が――」

ドゴオンッ！

「「「!?」」」

突然の爆音。そしてそこにいたのは

「鈴！セシリア！」

ラウラ・ボーデヴィツヒが鈴とセシリアを圧倒していた。そして、二人のISはかなりダメージを受けているようだった。

「何をしているんだ？——お、おい！」

一方的な暴虐が始まり、

「ああああっ！」

シールドエネルギーはあっという間に減って、機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域へと到達する。これ以上ダメージが増加しISが強制解除されることがあれば、そのときは冗談ではなく生命に関わる。しかしラウラは攻撃の手を止めない。

普段と変わらない無表情が確かな愉悦に口元を歪めたのを見た瞬間、頭の中で何かのゲージが振り切れた。

「おおおおっ！」

白式を展開し、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動させ、アリーナのバリアーを切り裂いた。

同時に瞬時加速を使い、ラウラへ突撃する。

「その手を離せ！……！」

「ふん……感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

零落白夜のエネルギー刃が届く寸前で、俺の体が吹っ飛ばされた。

「っ！？なんだ!？」

そこにいたのはISを起動させていない白亜だった。

Side～一夏～out

Side～白亜～

「一夏、鈴とセシリアを非難させる」

「白亜！コイツは俺が!」

「やるならトーナメントでやれ。今は俺が相手をする」

「……任せたぞ、白亜」

「早くしろ」

瞬時加速を使い、鈴とセシリアは一夏の手によってこの場から離れた。

「女、覚悟はできているんだろうな？」

「この私とシュヴァルツァ・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない」

「いつまでその口が叩けるか見ものだな」

斬魄刀を抜き、ラウラの前に立つ。

「来い。実力差を見せてやる」

「そのふざけた口、叩けないようにしてやる！」

ラウラが飛び出そうとした瞬間、俺たちの間に影が割り入ってきた。

ガキンッ！

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

一夏が叫んだ。それもそうだろう。ISの補助無しでIS用近接ブレードを扱っているのだから。

「模擬戦をやるのは構わん。——が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

「織斑、黒神、デユノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ」

「夏は素で答えやがったな。どんだけ惚けてんだ。」

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい！」

「それでいい」

「僕もそれで構いません」

「では、学年別トーナメントまで私闘を一切を禁止する。解散！」

「パンツ！とブリュンヒルデが手を叩く。」

「それと黒神、ISを起動せずにISの相手をするな」

「コイツ如きなら普通にやり合えるが？」

「貴様も化け物だな」

「化け物だからな……」

「？お前もとつと行け」

「そうさせてもらっ」

「……………」

「……………」

ところ変わって保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。

ベットの上では鈴とセシリアが視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けられなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

あの状況でどの口が言っただろうか。

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「こんなのけがのうちに入らな——いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味——つつうつ！」

本当にこいつらはバカだな。

「バカってなによバカって！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏も同じこと考えてたんだな。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「だろうな」

「ん？」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。一夏は聞き取れなかったみたいだが、それ以外は聞き取れたようだ。だって

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

こんな反応したら誰でもわかるだろ。一夏はわかってないだろうがな。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたましようっ！」

ひったくるように受け取って、ごくごくと飲み干した。

「ま、先生も落ち着いたら帰ってもいいって言ってるし、しばらく休んだら——」

トトトトトトトシ………！

「な、なんだ？何の音だ？」

まるで地震だな。廊下から聞こえてくる。

ドカーン！と保健室の扉が吹き飛んだ。扉って飛ぶんだな。

「織斑君！」

「黒神君！」

「デュノア君！」

女子の大群が保健室に雪崩れ込んできた。俺たちを見つけるなり手を伸ばしてきた。

「な、な、なんなんだ！？」

「なんのようだ？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「」「」「これ！」「」「」

女子の大群が出してきたのは出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な。なにに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来な

かった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは――」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

そしてまた手を伸ばしてくる。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組みましょう、黒神君！」

「私と組んで、デュノア君！」

一年の女子が男子と組もうと来たのか。

「え、えっと……」

シャルルは女だ。誰かと組ませるのはまずい。

「俺は織姫と組む。それと一夏はシャルルと組むらしい。諦めろ」

しーんとした。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりかはいいし……」

「男同士って絵になるし……ごほんごほん」

「井上さんずるいー！」

女子たちは少しずつ保健室を出て行った。

「あ、あの、白亜——」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

ああ、鈴とセシリアが喰い付いて来たよ……

「あ、あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

出れるのか？その体で。

「ダメですよ」

ほら来た。

「お二人のISの状態をさつき確認しましたがけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「ISを多少時間がかかるが、修復させることは可能だぞ」

「「「え？」」」

「織姫の持つ専用機『六花』にはISの装甲とシールドエネルギーを回復させる能力がある。それを使えばISは直せる。問題はトナメントまでにお前らの体が治るかの方だ」

「治るわよ！」

「治してみせますわ！」

「そうか。山田先生。ブルー・ティアーズと甲龍を持ってきてくれ。俺は織姫を連れてくる」

「わ、わかりました！」

「少し待ってろ」

響転を使って、部屋に戻った。

「織姫、いるか？」

「いるよ。白亜、どうしたの？」

「六花の力を使う。少し来てくれ」

「わかった」

織姫の手をとり、響転を使う。

「連れて来たぞ」

「急に消えなかった？」

「急に現れませんでした?」

いきなりの疑問かよ。

「響転だ。山田先生はまだか?」

「持って来ましたが、もう来てるんですか!?!」

「今さっき戻ったところだ」

「なにをすればいいの?」

「ブルー・ティアーズと甲龍を治してくれ」

「わかった。――あやめ、しゅんおう舜桜、お願い! そくてんきしゅん双天帰盾!」

織姫は頭の耳飾に指を当て、双天帰盾を担う二体を呼んだ。

「まかせて」

待機状態のブルー・ティアーズと甲龍を盾で包む。

「少し時間かかるけど、治るよ」

「ありがとう、織姫!」

「そうです! ありがとうございます、織姫さん!」

「いま少しやるけど、完全に治るのは明日になるかな。今日は二人

のISを借りるけどいい?」

「構わないわ。むしろこっちからお願いするわ!」

「トーナメントに出ればそれでいいですわ!」

「しばらくは体を休めろ。でないとISが治っても出れなくなるぞ?」

「「わかってるわよ(ますわ)!」」

「そうか。俺は戻るぞ」

「私も行くよ、白亜」

「それなら僕も」

「なら俺も戻るか」

そういつて俺たちは保健室を出た。

「織姫、悪かったな」

「気にしないでいいよ。あまり六花も使わなかったしね」

「それと、トーナメント俺と組まないか?」

「いいよ」

「あ、先に戻っていてくれ。一夏たちと話がある」

「わかった。先に戻ってるね」

すたすたと走っていった織姫。

「勝手に言ったが大丈夫だったのか？」

「ん？ああ、ペアのことか。助かったぜ、ありがとな」

「僕は嬉しかったかな」

「そうか。それならよかった」

「白亜が言わなかったらどうなってたことやら」

「俺がいなくてもお前なら自ら名乗り出ただろうな」

「そうか？」

「一夏、やさしいからね」

シャルルにセリフを取られた。

「と、ところで、あれだ。シャルル、俺らしいときは無理に男子口調にしないでいいんじゃないか？」

「う、うん。僕——私もそう思うんだけど、ここに来る前に『正体がばれないように』って、徹底的に男子の仕草や言葉遣いを覚えさせられたから、すぐには直らないかも」

「話している途中悪いが戻らせてもらおう」

「おう」

俺が戻ってから

「女の子っぽくない、かな？」

と聞こえたから、シャルルも積極的に出たのだろう。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

第15話 黒い雨の襲撃（後書き）

原作ブレイクをさせてもらいました。織姫と六花があるなら使わない手はないので、トーナメントには鈴とセシリアも参加します。感想等お願いします。

第16話 学年別トーナメント1（前書き）

部活があつたり、他にやることもあつたので更新が遅れました。
呼んでくださる方々、申し訳ありませんでしたm（| |）m

第16話 学年別トーナメント1

Side 白亜

6月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室のモニターを見て、一夏が呟いた。まあ各国政府関係者とかの顔ぶれが一堂に会してるんだから一夏が呟くのもおかしくはない。俺は興味がない。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「おそらく、男子である俺と一夏にはチェックが入ってると思うがな」

「ふーん、ご苦労なことだ」

一夏も興味がないようだ。

「一夏と白亜はボーデヴィツヒさんとの対決だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「俺は誰が相手だろうと興味はない」

ちなみに、鈴とセシリアは体調も回復し、ISも織姫のおかげで修復されたため、参加している。

「そろそろ対戦表が決まるはずだね」

突然のペア対戦への変更がされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。

本来なら前日にはできるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選くじで作っていた。

「対戦相手が決まったようだぞ」

モニターがトーナメント表に切り替わる。

「——え？」

一夏とシャルルが声を上げた。

「まあ、がんばれ」

一夏達の相手がラウラ・第ペアだったからだ。

俺と織姫は初戦。相手は鈴・セシリアペアだ。どう遊ぶか。

ちなみに、ブリュンヒルデの命令により、十刃の帰刃に制限をつけることになった。9？7までだ。それ以降の帰刃には回復機能もついているからな。余計に私刑になる。

「じゃあ、軽く遊んでくる。一夏はラウラのAIC対策でも考えておくんだな」

「おう」

「がんばってね」

アリーナに出て、鈴とセシリアに向き合う。
一応聞いておくか。

「鈴、セシリア、どうする？やるか？」

「やるに決まってるでしょうが（決まっていますわ）！」

「なら、容赦なく潰させてもらう」

「怪我だけさせないようにしてよ」

織姫からの忠告が入る。やろうと思えば簡単に殺れる。

試合開始まであと五秒。四・三・二・一——開始。スタート

「さて、さっさと殺るか。帰刃？オクターバ8、フォルニカラス啜れ邪淫妃！」

俺の背中に生えるかのように、4本の翼が出現する。

「っ！出たわね、帰刃」

「それも始めて見ますわね」

「言っておくが帰刃にあと8種類の刃があるぞ?」

「相変わらず規格外ね」

「しかし、負けるわけにはいきませんわっ!」

隣で織姫が苦笑していた。こいつらが意気込む噂の正体を知っているようだ。後で聞か。

「試合は開始しているんだ。やるぞ」

そういつて俺は動き出す。

鈴とセシリアも同様に動き出した。

俺は翼を広げる。

「マッドショット!」

翼にある無数の袋から泥弾を放つ。

「っ!? 避けきれない!」

「ふざけた広範囲攻撃ですわね……」

3種類の射撃はあるが、これは一番遅い射撃だ。

「今度は私たちの番よ!」

鈴が前衛、セシリアが後衛。鈴は《双天牙月》を構え接近し、セシリアが^{ブルーティアーズ}B-Tを展開して射撃体勢に移動する。

「さんてんけつしゅん三天結盾！」

織姫が結界の盾を呼び出した。

レーザーが飛んでくるが、一部しか回避しない。
なぜなら、三天結盾が俺を護っているからだ。

翼を使い、鈴と衝突する。

「その翼、射撃だけじゃなかったんだ」

「十刃の帰刃を侮るな」

「っ！？」

翼を広げ、鈴を縛る。そして、鈴に触れる。

「これが邪淫妃の——能力だ」

鈴を離し、4本の翼を球状にする。

「「！？」」

鈴とセシリアが驚愕の表情をする。

——なぜなら、球状の翼から出てきたのは、甲龍を纏った鈴だったのだから。

「邪淫妃の能力だ。相手そっくりのクローンを作り出し、操ること

ができる。つまり、この鈴はおまえ自身だ。——ただし、俺が操る分、本物より強かったりするがな」

「とんでもない能力ね……」

「まあ、その分集中力が落ちるが」

そのデメリットを織姫の盾が補うから問題ない。

「今からは3対2の戦いだ」

「ちなみに言うと、この能力で生み出されたクローンは白亜を倒すか、白亜の意思でしか消せないよ」

何ばらしてるんだ、織姫は……。問題ないけど

「続けようか」

クローン鈴を操り、鈴と戦わせる。
俺と織姫はセシリアと戦い始めた。

「こてんざんしゅん
孤天斬盾！」

織姫は椿鬼を呼び出し、セシリアに打ち込む。

「くう、厄介ですわね……。白亜さんと織姫さんを同時に相手するなんて……」

クローンを鈴とやらせているうちにセシリアを片付けるか。

「ポイズンショット」

翼の袋から毒弾を撃つ。

この毒には種類があり、今撃ったのはIS用の麻痺弾だ。

もちろん、乱射したためセシリアは回避したが避けれるはずもなく、数発喰らった。

「つつつ……。っ！？う、動けない！？」

「IS用の毒弾だ。コイツは麻痺毒だ。しばらく動けなくなる」

「ごめんね。セシリアはここでリタイアだよ」

鈴はクローンに圧され気味だった。

「椿鬼、お願い！」

「虚閃」

織姫の孤天斬盾がセシリアに当たった後、止めに虚閃が直撃。

セシリアはエネルギーが切れてリタイア。

「鈴はクローンに圧されているようだな」

そのままにしておくのはいいが、時間がかかるから止めておく。

虚弾を放ち、クローンを消した。

「くっ！？なによ、一体！」

「お前にも退場してもらおうか」

「白亜……。セシリアはやられたようね……」

「お前もすぐに同じようにしてやる」

「せめて一撃は入れてやる！」

織姫の三天結盾のおかげもあるが、回避したりしたため、一度も攻撃を受けていない。

「セシリアと同じように終わらせてやるよ——ポイズンショット」

セシリアのときと同様に麻痺毒を撃ち放つ。

避けれるはずもなく、セシリアと同様に被弾する。

「くっ、動けない……」

「じゃあ、墜ちてくれ」

袋から形成される砲身を、動きが止まった鈴に向ける。

「マッドショット」

すべての袋からは発射しない。なぜなら、すべての攻撃が通ったなら普通に怪我するから。

「勝者——黒神白亜・井上織姫ペア」

あまりの一方的な攻撃と、規格外な俺の戦闘を見てか、アリーナは静かだった。

「お疲れ、白亜」

「お疲れ様」

「ああ。次はお前らだ。まあ、がんばれよ。避ければ攻撃のチャンスは生まれる。特に一夏、零落白夜はシールドエネルギーを使う。攻撃を受け続けたら何もできずに終わるぞ」

「わかってるさ。お前のスパルタ弾幕から逃げ続ければ嫌でも回避できるようになるさ」

「そこまで言うなら、負けたらなんかしてもらうことにしよう」

「うつ……。い、いいぜ。勝てばいいんだから」

「冗談だったんだが。まあ、考えておくか」

「冗談だったのか……。乗らなければよかった……」

「今更遅い。言ってしまったものは仕方がない」

いつの間にか一夏は跪いていた。見なかったことにしよう。

「シャルル、ラウラは一年では俺を除くと現時点では最強だ。一夏

をサポートしてやれよ」

「言われなくても大丈夫だよ」

「そうか」

俺とあたるのはどっちになるんだろうな。

S i d e ～ 白 亜 ～ o u t

第16話 学年別トーナメント1（後書き）

更新が遅くなったのにそこまで長くないですね。

ちなみに、技名のマッドショットは邪淫妃を使うザエルアポロがマッドサイエンティストだからです。結果パクリになりましたが、気にしないでください。

アドバイス等お願いしますm（　　）m

第17話 学年別トーナメント2 ～終幕～

Side ～夏～

「こつも早く当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こつちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒。四・三・二・一、——開始。

「叩きのめす」

開始直後にラウラに向かって直進する。

「はあああっ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。AICが来る。

AICを受けた鈴とセシリアに話を聞き、白亜にも聞いた。対策を考えた結果、二人で闘うことにした。だから、先に箒を倒す。

『急停止からの離脱を繰り返し、極力ダメージを受けないように気をひきつける。』

その間に、シャルルに箒を倒してもらう。』

これが俺とシャルルが行き着いた結論。

「ちょこまかと……」

いい加減ラウラが痺れを切らしてきた。

ワイヤーブレードを使って攻撃を仕掛けてくる。

本当に白亜に感謝する。

虚閃と虚弾の弾幕鬼ごっこがなければ避けることができなかったであろう。……アレはマジで怖い。

5分は逃げ続けただろうか。ラウラも本気で捕らえようとしてくる。ちなみに俺は逃げているだけで一度も攻撃をしていない。

そんなとき、ついにA I Cに捕まってしまった。

「やっと捕らえた……。ちょこまかとしていたが、消えろ」

ラウラの肩にある大型のレール砲が向けられる。

シャルルはまだか！？ ちょっとヤバイ……。

発射寸前に、ラウラの背後から銃弾の雨が降り注いだ。その銃弾により、大型レール砲は爆散した。

「ちっ……!!」

「シャルル、箒は？」

一応聞いておく。

「あっちでお休み中」

これで二対一だ。

「やるぞ、シャルル！」

「うん！」

俺は瞬時加速を使い、一気に間合いを詰める。

「その程度……」

俺はAICにつかまった。

ワイヤーブレードとプラズマ手刀で仕掛けてきた。

「もう忘れているならお前はダメだな」

「……なに？」

また背後からの銃弾。

シャルルの六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》の射撃。

ラウラはそれを喰らって、俺への集中が解ける。

俺はこの隙に零落白夜を発動し、切りかかる。

しかし、ラウラはワイヤーブレードを使って俺の斬撃を防いだ。

そしてラウラは瞬時加速を使い、間合いを取る。

「貴様ら……っ！」

ラウラが苛立ちの表情を見せる。

そして、ラウラが再び動き出した。

ワイヤーブレードを使って俺を牽制し、シャルルに攻撃を仕掛け始めた。

「くっ！これじゃあ近づけねえ……」

牽制のせいで近づこうにも近づけなかった。
さすがのシャルルも段々圧され始めた。

「うおおっ！」

雄叫びを上げ、ワイヤーブレードを切り払い、無理矢理近づいていた。

ラウラは俺に気づき、シャルルを蹴り飛ばした。

「やはり貴様をどのような形でも消す！」

すぐに体勢を戻し、射撃を始めたシャルルを気にせずにプラズマ手刀で畳み掛けられた。

「ぐっ！」

すぐに圧され始め、徐々にシールドエネルギーが削られていく。

「一夏はやらせないよ」

シャルルが瞬時加速を使ってラウラに急接近した。

「なに！？」

ラウラも驚いていた。元々シャルルは瞬時加速は使えなかったはずだ。なのに使った。

「今初めて使ったからね」

「な、なに……？まさか、この戦いで覚えたというのか！？」

シャルルの器用さは飛び抜けている。これはもうシャルルの才能だな。

「しかし、第二世代型の攻撃力ではこのシュヴァルツェア・レーゲンを墜とすことなど——」

「この距離なら、外さない」

シャルルの盾の装甲がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。六九口径パイルバンカー《グレー・スチール灰色の鱗殻》。通称

「『シールド・ピアース盾殺し』……！」

シャルルはラウラの腹部にパイルバンカーを叩き込んだ。

ズガンッ……！！

「ぐうっ……！」

ISのエネルギーシールドが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をこっそり奪う。しかも相殺しきれなかった衝撃が深く体を貫いたのだらう、ラウラの表情に苦悶に歪んだ。

《灰色の鱗殻》はりボルバー構造のおかげで連射ができる。

ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！

連続で3発撃ち込まれ、ラウラの体が大きく傾く。機体にも紫電が走り、ISの強制解除の兆候を見せ始める。

——だが次の瞬間、異変が起こった。

S i d e ー 夏 ー o u t

S i d e ー ラウラ ー

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！）

確かに相手の力量を見誤った。それは認める。

（しかし、負けるわけにはいかない……）

嘗ての私に『出来損ない』の烙印があつたとき、織斑千冬のおかげで、深い闇から救われた。

その強くて凛々しいあの人に汚点を与えた織斑一夏が憎い。

（だから、敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で完膚なきまでに叩き伏せると！）

あの男は、まだ私の目の前で動いてるのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。そのために——

(力が、欲しい)

ドクン……

『——願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、私など——空つぽの私など、何から何までくれてやる！

(だから、力を……比類なき最強を、唯一無二の絶対を——私に
よこせ！)

D a m a g e L e v e l …… D .

M i n d C o n d i t i o n …… U p l i f t .

C e n t i f i c a t i o n …… C l e a r .

《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》 …… b o o t .

S i d e ～ ラ ウ ラ ～ o u t

S i d e ～ 白 亜 ～

「ああああああっ！……！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい雷撃が放たれ、シャルルの体が吹き飛ばされた。

「っ!？」

目を疑った。ラウラの纏っていたISがどろどろに溶け、ラウラの全身を覆ったからだ。

普通のISではありえない。

通常のISは『初期操縦者適応』と『形態移行』の二つだけしかない。

ラウラを覆いつくしたシュヴァルツェア・レーゲンだったものは、変化し終わった。

そして、そこに立っていたのは、黒い全身装甲の物体だった。

そのISを見た一夏は、斬りかかったが、弾かれ、吹き飛ばされた。

「……………がどうした……………」

まずい！

「それがどうしたあっ!」

怒りをあらわにして再び斬りかかった——が、俺が一夏を吹き飛ばした。

響転を使い、一夏の目の前まで来たのだ。

「何しやがる!白亜!—!」

「どうした、一夏！落ち着け」

「落ち着いてられるか！あれは……あれは千冬姉のデータだ。千冬姉だけのものなんだよ！それを……アイツが！」

黒いISは微動だにしない。攻撃に反応して行動する自動プログラムか。

「それに、あんなわけかんねえ力に振り回されているラウラも気に入らねえ。ISとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」

「それなら今のお前にやらせるわけにはいかない」

「な、なんでだよ、白亜！俺は——」

「怒りで我を忘れている今の貴様では死にいくようなものだ」

『非常事態発令！トーナメントは全試合中止！状況をレベルDと認定、来賓、生徒はすぐに非難すること！繰り返す！』

「一度頭を冷やせ」

「……………悪い白亜。もう大丈夫だ」

「シャルル、お前の残りのエネルギーを一夏に渡せるか？」

「たぶんできると思うよ」

「なら任せた。一夏、負けるなよ？」

「当たり前だ。二人にここまでされて負けるわけにはいかねえ」

「じゃあ、負けたら明日から一夏は女子の制服で通ってね」

「面白いな。それに決めた」

「うつ……！いい、いいぜ？なにせ負けないからな！」

シャルルのエネルギーは渡せたようだ。

「じゃあ、行ってくる」

「勝ってこい、一夏」

「じゃあ、行くぜ偽者野郎」

一夏の右手、《雪平式型》を握り締めた。

「零落白夜——発動」

エネルギー無効化攻撃の刃が現れた。そして変化した。

本来の実体刃は、日本刀の形をした零落白夜のエネルギー刃になった。

（展開装甲が発動したか）

ギンッ！

「ただの真似事だ」

腰から抜き放たれた横一闪、すぐに頭上に構え、縦に真っ直ぐに相手を切り裂く。

「ぎ、ぎ……ガ……」

真っ二つに割れたISからラウラが現れた。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏は崩れかかるラウラを抱きかかえて、呟いていた。

Side 〱 白亜 〱 out

第17話 学年別トーナメント2 〽️終幕〽️（後書き）

学年別トーナメント終了です。

更新が毎日できなくなりそうです。

感想等お願いします。

第18話　さらなる転校生

Side 白亜

「久しぶりだね、ウルキオラ」

「その名は力と共に封印したぞ、総護。今は黒神白亜だ」

目の前にいるのは藍染総護^{あいぜんそうご}。過去に俺と共にプロジェクトを破壊した研究者だ。

「まさかお前がこんなところでてくるとは思わなかったぞ」

「久しぶりに君を見たくなくてね」

ちなみにここは人通りの少ない通路だ。

「お前の崩玉はどうだ？」

「さらに強化したよ。篠ノ之束、彼女には感謝しないとね。彼女の発明したISのおかげで私の力はさらに強くなった」

「それは俺もだ。まあ、俺の場合は力を封じるための足枷なんだから」

「それのおかげで君は、破面の力を持ったまま人間になれたのだけだね」

「束に会っていないければ、力が大幅に失われたままだった。お前の

技術を持つてしても、俺を人間にするのが限界だったからな」

「それは本当に驚いたよ。私の技術にさらに手を加えて十刃を一人で補えるほどの性能を完成させた」

「十刃のデータは俺と総護が入れたものだが、束はそれをまとめ上げた」

「君の十刃は私達3人がいなければ完成しなかった。君の第4十刃クアトロエスパードの力があつたからできたんだ。これを複製することは不可能だ」

「十刃の力は必須だったな。どの力であれ、本物の十刃の能力が必要だ」

だから、俺しか十刃を扱えない。そして、俺から十刃が離れれば、俺は破面に戻る。

「そんなことだけに来たわけじゃないはずだ」

「そう。私が来たのは君に伝えておかなければいけないことがあるからだ」

「態々お前が来るほどのこととはなんだ？」

「プロジェクトが復活した」

「っ!？」

「亡国企業と虚圏ウェコムンドが絡んだ」

「虚圏は俺達が消したはずだ。なぜここで絡んでくる」

「それは私にもわからない。ただ、何者かの手によってデータが流出し、再びプロジェクトが動き出した。それだけがわかっていてとだ」

「データがあってもあれは難しいはずだが……。まさかお前が絡んでいることはないよな」

「自ら消したプロジェクトをまた進めるはずがないだろう。どこかの頭の回る奴がリーダーとなってやっているのだろう。私も君のもとへ行く。だから、手伝ってくれ」

「お前から頼み事をされるとはな。だが、あのプロジェクトは存在してはならない。協力しよう」

「それと、前に頼まれたデュノアの娘の件は大丈夫だよ」

「そうか。なら、臨海学校の前には来たほうが無難だろう」

「それまでには行けるさ」

「じゃあな。楽しみにしているよ」

「ああ」

総護が来るのか。面白いことになりそうだ。

「探したよ。白亜」

「どうした、シャルル？」

「今日から大浴場が使えるようになるんだって」

「俺は遠慮しておく。やることがあるのでな」

「たいしたことは無いんだがな。」

「それと、デュノアと縁は切れたそうだ」

「ホント!？」

「俺の知り合いに頼んだら、できたそうだ。本当に縁を切るだけでよかったのか？」

「……うん。あの人には道具として使われてきたけど、そのおかげでみんなに出会えた。だから、縁を切るだけにしたんだ。それがあの人への最後のお礼だよ」

「礼なんてする必要はないのだがな。シャルルがそれでいいのならいいが」

「シャルルの親がしてきたことは俺は許すことはできない。しかし、被害者であるシャルルが許すかどうかは決めることだから、俺がやれることはここまでだ。」

「そうだ、シャルル。黒神の名をつけるとして、兄妹の関係でいいのか？」

「うん。それでいいの」

「そうか。で、何時転向するんだ？」

「明日、かな」

「明日か。今日中にやれるだけ一夏にアプローチしておけよ」

「う、うん……」

翌日

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生はふらふらだった。まあ、部屋割りに頭を悩ませているのだろう。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を二人紹介します。一人は転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」

クラスがざわめく。当たり前だな。理由を知っている俺はともかく、転校生がまた来るのだから騒がしくなるのは当然だ。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

「失礼する」

来た。

「黒神シャルロットです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

「藍染総護だ。白亜の友人だ。よろしく頼む」

スカート姿のシャルロットと、総護が挨拶をする。

「「「きゃあああああっ！」「」「」

女子たちの黄色い歓声。

「男子がまた来た！」

「やさしそうな雰囲気！」

「地球に生まれて良かったー！！！」

「4人目の男子！じゃなくて、3人目の男子！……」

そこで気づいて、シャルロットの挨拶を思い出したのか視線が俺に刺さる。

「家の都合により、シャルロットは縁を切ることになった。だから、俺は兄妹として引き取った」

一応説明しておく。

「黒神君って私達と同一年なのに養子？って難しいのでは？」

「そんなものは世界を脅せば簡単だよ」

「総護、俺のセリフを取るな」

クラスが静まり返る。

「「「ええええええっ!?!?!?」」」」

今度は驚きの絶叫が響き渡った。

そして、誰かが思い至ったのか、

「デュノア君はデュノアさんで、それから黒神さんになって……」

「黒神君はともかく、同室の織斑君が知らないってことは――」

「ちょっと待って!昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね!？」

また騒がしくなった。

少し面倒なことに……

バシーン!

教室のドアがすごい勢いで開く。

「一夏あっ!!--!」

甲龍を纏った鈴が登場した。

「死ね!!!!!!」

両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

ズドドドオンッ!

「ふーっ、ふーっ、ふーっ!」

鈴は怒りのあまりで肩で息をしている。

「ふっ」

「へえ」

何が起こったのか完全に理解していた俺と総護は声を上げていた。

一夏と鈴の間に割って入ったのはラウラだった。

シュヴァルツエア・レーゲンを纏い、A I Cで衝撃砲を相殺した。

「助かったぜ、サンキュ。……っていかお前のI Sも直ったのか? すごいな」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん——むぐっ!?!」

ここで一夏の声は途切れた。

なぜか。それは、ラウラが一夏にキスをしたからだ。

「!?!?!?!?!?」

クラスの全員があんぐりとしている。俺は少し驚いたがあまり変化がないつもりだ。で、隣の総護は笑っている。今日来てもうこの状況を理解するとはどういう頭をしてるんだ？

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……嫁？婿じゃなくて？」

結構冷静じゃないか。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習慣
しだと聞いた。ゆえに、お前を私の嫁にする」

誰だ？ラウラにこんなことを教え込ませたのは。ドイツ軍か？

「アンタねええええっ!!!」

再び衝撃砲が開く。

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い！！！」

少なからず間違っているいな。鈍感すぎるのが悪い。

ビシュンッ——！

「ああ、一夏さん？どこかにおでかけですか？わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

窓からの逃走を試みたが、日本刀を突きつけられた。

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！ 説明を求めたいのは俺の方で——おわあっ！？」

そろそろ止めるか。

「総護、織姫」

「仕方がない」

「わかったよ」

今はシャルロットに《灰色の鱗殻》を打ち込まれそうになっていた。

「三天結盾！」

「総護、クラス全員にやれるか？」

「やれる」

そいつって総護は刀を一本呼び出した。

「砕ける鏡花水月」
きょうかすいげつ

鏡花水月の能力も変化しているようだ。昔は解放を一度見せなければならなかったからな。

そして今、クラスが静止している。

「諸君、おはよう。……どうなっている」

ブリュンヒルデの登場。クラスが静止していることに驚いているようだ。

「おはよう」

「おはようございます」

「おはよう、織斑教諭」

「……これはどういうことだ？」

見れば、ISを展開したまま静止したままの、専用機持ち、逃げよとする生徒がとまっている。

「催眠をかけた」

「催眠？なにがあつた」

「ラウラさんが一夏さんにキスして、一夏さんに好意を持っている子たちが暴れ出したんです」

「それでISを展開しているのか。それで催眠とはどういうことだ？」

「それは私の能力だ。鏡花水月。この能力は『完全催眠』。クラス全員にかけさせてもらった」

「そうか。藍染、催眠を解け。こいつらを静める」

総護が催眠を解いた瞬間、動き出した。シャルロットの攻撃は織姫の三天結盾で防がれている。

「貴様ら、何をしている？」

ブリュンヒルデの一言。それでまたクラスが静止した。

「そ、それは……」

「な、なんていいますか……」

「敷地内でのISの展開は認められていない。鳳、オルコット、黒神妹、ボーデヴィツヒは反省文の提出」

「あの、織姫さんと藍染さんは……」

「確かにこいつらもISを使った。だが、教室が破壊されるのを防いだ。今回は見逃す」

それに一夏を護ったからな。

「とつとと席に着け。SHRを始める」

何もなかったかのように話を進める。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

第18話 さらなる転校生（後書き）

次回は買い物回になる予定です。
感想等、お願いします。

第19話 買い物

Side 白亜

「起きているか？総護」

「起きているよ」

総護の部屋の前。なぜか一人部屋だ。

「朝食行くぞ」

「ああ」

「その前に、一夏も呼ぶか」

一夏の部屋の前。気のせいか、ドタバタと音が聞こえる。

「一夏、起きてるか？」

「は、白亜！？ちょっと助けてくれ！」

ドアを開ける。

「悪かった。邪魔をしたようだ」

目の前には裸のラウラが一夏に覆いかぶさっていた。

「ち、違う!」

「遅れるなよ」

そういつて、部屋を出た。

「織斑一夏、なかなか面白い」

「総護、何を考えている」

「なんだろうね」

「程ほどにしておけよ」

場所変わって一年寮食堂。

織姫と合流し、三人で食事をしている。

そして、周りの視線は俺たちに刺さっている。

「ここの料理は旨いな」

「ああ」

「そうだね」

「それにしても、大変だね、白亜」

「そうだな。まさか俺が兄になるとはな」

「どういうことなの？シャルロットさんが白亜の名前名乗るし、二人で世界を脅すし」

「それに過去を話すとは、君にしては珍しいことだ」

「なんでだろうな。道具として使われたシャルロットに情が移ったのか？」

「君にそんな感情が生まれるなんて思ってもいなかったよ。これも井上織姫のおかげか？」

「私はなにもしてないよ」

「織姫には心を教えられた。これは事実だ」

「そう、かな……」

女子の視線を受けながら朝食を食べ終わった。そのころに一夏たちが来た。

「急げよ、一夏」

「あれは誤解だからな！勘違いするなよ！」

「わかつている」

それから教室に戻った。

予鈴が鳴り、しばらくして、箒とラウラが到着し、廊下ではシャルロットと一夏がブリュンヒルデに怒られている。

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けないがしかし――」

スパアンツ！

出席簿アタック炸裂。

「敷地内でも許可されていないISの展開は禁止されている。これは、前にも言ったことだ」

「は、はい……。すみません……」

「黒神妹と織斑は反省文の提出と放課後教室を掃除しておけ。次は特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい……」

二人揃って意気消沈。

キンコーカーンコーン。

チャイムが鳴ってSHRが始まる。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

俺、織姫、総護、は赤点を取ることはない。
一夏はどうだろうか。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物な
どするなよ。3日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽
目を外しすぎないように」

臨海学校か。束が何かをするらしい。

水着は適当に買いに行くか。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかり勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

誰かが言ったな。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。
なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？いいなっ！」

「ずるい！私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろうなー」

一気に五月蠅くなったな。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っている
んだ。遊びではない」

女子たちが揃って返事をした。

今は放課後、総護と織姫という。

「総護、週末水着買いに行くか？」

「ちょうどいい。行こうか」

「私もついて行ってもいい？」

「俺は構わない」

「私もそれでいい」

「決まりだね」

「週末の日曜でいいだろう」

日曜日。天気は快晴。

俺の視線の先にはシャルロットと一夏が手をつないでいる。それを見る人物が俺以外にもいる。鈴、セシリア、ラウラだ。

「少し待っていてくれ」

そう告げて、響転を使った。

「何をしている？」

「「「!？」」」

俺の声に驚く3人。

「なっ!？は、白亜いつの間に!」

「白亜さん!？な、なんでしょうか!？」

「白亜、なんのようだ？」

「お前らは何をしている。大方、一夏とシャルロットを尾行しようと考えていたんだろ？」

「あ、アンタには関係ないわよ」

「関係あるんだよ。俺はシャルロットの義兄だ。妹の恋路の邪魔をしようとする奴に言っておこうと思ってな」

「なんだ？」

「お前ら、バレバレだぞ。ラウラはともかく、鈴、セシリアはもうばれているだろう。それと、危害を加えたらどうなるかわかっているよな？」

「「「……………」」」

一応脅しかけて、邪魔は減るだろう。

「尾行するなどは言うつもりはない。じゃあな」

響転を使って戻った。

「なにをしてきたんだい？」

「ちょっとな。どこかの馬鹿を軽く脅してきただけだ」

「あの三人のことだよな」

「ああ。あまりにもバレバレだったんでな」

「アレは尾行になっていない」

「まあ、俺たちも行くか」

動き出した俺たちは、とにかく視線が刺さる。

「そんなに目立つか？」

「白亜と藍染さんは格好いいんだよ」

「それに織姫、君はどこかのモデルに見えてもおかしくはない」

「つまり、俺達が揃っているから余計に目立つ、と」

「そついうことになるだろう」

視線は気にしないようにした。

しばらくして、水着売り場まで来た。

「男用の水着はあつちだから、30分後くらいでいいか。またここに集合で」

「わかったよ」

そして分かれた。

俺は黒、総護は白の水着を買った。

まだ時間はあるそうだが、戻るか。

集合場所にはまだ織姫はいなかった。

「少し待つか……」

そんなときに、

「ねえ、なにしてるの？私達と遊びに行こうよ」

「暇なんでしょ？遊びましょ」

逆ナンにあった。

「待っている人がいるから諦めろ」

「私は君たちのような女に興味はない」

適当にあしらおうとするが、

「待たされているんでしょう？そんな人はほっといて私達と遊びましょ
ようよ」

「しつこい女は嫌われるだけだ」

「あなた達、自分の立場がわかっていないようね」

どうせ警備員でも呼ぶ気なんだろう。女尊男卑になってから付け上がる女が増えた。

「あんた達は『偽証罪』って知ってるかい？」

「っ！？」

そして、

「きゃああああっ！！！」

女子の水着売り場の方から女性の悲鳴が聞こえた。

「この声は……」

「おそらく山田教諭だろう」

「行くぞ、総護」

「ああ」

逆ナンしてきた女は放置して走り出した。

水着売り場について見たのは、一夏とシャルロットがブリュンヒルデと山田先生に怒られていた。

「何があった？」

「一夏さんとシャルロットさんが同じ更衣室から出てきたんだって」

「織斑先生、山田先生、少し一夏を借りてもいいか」

「なんだ、お前も来ていたのか。それでこの馬鹿者をどうするつもりだ？」

「いや、義兄として馬鹿^{一夏}に話があるだけだ。5分で終わる。終わったら返却する」

「そうですか。それなら早めにしてくださいね」

「わかっている。行くぞ、一夏」

一夏を掴んで、響転で移動した。

「さて、一夏。話を聞かせてもらおうか」

「え、えーと、白亜？俺はシャルに無理矢理連れ込まれてなにがなんだかわかんねえだけど……」

「言い訳遺言はそれでいいのか？」

「俺は無実だ！確かにシャルに無理矢理連れ込まれたけど、見てないぞ！」

「言い訳遺言はそれでいいのか？」

「すみません、許してください……。俺が間違っていました」

脅し満載のセリフを二回言ったら一夏は命乞いを始めた。

「一夏、一つだけ聞く。お前はシャルロットを異性としてどう思う？」

「……………俺は、友達としては好きだ。だけど、異性としては考えたことがない」

これだけでも気づかないのか……

「そうか。もういい」

「許してくれるのか!？」

「軽く殺し合いをするだけだ」
模擬戦

「っ!？今、殺し合いって聞こえた気がするのですが、お兄さん?」

「気のせいだ。少しきつくなるだけだ。戻るぞ」

一夏を掴み、再び響転を使った。

「待たせたな」

「いえ、そこまで待っていないので大丈夫ですよ」

「なにを話してきた?一夏の目が絶望を見ているが」

「ただ、これからどうするか教えたただけだ」

「白亜、それに私もつき合わせてもらってもいいかい?」

「構わない。一夏は俺とお前の二人で強くする」

それを言ったら、一夏の目が今度は死んできた。

「黒神、殺すなよ」

「安心しろ。死ぬことはない」

それと、

「そろそろ出てきたらどうだ？」

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

「ラウラはどうした？」

「いつの間にかいなくなったのよ」

「そうか」

「さっさと買い物を済ませて退散するでしょう」

ため息混じりに言うことか？

「あっ！私ちよつと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、ついてきてください。それに井上さんと藍染さん、黒神さんたちも来てください」

どうせ織斑姉弟に気を使ったのだろう。
少し離れてから、

「織姫とシャルロットは水着買ったのか？」

「私は買ったよ」

「僕も買ったよ」

「山田先生、俺は行かせてもらっ。シャルロット、来い」

「え、あ、うん。」

「織姫と総護はどうする？」

「私は先に帰らせてもらおう」

「私も帰るね」

俺達はそれぞれの目的地へ進み出した。
俺に大した目的地はないが。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「随分大胆なことをしたな」

「そ、それは――」

「尾行に気づいたから邪魔されなくなかった、か？」

「う、うん……」

「俺は一夏と少し話したが、異性としては考えていないそうだ。ただ、友達としては好きらしい」

「一夏らしいね。だけど、一夏がこれくれたんだ。買い物に付き合ってくれたお礼だって」

他のやつが頼めば何かの記念にあげるだろうな。

「ねえ、一夏が絶望に染まっていたんだけど、どうしたの？」

「アレか。アレは軽く脅しただけだ」

「軽くであそこまで絶望に染まることはない気が……」

シャルロットは呟いたが、聞こえないフリをしておこう。

「軽く食べて帰るか？」

「うん！」

そして、昼食をとって帰った。

S i d e 〰 白 亜 〰 o u t

第19話 買い物（後書き）

白亜がシスコンっぽくなってしまった気がする。

作者の中では白亜はシスコンではないです。

次回は臨海学校ですが、そのまえに藍染総護のキャラ設定を書きたいと思います。

感想等お願いします。

キャラ設定&機体説明2

【名前】

あいぜんそうじ
藍染総護

【見た目】

茶髪でオールバック（虚圈潜伏後の藍染です）

【趣味】

読書

【プロフィール】

誕生日 5月29日

身長 186cm

体重 74kg

年齢 25歳

束以上の天才。白亜を人間にした張本人。

一人称は「私」。

25歳だが、教師が性に合わない為、転入した。

専用IS崩玉
ほしきよく

機体名【崩玉】
ほしきよく

第一形態のIS。

展開時は二本の斬魄刀のみ。

見た目は衣の様な白い死覇装に白いコートである。

待機状態は斬魄刀か、白いコート。転入初期は指輪だった。

【基本能力】

瞬歩しゅんぽ

高速移動術。ハイパーセンサーで追えるが、人間の目で追える人間はほとんどいない。

鬼道きどう

言霊を詠唱したあとに、術名を叫ぶことで発動する。

『詠唱破棄』えいしょうはきをすることで、威力を落としてだが、すぐに発動することができる。

破道はだうと縛道ばくどうの二種類がある。

【能力説明】

『破道』

直接攻撃の術。

『縛道』

防御、束縛、伝達を行う術。

『鏡花水月』きょうかうすいげつ

武装の一つで、完全催眠の能力を持つ。

能力使用時の解号は「砕ける『鏡花水月』」。
防ぐ術はある。

『斬月』ざんげつ

武装の一つで、出刃包丁のような巨大な刀身の刀。柄に当たる部分から晒が出ており、非使用時は刀身に晒を巻き、背中に背負う。晒はある程度まで伸び縮みし、晒を使った戦闘が可能。

《月牙天衝》げつがてんしょう

刃先から超高密度のエネルギーを放出し、巨大な斬撃を放つ。

ワンオフ・アビリティ
【単一仕様能力】

ばんかい
『卍解』

『斬月』は『天鎖斬月』となり、漆黒の刀、卍型の鍔、柄頭に途切れた鎖がついている。

キャラ設定&機体説明2（後書き）

かなり雑な説明になりましたが、あまり気にしないでください。

先を考えずに投稿してしまうので、矛盾点が生じてしまったりするので、細かくやると、思いつきによって設定ができてしまうので、少し雑にしました。

それに気づいたのは最近なんですけど……

おかげで、後々アイデアが生まれてしまっていますm（　　）m
話に矛盾があったりしますが、よろしく願います。

感想、アドバイス等も願います。

第20話 臨海学校1

S i d e 〱 白亜 〱

「海っ！見えたあっ！」

クラスの女子が声を上げた。
臨海学校初日、転校は快晴。

「五月蠅い……」

軽く寝ていた俺にとっては、周りの女子達のテンションが五月蠅かった。

隣には総護がいる。総護はずっと何かを読んでいた。よく酔わないものだ。

「白亜、シャルロットさんが朝からずっと機嫌がいいのは何でなの？」

前の席にいる織姫が聞いてきた。

「それか。それは一夏からプレゼントを貰ったからだろっ」

シャルロットは左手首に巻いてあるブレスレットをずっと見ている。

いつもの専用機持ちの様子がどこか変だ。

ラウラは挙動不審、箒はどこかそわそわしている。

一夏関連か？

そんな感じで旅館に着いた。そういえば束が来るらしい。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいします」「」「」

ブリュンヒルデの言葉のあと、全員で挨拶をする。正直、敬語は苦手だ。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね
都市はおそらく三十代。しっかりとした雰囲気だ。

「あら、こちらが噂の……？」

俺達を見てブリュンヒルデに聞いていた。

「ええ、まあ。今年は男が三人いるせいで浴場分けが難しくなって
申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「あの二人はともかく、こいつは感じがするだけです。挨拶をし
る、馬鹿者」

一夏は頭を抑えられた。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「黒神白亜だ。よろしく頼む」

「藍染総護だ。よろしく」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

女将は丁寧なお辞儀をした。

「不出来の弟でご迷惑をおかけます」

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんには随分厳しいんですね」

「あの二人に比べ、手を焼かされていますので」

一夏は否定しきれてないだろうな。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子達は返事をする、すぐに旅館の中に入っていった。

「ね、ねー。おりむゝ、はっくん、そうるん」

のほほんさんこと、布仏本音だ。総護のあだ名はそうるんか。相変わらず変なあだ名だな。

「おりむゝ達って部屋どこ？一覽に書いてなかった！。遊びに行くから教えて」

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「普通に考えてそれはないだろ」

「それもそうか」

俺達の部屋はどこかの一室を借りるのだろう。

「織斑、黒神、藍染、お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

一夏は「またあとで」と告げて分かれた。

「えーっと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「本来ならお前たちで一部屋使ってもらう予定だったんだが、その部屋が使えなくなってしまった。そのため、部屋が足りなくなってしまった。二人部屋は一つ確保できた。一人はここだ」

「え？ここって……」

教員室と書かれている。

「一人は私と同室だ。誰がこの部屋に来る？」

「私個人の意見だが、白亜と二人部屋が望ましい。いろいろとやることがあるのでな」

「そうか。織斑、それでいいか？」

「え、えーと……」

「一夏、それでいいか？」

俺が問う。

「は、はい！構いません！！」

ビシッと姿勢を正し、了承した。なんかしたか？

「決まりだな。お前たちの部屋はこの隣だ。私の近くなら女子も近づかないだろう」

そういうことか。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だと言つことを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

思い出したように、

「それと、大浴場は使えるが、時間交代だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「わかりました」

「わかった」

「了解した」

そうして部屋に入った。
中は広々としていた。

「束に頼んで探査回路のデータを構築させていた」
ベスキス

「探査回路か……。やはり戻しておくべきだったな」

「あの時は必要ないと思っていたからね。しかし虚圏が動くなら万全な状態にしておかなければ。ヴァストローデ級の破面が出てくるのはまだ先だと思うが、準備するに越したことはない」

「そうか……」

奴らと殺り合うのは俺と総護と織姫の3人だけでいい。あいつらに世界の闇を見せるわけにはいかない。

「さて、私達も海に行こうか」

「待機状態を変更しておくか……」

海で斬魄刀を持つのはいろいろと面倒なことになるので仮面に変えた。

総護はコートに戻したようだ。

「行くか」

更衣室のある別館に行く途中に一夏とセシリアが呆然としていた。

「どうした、一夏、セシリア」

「白亜、総護。それがな、今束さんが降って来てどっかに行っちゃまったんだ。そついえは束さんがお前らに用があるって言ってたけど、箒を捜しに行っちゃまった」

用は探查回路のことか。

「俺らは海に行く」

「あ、俺も行く」

「あ、あの、一夏さん、サンオイルを塗ってもらいたいのですが……よろしくて?」

「ん? 友達に塗ってもらえばいいじゃないか」

「え、ええまあ、そうですね、できれば……その、一夏さんに……」

この話に付き合う義理はないので先に更衣室へ向かった。

今は着替えて海だ。着替えている途中に一夏が来て、今は一緒にいる。

「あ、織斑君だ！」

「黒神君と藍染君もいる！」

「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね！？」

「わ、わ。体かっこい。鍛えてるよね」

「黒神君、綺麗な白い肌！いいな」

「藍染君、コートなんて着て暑くないのかな？」

総護の待機状態はなぜか体温調整機能がついている。何気に便利だ。

「あとでビーチバレーしようよ」

「おー、時間があればいいぜ」

「私もやらせてもらおうか」

「俺はどうでもいい」

一夏が準備運動をし出した。

そのとき、

「い、ち、か~~~~っ!」

鈴が一夏に飛びついて肩車の状態になった。

「あっ、あっ、ああっ!?! な、何をしてますの!?!」

そしてセシリア登場。

「一夏、がんばれよ」

「え? ちょっ、おい!」

一夏を見捨てて集団から抜けた。

「白亜!」

この声は織姫か。

「どうした?」

「いや、白亜を見つけたから、声を掛けてみた」

口調が天然モードだ。

「この水着、どう?」

織姫がつけている水着はピンクのビキニだ。

「似合ってると思うぞ」

「私も同意する」

「ありがとっ！」

礼を言ってどこかに行った。織姫の進行方向には海の家があった。相変わらずよく食べるな……。

「あ、お兄ちゃん、それに藍染さん。ここにいたんだ」

シャルロットに声を掛けられた。

「誰だ？……なんだ、ラウラか……」

目の前にはシャルロットと、バスタオルを全身に覆いかぶさったラウラだった。

「よくわかったね」

「白亜の観察眼は飛びぬけているからね」

「一夏にでも見てもらいたんだけど恥ずかしいんだって」

「一夏ならあそこにいるぞ」

俺が指差した先には鈴をおんぶした一夏が海から上がってきていた。

「行ってこい」

「うん。またあとでね」

そういつて一夏の元へ走っていった。

「俺たちはどうする？」

「軽く泳ぐとしようか」

そういつてコートをそのへんに置いて泳ぎだした。
俺も泳ぐか。

5分ほど泳いで戻ったら、一夏たちがビーチバレーをしていた。

「私も混ぜてもらってもいいかい？」

「あ、藍染君！やろうやろう！」

「白亜もやるか？」

「やるか」

「私達は二人でいい。そっちは5人くらいでいいよ」

「えっ！？それはさすがに無理があるんじゃない……」

「構わない。人数はもう少し増やしてくれても構わない」

「その分、本気をだすがな」

「そんな口叩けるのは今のうちだぜ」

「手加減しないよ」

「やろうか」

変則ビーチバレーが始まった。

「サーブはどっちから打つ？」

「人数が少ない白亜たちでいいよ」

「なら、私が先に打たせてもらおう」

「「「「「来い！」「」「」「」

総護がジャンプサーブを打った。

「「「「「っ！？」「」「」「」

「速い……」

「なに、あの速度……」

「速すぎだろ……」

「もう少し手加減してやれ」

「もっと手加減しないと一方的過ぎるか……」

「今ので手加減したのかよ……」

「次、いくよ」

またジャンプサーブ。

今度は上がった。そして、一夏のスパイク。

俺は難なくレシーブし、総護のトスから俺のスパイク。

相手のコートに落ちたボールは砂に埋まった。

「うそっ!？」

「埋まった!？」

「白亜も手加減しろよ」

「悪い。手加減したが7割でも埋まるとは思わなかった」

「手加減できなかったから、そっちのサーブでいいよ」

「こ、ここからが本番よ!」

「来い」

相手もジャンプサーブ。

なかなかいいサーブだが、相手が悪い。

総護がレシーブをし、スパイクまで繋げる。

総護はスパイクを5割の力で打った。

相手も喰らいついてスパイクを仕掛けてくるが、総護が取る。

そして、ツィアタック。相手の間を抜けた。

「結局俺たちのワンサイドゲームだったな」

「っ、強すぎる……」

「どうやっても勝てる気がしない……」

「一点も取れなかった……」

相手は俺たちにボコボコにされてテンションが下がっていた。

「そろそろ昼か……」

「昼飯を食べに行こうか」

「そういえば、一夏たちって結局どこの部屋だったの？」

「あー、それ私も聞きたい！」

「私も私も！」

「わたしも」。冷たい床情報は共有しよ」

さっきの件か。他のやつらはなんのことか理解できてないようだ。

「俺は織斑先生の部屋だぞ」

そういつた瞬間、女子が凍りついた。

「だからまあ、遊びに来るのは危険だな」

「そ、そうね……。で、でも織斑君とは食事時間に会えるしね！」

「だね！わざわざ鬼の寝床に入らなくても——」

「誰が鬼だ、誰が」

さらに女子が固まった。

「お、織斑先生……」

「おう」

前に一夏に選んでもらった水着か。

「お前たちは食堂に行つて昼食でもとつてこい」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらつたしよつ」

「俺たちは昼食に行つてきます」

「集合時間には遅れるなよ」

「はい」

俺たちはそろそろと食堂に行った。

そして時間は過ぎ、今は夕食時。

昼から俺と総護は十刃と崩玉の調整をしていた。
探査回路を組み込むための準備もしていた。

俺と総護が宴会場に入ると、俺たちに気づいた女子が顔を赤くしていた。

「黒神君、藍染君。浴衣、緩んでいるよ」

「そついう風にしているんだよ」

「え、なんで？」

「少し緩んでいる方が楽なんだ」

そして、空いている席に座った。

「なかなか旨いな」

「さすがというところか」

料理の味はよく、すぐに食べ終わった。

部屋で少し休んでから、風呂に入った。

風呂上り、部屋の前でブリュンヒルデに捕まっている3人を見つける。

「なにをしている？」

「黒神か、こいつらは私の部屋の前で盗み聞きをしているな。ちょっといいから部屋に連れ込もうとしていたところだ」

なにをしているんだこいつらは……

「篠ノ之、凰、ボーデヴィツヒと黒神妹、井上も呼んでこい」

「は、はいっ！」

箒と鈴は駆け足で呼びに言った。

「おまえらも入れ」

「邪魔する」

部屋に入ると一夏がセシリアに声を掛けた。

「セシリア。遅かったじゃないか。じゃあはじめようぜ」

「え、あの、他の方がいらっしやいますし、その……」

「?別にいいじゃないか。俺も体が温まってるし、早くはじめよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、雰囲気が……」

勘違いしてるな、コイツ。

そんなこんなでマッサージが始まった。

しばらくして、ブリュンヒルデがセシリアの尻をつかんだ。

「おー、マセガキめ」

イタズラが成功した顔。まるで豹の如くの笑み

「しかし、歳不相応の下着だな。そのうえ黒か」

「え……きゃあああっ!?!」

ブリュンヒルデがセシリアの浴衣をすくい上げる様につかんだせいで、まくれ上がった浴衣から、下着が丸見えである。

「……………」

一夏は顔を赤くして視線を逸らし、俺と総護は目を瞑っていた。

「せ、せつ、先生!離してください!」

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、いつ、インコっ……!？」

「冗談だ。——おい、聞き耳を立てている5人。ソロソロ入ってこい」

俺が扉を開けると、箒、鈴、シャルロット、ラウラ、織姫がいた。

「全員好きなところに座れ」

全員入ってきた。織姫も聞き耳を立てているか。どうせ止められたんだろうけど。

「ふー。さすがに二人連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。少しは要領よくやればいい」

「いや、そりやせっかく時間を割いてくれる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって」

「どうだかな」

織姫は気づいていたようだが、ここで全員状況を飲み込んだようだ。

「は、はは……はあ」

「ま、まあ、あたしはわかってたけどね」

「……………」

「ふふっ」

脱力する筈、強がりを見せる鈴、真っ赤になるシャルロットとラウラ、その状況下で笑う織姫。

「まあ、お前はもう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くされては困る」

「ん。そうする」

一夏はタオルと着替えを持って出て行った。

「……………」

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。何がいい？」

旅館の備え付けの冷蔵庫から飲料水を取り出した。

「ほれ、ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶二

本だ。それ以外のがいい奴は各人で交換しろ」

俺は既に紅茶を持っている。

「「「「「い、いただきます」「」「」」

全員が飲んだのを確認してから、ブリュンヒルデは笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの！？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

「藍染も飲むか？」

そういつて冷蔵庫から取り出したのはビールだった。

「ただこう」

総護はビールを貰って飲み始めた。

「え？総護ってお酒飲めるの？」

「言っていないかったね。私は25歳だ」

「「「「えええええつ!?」「」「」

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールを飲みながら話を続ける。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ?」

織姫以外、だな。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

嘘だな。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「「「言わなくていいです!」「」「」

言ったらどうなるだろうか。

「僕——あの、私は……やさしいところ、です……」

「ほう、しかしなあ、あいつは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

照れ笑いをするシャルロット。

「で、お前は？」

次はラウラ。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージもうまい。付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

心の中で突っ込んでいるところだろう。

「女なら、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。それと井上、黒神のどこが好きなんだ？」

「え、本人の目の前ですよ？」

と篤。

「別にいいよ。だって白亜はもう、私の気持ちに気づいているから」

.....。

「白亜のどこが好きかはわかりません。でも白亜のことが好きです。ただ、白亜は寄せられる好意は受け入れても、自分から返すことはないんです」

シャルロットは気づいただろうが、他の連中は理解できていないだろう。

「黒神、お前の過去が原因か？」

「詳しくは知らないのだな、ブリュンヒルデ」

「ただ、お前の過去は酷いと言うことを聞いたただけだ」

「俺の過去は、貴様らには重すぎる。俺は戻らせてもらっ」

「そろそろ解散するか。自分を磨けよ、ガキども」

そして各部屋に戻った。

S i d e 〱 白 亜 〱 o u t

第20話 臨海学校1（後書き）

今月は特に更新が遅れることがあります。

テストと修学旅行があるので、更新ができない日も増えますが、その分、頑張ります。

感想等、よろしくお願いします。

第21話 臨海学校2

Side 白亜

臨海学校二日目。

「ようやく全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

珍しくラウラが寝坊をしたようだ。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれ相互位置情報交換のため——」

（束が探查回路のデータと紅椿を持ってくるか）

俺はラウラの説明を無視して思案する。

（来るならソロソロか？）

「——現在も進化の途中であり、全容は掴めていないのとこのです」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

ちょうど説明が終わったようだ。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

俺と総護、織姫にはそもそも専用パーツがない。ものが違うからだ。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに來い」

「はい」

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~~~~ん!!!!」

……………。來たようだ。

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ——ぶへっ」

飛びかかってきた束をブリュンヒルデが掴む。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

簡単に抜けれるものではないはずだが。
今度は筭の方を向いた。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言つたあ……。しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！篝ちゃんひどい！」

なぜ日本刀を持っているんだ？

「え、えつと、この合宿では関係者以外——」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者と言うなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えつ、あつ、はいつ。そ、そうですね……」

山田先生が瞬殺された。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

「束、そんなことをしているなら探査回路ベスキスのデータを白亜に渡してくれ」

「そーくん、久しぶりだねえ。私がどれだけ心配したと思ってるのさ」

「私にもやることがあったのでね。悪かったね、束」

「そーくん……」

そっいつて総護に飛びつく。

「相変わらずだな、束」

「はーくんも久しぶり！……ハイこれ、探査回路のデータ」

データを受け取って中を確認する。

「問題無さそうだな」

「それは当たり前なのだよ。なんたって束さんが構築したんだから」

「束、篠ノ之の専用機は？」

「さあ、大空をご覧あれ！」

空を指差し叫ぶ束。

ズドンッ！

空から金属の塊が降ってきた。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックがはーくん、そーくん、ひーちゃんを除いた現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲のIS。これが箒の専用機『紅椿』。

「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐ終わるよん」

「俺も手伝おう」

「私も手伝おう」

「あ、おねがい」

「じゃあはじめようか」

箒を受け入れる状態になった紅椿。

「箒ちゃんのデータはある程度先行していれてあるから、後は最新データに更新するだけだね」

俺たちは空中投影のディスプレイとキーボードを呼び出し、フィッティングを始めた。

「——はい、フィッティング終了。二人が手伝ってくれたから5分で終わるのが15秒で終わったよ。さすが私、さすがはーくん、さすがそーくん」

総護はともかく俺も天才の部類に入る。このこの程度は余裕だ。
パーソナライズも終わり、試運転が始まった。

「どうどう？ 篤ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。
武器特性のデータを送るよん」

データを送ったあとに解説が始まった。

「雨月是对単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー
刃を放出、連続して蜂の巣に！ する武器だよ。射程距離は、まあ
アサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届
かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫。次は空裂ねー。こっちは対
集団用の武器だよん。斬撃にあわせて帯状の攻性エネルギーをぶつ
けるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃ
これ打ち落としてみてね、ほーい」と

十六連装ミサイルポッドを呼び出す。

「——やれる！ この紅椿なら！」

16発のミサイルを全弾撃墜した。

そのなかでブリュンヒルデだけが束を厳しい目で見ていた。

「次はそーくんはいいから、はーくん行ってみようか！」

「構わないが、一応少なからず100メートルは離れる。巻き込む可能性がある」

「白亜、アレ、使う気か」

「ああ。どうせ束は馬鹿をやる」

「織斑教諭。この場から生徒全員を100メートルほど離れさせてください」

「なぜだ？」

「白亜が周りを巻き込む可能性があるからだ。普通のISでも巻き込まれればタダでは済まない」

「わかった。全員、この場から一時退避しろ！」

ブリュンヒルデの声により、この場に残ったのは俺だけだ。十刃を展開し、束の行動を待つ。

「準備はできたみたいだね。はーくんに打ち落としてもらうのはこれだあ！」

筈のときは明らかにサイズが違うミサイルポッドが多数出現した。容量が違うのかサイズがさっきの二倍だ。

「はあ。やっぱりやりやがった」

打ち出されたミサイルの数は6400。やっぱり馬鹿だアイツは。

斬魄刀を抜き放ち、右手から左手に持ち替える。そして、自らの掌を切る。

手からは血が流れてきた。

——これくらいでいける。

右手に流れる血と、虚閃の光を混ぜる。

グラン・レイ・ゼロ
「王虚の閃光！！」

掌から上空に放たれたのは、通常の虚閃を遥かに超える超広範囲の虚閃。

十刃最強の虚閃だ。

6400発のミサイルはすべて同時に王虚の閃光に飲み込まれ、爆発をすることなく消失した。

そして、空間が歪んだ。

「やはり歪んだか」

「すげえ……」

「空間が……」

オープン・チャンネルで会話が聞こえてきた。
響転で皆のもとへ移動した。

「黒神、やりすぎだ」

ブリュンヒルデの一言。

「王虚の閃光は使いたくはなかったんだが」

「帰刃してないから、最大攻撃力の王虚の閃光の6割くらいってところかな？」

「^{イーラ}憤怒を使って白亜が怒れば6割、通常時でも8割の威力だ」

「そんなところか」

こいつは本当に使いたくない。威力と範囲が世界で並び立つものが存在しない。巻き込まれたらほぼ確実に死ぬ。

他の全員が呆然としているところに山田先生が慌てて走ってきた。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

今回はいつもよりも慌てている山田先生。

「どうした？」

「こ、こっ、これをつ！」

渡された小型端末の、その画面を見てブリュンヒルデの表情が曇った。

「解く命令レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動をしていた——」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

………始まったか。

「そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。——全員、注目！」

山田先生が走り去ったあとに、ブリュンヒルデが声を上げた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ」

「え……？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

騒がしくなる女子たち。

「とつとと戻れ！以後、許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「はっ、はい！」

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、ボーデヴィッヒ、
鳳、黒神兄妹、藍染！——それと、篠ノ之も来い」

始まる。命を掛けた戦いが……

Side ～白亜～ out

第21話 臨海学校2（後書き）

今回は短めです。

更新は頑張りますが、遅れた場合は申し訳ありません。
感想等、お願いします。

第22話 緊急事態発生

Side 白亜

「では、現状を説明する」

専用機持ちが集められていた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた。」

一夏以外は真剣な眼差しになっていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかつた。時間にして50分後、学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなつた」

そして、想像通りの言葉が告げられた。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

探查回路を速めに入れておくか……。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

データが表示される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴアイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。――」

「可能だ」

「なに？福音は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450キロを超える」

「私の崩玉の瞬歩か、白亜の十刃の響転。特に？^{セフティマ}7響転の連続しうなら可能だ」

「実質的な速度なら総護の崩玉が上だが、十刃の喰虚には『認識同期』がある」
うき にんしきど

「認識同期とはなんだ？」

「俺の持つ情報を俺が望んだ相手すべてに報せる能力だ。情報は脳に直接流すこともできる。そして、俺の分析を含め報せることができ、一切のジャミングを受けない。しかし問題がある。帰刃は？ 9？ 7までは同時使用ができる。ただ、その場合エネルギーを使う。ここにいる誰かが来たら俺は戻らせてもらう」

「わかった。それでは黒神白亜に偵察の任務を与える」

「出る前に5分から10分の時間をくれ。十刃に入れるデータがある」

「わかった。今から取り掛かれ。藍染、手伝ってやれ」

「了解した」

「黒神の偵察があってもアプローチはおそらく一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

「探査回路のデータを入れながら話を聞く。」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「『『『当然』』』」

探査回路インストール完了まで約3分。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいはしない」

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。黒神、藍染を除いた専用機持ちの中で最高速度が出せる期待はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちよつどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

本来なら違はずだ。

探査回路インストール完了まで約2分。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ……。それならば適任——」

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

出てきたのは束。やっとでてきたか。

「……山田先生、室外の強制退去を」

「えっ！？は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ」

空中で一回転して着地。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっという作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータを見てみて！パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

ブリュンヒルデを囲むようにディスプレイが現れた。
探査回路インストール完了まで約1分

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ！これでス
ピードはばっちり！」

一夏は首をひねっていた。

「説明しましょーそうしましょー。展開装甲というのはだね、この
天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

「はい、ここで心優しい束さんの解説開始。いっくんのために
ね。へへん、嬉しいかい？まず、第一世代。これは『ISの完成』
を目標とした機体だね。次が、『後付け武装による装備の多様化』

——これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・イ
ンターフェイスを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器にBT
兵器、あとはAICとか色々だね。……で、第四世代というのが『
パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空
論中のもの。はい、いっくん理解できました？先生は優秀な子が大
好きです」

「は、はあ……。え、いや、えーと……？」

「ちつつちつつ。束さんはそんじょそこらの天才じゃないんだよ。
これくらいは三時のおやつ前なのさ！」

ほとんどが固まっているぞ、束。

「具体的には白式の《雪平式型》に使用されてまーす。試しに私が
突っ込んだ」

「「「え!?!」」」

「それで、うまくいったのでなんと紅椿は全身アーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。え?全身?全身が、雪平式型と同じ?それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。はーくん、そーくん、ひーちゃんを除けば最強だね」

全員、ぽかんとしてるし。

「さらに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機^{リアルタイム・マルチロール・アクトレス}つてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

探查回路インストール完了——機動確認。

「はにや?あれ?何でもみんなお通夜みたいな顔してるの?誰か死んだ?変なの」

「——東、言っただけ。やりすぎるな、と」

「そうだった?えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

探查回路——正常に機動。問題なし。

「織斑先生、準備ができた。今から行動を開始する」

「ああ。30分後にはデータを送るように」

「わかった」

そして響転を使い、海岸に移動した。

「帰刃？^{セフティマ}7、鎮まれ^{ブルヘリア}『呪眼僧伽』」

帰刃し、移動を開始した。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 総護 〱

（行ったか……。にしても——）

「それにしてもアレだね。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すね」

（東、君はどれだけこの場をかき回したい）

「しかし、それにしてもウフフフ。白騎士って誰だったんだろうねー？ね？ね、ちーちゃん？」

「知るか」

「うむん。私の予想ではバスト——」

「ごすつ。」

情報端末での一撃。

「ひ、ひどい、ちーちゃん。束さんの脳は左右に割れたよ!？」

「そうか、よかったなあ。これからは左右で交代に考えことができるぞ」

「おお!そつかあ!ちーちゃん、頭いい!」

「大丈夫かい、束。脳が割れたら普通に考えると死ぬよ」

「そーくんやつさしい!」

そういつて抱きついてくる。

「束、離せ。人がいるんだ」

「そーくん私のこと嫌い?」

「時と場所を考えるといつているだけだ」

面倒なことをしてくれたね。

「え?束さんと総護って、そういう関係なのか?」

「そうだよー。そーくんと私は付き合ってまーす」

「「「「ええええええっ!?!」」」」」

「だから言っただろう。時と場所を考えると。この状況でこんなことをしていると白亜に申し訳ない」

「うー。そーくんのケチ」

「ケチではない。一人偵察に行っている白亜のことを考える。あいつが切れると怖いぞ？」

「白亜が切れたこと見たことがないよ」

「白亜はほとんど切れない。そういうタイプが怒ると一番恐ろしい」

一夏たちは白亜が怒ったところを想像してか、顔が引き攣っていた。

「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらい時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

セシリアか。高機動パッケージを持っているから作戦に参加できると思っていたのだらう。

「わ、わたくしとブルー・ティーズなら必ず成功して見せますわ！」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

「ちなみに紅椿の調整時間は7分あれば余裕だね。そーくんが手伝

つてくれるなら3分でできるね」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追撃及び撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。各員、黒神のデータを待ちつつ、ただちに準備にかかれ」

白亜は既に戦っているだろう。

S i d e 〱 総護 〱 o u t

S i d e 〱 白亜 〱

海岸から移動し始めて1分ほどたったときには『銀の福音』を見つけていた。

そして、交戦をはじめて10分ほど経っている。

(銀の鐘シルバー・ベルが厄介だな。全砲身数36門。速度は一夏以上だな)

俺は手加減している。情報収集のためだけではない。

(少しは砲門を削っておくか……)

少し考えて行動に移る。

既に『喰虚』と同時使用しているため、後30分くらいしか動けないだろう。

認識同期を使えばさらに機動時間は減る。

(速めに認識同期を使っておくか……)

喰虚の能力により、様々な銃器を使っている。

そして10分ほど経ったときには『銀の福音』の砲門は25まで減っていた。

(『認識同期』発動。受信者——織斑千冬、井上織姫、藍染総護……指定——送信)

認識同期でデータを送った後、

(『喰虚』解除。残り予定稼働時間は25分か。来るならあと15分はかかるか？それまでに砲門を削るだけ削っておくか……)

Side→白亜→out

第22話 緊急事態発生（後書き）

総護と束をカップリングさせてみました。

後悔しない……はず、です。

ほとんどがノープランなので後悔するかもです……。

感想が少ないので、読んでくださる方々はどのように感じているのかわからないので正直不安です。なので、感想等、よろしく願いますm（――）m

第23話 海上戦！

S i d e 一夏

時刻は十一時半。

砂浜では俺と箒が並んで立っている。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身がISアーマーが構成され、同時にPICによる浮遊感、パワーアシストによる力の充満感とで全身の感覚が変化した。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

（箒、大丈夫なのか？）

箒はさっきから浮かれている気がして仕方がない。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

ISのオープン・チャンネルから千冬姉の声が聞こえる。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。^{ワンアプローチ・ワンダウン}短時間での決着を心がける』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。いくら黒神が福音の砲門を一部破壊したと言えど、お前らが参加するときに黒神は離脱する。それにお前はその専用機を使い始めてから実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援をします」

やはり筭の口調はどこか喜色に弾んでいる。

『——織斑』

「は、はい」

今度はプライベート・チャンネルで千冬姉の声が届く。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かをし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

『頼むぞ』

オープン・チャンネルに替わり、号令をかけた。

「では、はじめ！」

——作戦、開始。

S i d e 〱 夏 〱 o u t

S i d e 〱 白亜 〱

ブリュンヒルデの連絡により、一夏と箒が来ることはわかった。
残り予定稼働時間は10分。

『喰虚』を解除したため、攻撃手段は刀一本となった状態で交戦を続けたので、銀の福音の砲門は残り20までに減らすことに成功した。

それからしばらくして、

「白亜！」

「来たか」

紅椿を纏った箒と白式を纏った一夏が来た。

「銀の福音の砲門は20まで減らしたが油断するなよ」

「わかっている！」

……。

「一夏、箒をしっかり見ておけよ」

「あ、ああ」

プライベート・チャンネルで告げてから、

「俺は戻る。成功させろよ」

旅館に戻った。

「それじゃあ、始めようか。六花の第二形態移行による、ひーちやんの力の復元」

「総護、他のやつらに催眠をかけたか？」

「ああ。他の人たちには私達に気づかないように催眠をかけてあるよ」

「始めよう」

「ああ。―――帰刃？8、啜れ『邪淫妃』」

「さて、始めようか」

俺たちは織姫のIS『六花』を第二形態移行をさせるために、人目につかない森にいる。

「織姫、ISに組み替えるよりも前の六花のイメージを保ち続けてくれ」

「わかったよ」

六花を展開したままの織姫に指示を出し、空中投影キーボードを叩く。ディスプレイの内容にも目を通し、作業を続ける。

束も総護も俺と同様に作業を進める。

そして、作業を進めることおおよそ30分。

「!？」

「どうしたのー？はーくん」

「探査回路で一夏が墜ちたのを確認した。箒が足をひっぱたか？」

「どういうことだ？」

「一夏と箒が俺と合流したときに気づいたんだが、箒が浮かれていた」

「やはり浮かれていたか」

「あれは気のせいじゃなかったんだね」

「白亜、六花の第二形態移行完了までは後どれほどかかる？」

「速くて2時間半、遅くとも3時間ほどだ」

「そうか。それなら少し一夏の様子を見て来る」

「別にいいが、鏡花水月は解くなよ」

「そーくん、早く戻ってきてねー」

「総護、一夏さんの容体を確認しておいて。六花の力が完全になれば人体の蘇生ができるようになるから。お願いね」

「わかった。少し行ってくるよ」

総護が去り、この場にいるのは三人となった。

「続けよう」

そして再び、作業を始めた。

S i d e 〱 白 亜 〱 o u t

S i d e 〱 総 護 〱

「織斑教諭、一夏の容体は？」

「藍染か。アイツは今意識不明だ」

「少し一夏を見てきます」

「おそらく篠ノ之がいるだろう」

「わかった。それと何かあったら連絡を」

「わかった」

一夏の部屋に着くと箒が全身に包帯を巻いた一夏の隣でうなだれていた。

（しばらくは関わらない方がいいな。この状況を変えるのは私の仕事ではない）

一夏には意識がなく、至る所に包帯が巻かれていた。

(この場は離れよう。白亜達の元へ戻るとしよう)

「戻ったよ」

「一夏さんの様子はどうだったの？」

「体の至る所に包帯が巻かれ、意識不明。おそらくしばらくは目は
覚まさないだろう」

「……そう」

「いっくんと篤ちゃん、大丈夫かなー……」

「東、この状況はお前が作ったと言っても過言ではない」

「そうなんだけどねー」

「俺たちは六花の第二形態移行が先だ」

そして、私が戻って約2時間半。
合計作業時間約3時間半。織姫の『六花』は『盾舜六花』しゅんしゅんりつかへと第二形態移行した。

「私は一夏さんの治療に行くよ」

「私と白亜は現状の確認に行くとしよう」

Side～総護～out

Side～白亜～

「織斑先生、現状は？」

「黒神か、それに藍染。現状は福音が停止しているだけだ」

「そうか。それより問題は一夏と箒か」

『白亜、大変だよ!』

ISのプライベート・チャンネルで織姫が話しかけてきた。

「どうした？」

『箒さんたちがさっきどこかに行っちゃったよ!』

「織斑先生、俺と総護にISの使用許可を」

「黒神、どうした?」

「箒たちが銀の福音のもとへ独断で出て行った」

「なに?」

「織姫からの情報と探査回路で確認したから、間違いない」

「……わかった。二人にISの使用許可を出す。福音の撃墜と違反者の捕獲を命ずる」

「了解」

「わかった」

場所が変わって砂浜。

「行くか」

「行くよ『崩玉』」

俺は十刃を起動し、総護は崩玉を起動する。

「それは……」

「ISに組み込んだときに付け加えたんだ」

「行くか」

「ああ」

俺は響転、総護は瞬歩を使った。

俺達が辿り着くと銀の福音は海に落ちていた。

「お前ら、何をしている」

「な、なんですの!？」

「なにすんのよ!」

そして、俺と総護で離れたところに移動させ、一箇所にとめる。

「軍相八寸退くに能わず・青き門 白き門 黒き門 赤き門・相
いあがないてたいかにしむ
贖いて大海に沈む」

総護が詠唱する。

「竜尾の城門」、“虎咬の城門”、“亀鎧の城門”、“鳳翼の城門”、“四獸塞門”!」

5人は総護が造りだした結界に閉じ込められた。

「な、なんだこれは!？」

「こんなものぶっ壊してやる」

「無駄だ。貴様ら程度の武装でこの『四獸塞門』は破れない。おとなしく見ている」

「総護、六杖光牢が破られたぞ」

「六十番代だとこの程度か。さすが第二形態移行した第三世代型ⅠSだな」

「帰刃?9、食い尽くせ『喰虚』」

「この状況でもまだ？6以上セスタを使わないのか」

「あまり使いたくは無いのでな。まずは様子見だ」

「行くよ、白亜」

「ああ」

銀の福音は『銀の鐘』を放ってきたが、俺は掬花の水流で防ぐ。総護は――

「縛道の八十一、『断空』」

防御壁で普通に防いでいた。

「破道の四、『ひょうらい白雷』」

攻撃型鬼道、破道で攻撃する総護。

俺は『レイン・オブ・サタデイ』と『スターライトmk?』を持ち、射撃する。

「あれはわたくしと同じ『スターライトmk?』ですわ……」

「あっちは僕の『レイン・オブ・サタデイ』だよ」

「なんであいつが使ってるのよ」

「!?!?あれは『雪平式型』!?!?なぜ白亜が使っている!」

雪平式型を持ち、切りかかる。
が、浅い。

「総護、あいつの動きを止めれるか？」

「可能だが、速すぎる。確実に縛るなら一瞬でも動きを止めてくれ」

「わかった」

にしても、第三世代とは思えないほどの性能だな。

「喰虚流術、『^{デス・レーゲン}死の雨』」

銀の福音の真上から水の槍の雨を無数に降らす。

銀の福音は銀の鐘で対抗する。だが、これが狙いだ。

「縛道の六十一、『六杖光牢』」

銀の福音の動きが封じられる。

「これで止めだ。^{スクリュー・ゼロ}水流虚閃」

掬花から生成される水流を虚閃の周りに纏わり着かせスピンをかけたことにより、通常の虚閃よりも威力を上昇させたものだ。

しかし、撃ち放つ寸前に妨害が入った。

「なに、あのヘンなのは!」

「顔にヘンな仮面など着けよって」

「しかも、胸に孔が空いています。なんなんですよ!」

「アレは一体……」

「あれがもしかして……」

「っ!……コイツは……」

「^{ホロウ}虚……」

「このタイミングで出てくるか……」

なぜこのタイミングで出てくる。今回の暴走事件と亡国機業、虚圏は関係ないはずだ。

「総護、銀の福音を少し任せた。俺は、虚を消す」

「わかった」

総護は銀の福音、俺は虚に向き合う。

「貴様には言語機能までは具わっていないようだ。なら、消すまでだ」

虚弾を使い、牽制をする。

「虚ならば、仮面を割れば終わりだ」

そして、急接近して仮面を斬った。
虚は消失した。

（銀の福音に気を向けすぎたな。あれでは探查回路があっても変わらない。……他に虚の気配はない。試作品レベルの能力だったな）

分析を終わらせ、総護の元へ戻る。

そして、なぜか他のメンバーがこちらに来ていた。

……一夏か。

「一夏、もういいのか？」

「織姫のおかげでな」

だとしたら早過ぎる。織姫の蘇生能力は確かだが、一夏の怪我が完全に治るには早過ぎる。

「一夏、私の結界を勝手に破らないでくれるかな」

「い、いや。こいつらがうるさいんだから仕方が無かったんだよ」

「それと一夏、その格好は……」

「ああ、これか？『白式』が第二形態移行した『雪羅』だ」

「そうか。だが、ここにいることの意味はわかっているんだろうな」

「ああ」

「馬鹿め……。こいつはお前が止めをさせ。ここまできて俺らが止めをさすのはお前が哀れだからな」

「……馬鹿にされてるんだよね？だが、わかった！」

「前衛は一夏と箒だ。私は後方支援でもさせてもらおう」

「わかった」

最終決戦は始まった。

Side 〱 白亜 〱 out

第23話 海上戦！（後書き）

次回臨海学校終了の予定です。

話の区切り方が今一わからない……。

感想等、よろしく願いますm（
—
—
）m

第24話 臨海学校へ終幕へ

Side 一夏へ

「一夏、どんだけ外すんだよ」

「しかもその『雪羅』はさらにエネルギーの消費を早くしているはずだ」

「そうだけど……」

零落白夜のシールド、荷電粒子砲。これがさらにエネルギーの消費を激しくする。

「一夏、エネルギーほとんどないだろ？」

「あ、ああ」

「すでに紅椿がエネルギー切れしているからな」

「総護はなんであの縛道ってやつを使わないのよ!」

「君たちが邪魔だから」

「そもそも総護が使う鬼道はレベルがある。いくら総護でも低レベルの縛道では銀の福音の動きを封じれるほど甘くは無い。お前らのような総護を知らない奴ばかりで動き出したら邪魔でしかない」

「エネルギーが大分切れてきているよ、みんな」

「無視するな！」

「この場で無駄話できるほど、貴様らは強くない。死ぬぞ」

本当のことを吐かれると……。

「ああもう！」

「一夏！」

「箒！？お前、ダメージは——」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

紅椿の手が、白式に触れる。

その瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のよう熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？エネルギーが——回復！？箒、これは——」

「絢爛舞踏、紅椿の単一仕様能力だ」
けいらんぶたつ ワンオフ・アビリティー

「一夏、今は福音だけを考える」

「お、おう！」

意識を集中させ、雪平式型のエネルギー刃を最大出力まで高める。
巨大な光の刃を、俺は両腕で支えて振るった。

「うおおおっ！」

福音は俺の横薙ぎを回避、こちらを再び視界に捉えると同時に光の翼を向けてくる。――かかった！

「第！」

「任せろ！」

俺に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び一断の斬撃で断ち切る。

「逃がすかあぁっ！」

さらに脚部の展開装甲を展開し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音の本体に入った。大きく体勢を崩した福音を、俺は下から上へと返す刃で残りの光翼もかき消す。

最後の一突きを繰り出そうとする俺に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行ってきた。

（ここまで来たら、もう引かねえっ！）

全身にエネルギー弾を浴びながら、俺は福音の胴体へ零落白夜の刃を突き立てた。

「おおおおおっ――！」

俺はさらに全ブースターを最大出力まで上げる。

この一撃で福音の動きが停止した。白亜と総護のおかげだな。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……！」

アーマーを失い、スーツだけになった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ——！？」

「——つたく、ツメが甘いよ、ツメが」

鈴が墜ちた操縦者をキャッチした。

「終わったな」

「ああ……。やっと、な」

「いや、まだだ」

「え？」

「『はくふく白伏』」

これが、俺達が聞いた最後の言葉だった。

Side～一夏～out

Side～白亜～

「『白伏』」

総護の鬼道により、一夏、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウ

ラは意識を失った。

「『喰虚』解除。帰刃再使用まで1分つてところだ」

「少し休もうか」

「俺が運ぼう。総護、アイツは……」

「あれは初期段階、ギリアンを大分下回る虚だった。実験段階なのだろう」

「そつだいいが……。これからどうする？」

「おそらくギリアン級の虚を作れるようになれば、一度私達のもとに飛ばしてくるだろう」

「初期のプロジェクトの研究者と、十刃であつた俺のもとへデータ収集つてところか」

「おそらくね。特に十刃のデータを欲しているのだろう」

「厄介なことになるな……」

帰刃使用可能。

「行くぞ」

「ああ」

「帰刃？^{クイント}5、^{いのれ}祈れ『^{サンタテレサ}聖哭螳？』」

俺は腕が四本に増え、左右非対称の角が生えた姿になる。
そして、さらに腕を二本増やし、合計六本の腕になる。

「さて、行くか」

俺は意識を失っている6人を持ち、動き出す。

「総護、もしも場合は任せたぞ」

「ああ」

あえて響転は使わずに移動する。

「作戦完了——といたいところだが、なぜこいつ等は意識がないんだ」

十刃を解除し、意識がない6人を地面に置く。

「私の術だ。もうすぐ起きるでしょう」

「そうか。ご苦労だったな。お前たちは戻っていいぞ」

「失礼する」

そうして部屋に戻った。

Side～白亜～out

Side～一夏～

「っっ……」

「全員起きたか」

俺が目を覚ましたときには既に全員目を覚まし、正座させられていた。

「お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用のトレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

「あ、あの……織斑先生」

「なんだ？」

「白亜と総護はどうしてこの場にいないのですか？」

「お前らと違い、あの二人には福音の撃墜とお前らの捕縛を任務とし、許可をしたからだ」

正論なので一切言い訳ができない。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

さっきから山田先生は忙しく動いている。

「じゃ、じゃあ、一度休憩をしてから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身を見せてくださいね。——あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、織斑君！？」

……わかってます。

というか、『脱いで』の辺りから女子が自分の体を隠したのが、軽く傷ついたぞ。

俺ってそんなにジロジロ見たりする奴に見えるんだろうか……。

「それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ」

俺たちはそれぞれにスポーツドリンクのパックを受け取る。

「ってて……。うあ、口の中切れてるな」

「……………」

「な、なんですか？織斑先生」

こっちを睨んでいたの、つい口を開いてしまった。

「……しかしまあ、よく無事に戻ってきたな」

「え？あ……………」

それはほとんど白亜と総護のおかげなんだけどな。

でも、俺たちのみを案じてくれている千冬姉に、俺は心の中だけで感謝を言った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

なんでみんな俺を睨んでいるんだ？

「あの、織斑君？みんなの診察をしますから、ええと——」

「「「「「とつとと出てけ！」「」「」「」

5人の声に押され、俺は慌てて廊下に脱出。

「ふう……………」

「起きたか、一夏」

「白亜、総護……………」

「怪我はどうした？」

「怪我は織姫のおかげで治ったぜ」

「……………そうか」

「?どうした？」

「なんでもない」

「覗くなよ」

「覗かねえよ！」

「俺たちは戻る」

「あ、ああ」

そっいつて二人はどこかへ行つた。

……なんだつたんだ？

S i d e ー 夏 ー o u t

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても42%かあ。ま、こんなところかな？」

空中投影ディスプレイに浮かび上がったパラメーターを眺めながら、その女性——篠ノ之束は無邪気に微笑む。

「は。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで——」

「——まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

互いに背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、今では『白式』と呼ばれる機体に組み込まれている。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一番目の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は答えない。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私からしたら、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだね」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。しかし、束は別にわからなくても問題はない。

「……そうだな。私も一つたとえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「んー？でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動く

のか、私のもわからないんだよねえ。いつくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うないね」

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

束は答えない。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、12カ国の軍事コンピユーターを同時にクラッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

束は答えない。そこに――

「あの虚には関係はないんだよね、束」

「藍染、旅館を抜け出すな」

「失礼、織斑教諭。しかし私には、いや、私と白亜にはやらなければならぬことがある」

「そーくん。あの虚は一切関わっていないよ。それに知りたくもない。あんな人外のすることなんて」

「かつて私も参加していたんだけどね」

「そーくんはアレを潰したからいいの！」

「そうか」

「藍染、話が見えないのだが？」

「この話はいずれ。白亜と共に――」

そして総護はその場から消えた。
訪れた沈黙。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

そして、束は消えた。
忽然と。突然と……。

Side 白亜

翌朝。朝食を終え、ISおよび専用装備の撤収作業に当たった。
10時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラスのバスに乗り込む。

「あゝ……」

一夏はボロボロだった。

「すまん……誰か、飲み物持っていないか……？」

「……つばでも飲んでいろ」

「知りませんわ」

「あるけどあげない」

一夏は箸を見る。

「なっ……何を見ているか！」

一夏にチョップを喰らわせる箸。

「ふ、ふん……！」

「なあ、白亜か総護飲み物持っていないか？」

今度は俺らか。

「悪いね、一夏。私の分しかない」

「炭酸ならあるが？」

「なんでもいい……」

「受け取れ」

一夏に炭酸飲料を投げる。

「助かるぜ、白亜」

俺に筭、セシリア、シャルロット、ラウラの視線が向けられる。
俺は気にせず目を瞑る。そこに――

「ねえ、織斑一夏君、黒神白亜君、藍染総護君っているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」

「私だ」

「なんのようだ？」

ソイツは20歳くらいで金髪のカジュアルスーツを着た女だった。

「君たちがそうなんだ。へえ」

総護、俺、一夏の順に興味深そうに観察する。

「誰だ？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

総護の顔にナターシャ・ファイルスの顔が近づく。

「そういうことは一夏にどうぞ。間違っても白亜にはやらないように」

「忠告どうも」

総護の忠告が聞こえる。ただ、一夏たちは聞こえなかったのか、頭の上に？を乗せていた。

そして、ナターシャ・ファイルスは一夏に近づき、一夏の頬に唇が触れた。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん。それと白き衣の二人もね」

「え、あ、う……？」

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……」

そして一夏が振り向いた。

「浮気者め」

「一夏ってモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなのですね」

「はっはっはっ」

一夏に近づく4人。

「「「「私のもどうぞ!」「」「」」

一夏に投げられる500mlのペットボトル×4。

そして俺が投げ渡した炭酸を飲もうとしたとき、

プシュウッ!

勢いよく噴き出した。

Side〜白亜〜out

第24話 臨海学校〜終幕〜（後書き）

臨海学校終了です。

絢爛舞踏のあたりは無理矢理ですね。

感想等、よろしく願います。

追加機体設定（前書き）

白亜、総護、織姫の追加設定の説明です。

追加機体設定

【十刃】
エスバード

【追加能力】

ベスキス
探查回路：相手の大体の強さと位置を把握する能力。

第22話で導入し、第23話で能力で一夏が墜ちたことを感知した。

【崩玉】
ほうぎょく

【鬼道】

破道の四、『白雷』
びやくらい
指先から雷を放つ。

破道の六十三、『雷吼炮』
らいこうほう
雷を帯びた爆砲を放つ。

破道の九十、『黒棺』
くろくわん

黒い直方体のようなもので対象を囲み、無数の切り傷を負わせる。

縛道の四、『這縄』
はいなわ

縄状のエネルギーを対象の腕に這うように纏わりつかせ拘束する。

縛道の六十一、『六杖光牢』
ろくしやうこうらう

六つの帯状の光が胴体に囲うように突き刺さり相手の動きを封じる。

縛道の六十三、『鎖条鎖縛』

太い鎖が蛇のように巻きつき体の自由を奪う。普通のISの腕力で解くことは不可能とされる。

縛道の八十一、『断空』

防御壁を作り出し、エネルギーの類の攻撃を防ぐ。

【特殊鬼道】

『白伏』

光に包んだ相手の意識を混濁させ、一時的に昏睡状態に陥れる。

『四獣塞門』

『竜尾の城門』

『虎咬の城門』

『亀鎧の城門』

『鳳翼の城門』

”の四種類の壁を作り出し、壁に囲われた長方形で結界を作る。かなりの強度を誇る。

機体名【盾舜六花】

六花とほとんど見た目の変化はない。

ただし、装甲から衣になった。

能力に変化はないが、技の効果が強化された。

『三天結盾』

防御術。“盾の外”の攻撃を拒絶する。形態、用途は第一形態と同様。

十刃の？4の虚閃、崩玉の天鎖斬月の月牙天衝レベルの攻撃を防ぐほどの強度を誇る。

『双天帰盾』
そうつてんきしゅん

治癒・復元術。“盾の内”の事象を拒絶する。盾の内側を事象が起
こる前までの状態に戻す。

失った体を蘇生させる。第一形態同様、ISの装甲の修復も可能。
治癒中の対象による内側からの干渉を弾く。

『孤天斬盾』
こてんざんしゅん

攻撃術。“盾の両面”の物質の結合を拒絶する。
物質の結合を解く力を持つ。

追加機体設定（後書き）

崩玉の鬼道が増えたりするかもしれません。

閑話 総護と束の噂（前書き）

今回は閑話です。

本編とは無関係な話です。

閑話 総護と束の噂

Side 〱 白亜

臨海学校が終わり、IS学園では一つの噂により騒がしくなっていた。その噂とは――

『藍染総護の彼女は篠ノ之博士』

ということだ。

この噂で女子たちは、特に3年と教師陣は嘆いた。

「相手はあの篠ノ之博士……」

「神様のバカアアアアアッ!!」

「死んだ! 神は死んだ!」

「私の恋は碎かれた!」

「藍染様! 私の藍染様が!」

女の嘆きが学園に響いた。

ちなみに、織斑一夏は特に1年に、俺は特に2、3年に、藍染総護は特に3年と教師に人気があるらしい。

なぜ俺がこんなことを知っているか。それは俺の同居人である井上織姫から聞いた。

そして、この噂の中心人物の一人である藍染総護は今、学園中に監視させられていた。
なぜ監視なのかというと、それは総護の放つ覇気に誰も近づけないからだ。

「おまえも災難だな」

「全くだ」

俺は普通に話している。

「それにしてもお前が、しかも束と付き合つとはな」

「まあ、私は白亜とは事情が違うからね」

俺は人外^{化け物}、総護は人外を生み出す人間。この差は大きすぎる。

「いつの間に付き合っていたんだ？」

「私達が束に会って3年ほど経ったときか」

「3年……確か欠陥だらけの十刃を戦闘可能まで改良されたときか」

「その頃だね」

そしてその1年後、総護は俺たちの目の前から消えた。

「さて、この話はもう止めよう」

「そうだな」

俺達が動き出したら後ろに女がゾロゾロと憑いてきた。
そして、

「用があるなら早く言ってくれないかな？正直邪魔だ」

「え、えーと……」

「あ、えつと、その……」

そして誰かが決心したのか、

「藍染さんの彼女は篠ノ之博士って本当なんですか？」

「事実だ」

その一言で女たちは泣き崩れた。

「行こうか、白亜」

「ああ」

「新聞部です。藍染総護の彼女について取材に来ました！」

「君は誰だ？」

「たしか黛薫子だ。新聞部の副部長だったか？」

「嬉しいねえ、まさか黒神君に覚えてもらえてただなんて」

「そんなことはどうでもいい。束について聞きに來たのだろう?。」

「正解!じゃあ、どこで出会ったか教えて!。」

「断る。束について話すことはない」

「えー。それじゃあ読者がうるさいんだけど」

「そんなことは知ったことではない。……白亜」

「わかった」

俺は総護を掴んで響転でこの場から逃げた。

この騒がしさは夏休みが始まる日まで続いた。

Side 〱 白亜 〱 out

閑話

総護と束の噂（後書き）

今月は更新が疎かになる予定です。
感想等、お願いしますm（| |）m

第25話 夏休み1（前書き）

テストが終わりました。これで更新頻度が上がると思います。来週には修学旅行があるので、また更新が疎かになります。

読んでくださる方々、本当に申し訳ありませんm（|）（|）m

第25話 夏休み1

Side 白亜

八月、IS学園は夏休みに入っていた。世界中から来ている生徒のほぼ半分が国に帰っている。

俺はIS学園に残っている。故郷は存在しないし、家すらない。理由は虚圏を潰してから、ずっと束といたからだ。

そして現状は

「ねえ白亜。ここ行かない？」

「ウォーターワールド？」

織姫に誘われていた。

「今月できたばかりなんだって。それに前売り券は今月分が完売、当日券でも開場二時間前に並ばないと買えないんだって」

「……その入場券をなぜ持っている？」

「えーとね、私の友達が急に行けなくなったからってくれたんだ」

「まあいいか……で、いつ行くんだ？」

「明日だよ」

「……急だな」

「急だけど貰った立場だからなにも言えないけどね」

「はぁ……。とにかく明日だな。わかった」

結果了承した。

翌日、天候は快晴。

今はウォーターワールドにいる。

「人が多いな……」

「そうだね」

そして織姫と二人きりだ。ちなみに俺も織姫も臨海学校と同じ水着だ。

……さっきから気になるのが周りの視線だ。女は俺に、男は織姫に向けられている。

「それにしてもここまで視線がすごいね……」

「ウザいな……」

「……一応言っておくけど斬らないでね？」

「わかっている」

『本日のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！参加希望の方は十二時までにフロントへお届けください！』

そんなときに放送が入った。

『優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

「ねえ白亜、参加しない？」

「断る。面倒なことになりそうだ」

「出ようよー！」

「どうせ女目当ての企画だろ、こんなのは」

「え、でも……」

「正直に言う。俺の推測だが男は『空気読め』って雰囲気で退かされる」

「……やっぱりいいや……、ごめんね、白亜……」

「どうせだ。こいつを見てから帰るか」

「そつだね」

そして、午後一時。

『さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！』

司会の開会宣言で主に男からの歓声と拍手が上がる。

『さあ、皆さん！ 参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！』

再びの歓声に参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応える。

その中に異様な威圧感を放つのが二人……

「あの二人って鈴さんとセシリアさんだよね？」

「賞品が目当てだろうな」

「一夏さんを誘うつもりだね……」

「勝負が見えたな」

『では！ 再度ルールの説明です！ この五〇×五〇メートルの巨大プール！ その中央の島へと渡りフラッグを取ったペアが優勝です！ なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央の島へと続いています。その途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっていきます！ ペアの協力が必須な以

上、二人の相性と友情が試されるということですね!」

「参加者が一般人ならいいコースだな」

中央の島はワイヤーで吊られ、泳いで渡るのは不可、ショートカットもできないようにされている。

しかも『妨害OK』。代表候補生には有利なだけだ。

「代表候補生はいろいろ訓練してるから余裕かな？」

「おそろくな」

『さあ! いよいよレース開始です! 位置について、よい……』

パンツ! と乾いた競技用の音が響き、24名12組の参加者が一斉に駆け出す。

俺と織姫は鈴とセシリアを中心にすることにした。

足払いを仕掛けてきた横のペアをジャンプでかわし、一番目の島に着地する。

次に向かってきたペアを軽くかわし、ついでに足を引っ掛けて水面へと落とす。

この立ち回りで注目を集め、妨害が集中した。

「……見誤ったか？」

「たぶんね……」

真面目組と過激組で別れ、鈴とセシリアは先行した真面目組に離されていった。

それに加え、さつきから何度落とされても即復活し、妨害をする真面目組のグルがいるようだ。

「「うりゃあああつ！」」

組み合った腕でリアットを仕掛けてくる妨害ペア。そして落とされる。

だが今回は、妨害ペアの水着の上を奪い反対側の客席へ投げた。これにより、会場の男性人が沸いた。

「あいつらの動きが雑になったな」

「いい加減嫌になったんじゃないの？」

「あそこまで妨害されれば嫌にもなるな……」

女性一人分しか支えられないはずの小島を二人は大道芸の如き動きで渡っていく。

『こ、これはすごい！ ふたりは高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？』

続く第二の島も、障害が意味を成さなく突き進む。

そして、第三の島、第四の島も難なくクリアー。
そして、第五の島でトップのペアが反転し、鈴とセシリアに向かった。

『おおっと、トップの木崎・岸本ペア！　ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！』

一般人が代表候補生に勝てるはずがない。

『ご存じ二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！仲がよいというのは聞いていましたが、競技が違えど息はぴったりですね！』

前言撤回。これはヤバイか？
そんなことより

「なんでメダリストがこんなとにいるんだ？」

「なんでだろう？」

セシリアが一人でメダリスト・ペアに立ち向かい、振り返った。
そして、鈴に踏まれた。

セシリアを踏み台にした鈴はフラッグを取った。

「勝ったあ！」

鈴の雄叫び。

セシリアはメダリスト・ペアのタックルを受け、水面に落ちた。

——これは……

水柱が立つ。

「今日という今日は許しませんわ！わ、わたくしの顔を！足で！——鈴さん！」

ブルー・ティアーズを展開したセシリアが、憤怒の表情で鈴へと向かう。

「はっ、やろうつての？——シェンロン 甲龍！」

『な、なっなあっ！？ ふ、二人はまさか——IS学園の生徒なんでしょうか！この大会でまさか二機のISを見られると思いませんでした！ え、でも、あれ？ ルールのどうなんでしょう……？』

司会は興奮と困惑が混じっている。

「織姫、客を可能な限り護れ。俺はあのバカを黙らせてくる」

「わかったよ」

互いのブレードがぶつかり合っているところに俺が二人の頭を蹴りでプールに叩きつける。

「こういうのは総護がいると楽なんだが」

プールから出てきた二人は

「白亜さん！なにをしますの！」

「白亜っ！邪魔しないでよ！」

反抗してくる。

「これで代表候補生なのか？——帰刃？8、啜れ『邪淫妃』」

即座に邪淫妃を展開し、ポイズンショットを撃つ。

「貴様ら、ここがどんな場所かわかってやってるんだろっな？」

「「あ」」

「本当にバカだな」

「とにかく！こういったことは！金輪際！しないでくださいね！」

「はい……」

「すみませんでした。この二人には後で私達からおおし置きしておくので」

「俺も悪かった。プールを多少破壊した」

「あなたたち二人は謝らなくていいのよ。こちらからお礼をさせて特に男の方の君、その二人を動きを止めてくれてありがとう。おかげで被害がプールのちょっとした破壊だけで済んだから」

「あ、あのう……」

「何か！？」

「い、いえ、あの、優勝はどうなったのかと思ひまして……」

「……景品、もらえると思つてゐるの？ あれはお礼としてこの二人にあげるわ」

「私はいいです」

「俺もいらん。俺が壊したプールの修理にでも使ってくれ」

「それならそうさせてもらっわね」

「俺たちは帰っていいか？」

「いいわよ。こっちの二人には学園の方から身柄の引取り人が来るらしいから。本当にありがとね」

「失礼する」

「失礼しました」

俺たちは帰路についた。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

第25話 夏休み1（後書き）

夏休みは後二話は書く予定です。

更新をできる限り頑張りますので、応援よろしくお願いしますm（

――）m

第26話 夏休み2（前書き）

更新遅れました。

第26話 夏休み2

Side 白亜

今日は総護と二人で街に出ている。服装は前回と同じだ。

俺の私服は基本同じだ。毎日着るわけではないのでワンパターンだ。さすがに季節で替えるが。

「白亜、本当にワンパターンだね」

「服には興味はない。酷すぎない限り、着ればそれでいいだろ」

「ちょうどいい。少し買おうか」

「態々買うのか？面倒な」

「そう言っな。君はもう少し興味の範囲を広げるべきだ」

「仕方がない、か……」

移動中、相変わらず視線が向けられる。

「またか……」

「毎回ここまで視線が向けられるものなのか？」

「いい加減慣れてきたぞ……」

街に出るたびに浴びる視線に慣れてきた俺たちだった。

買い物。

俺は白のＴ・シャツと黒のジーパン……
買った服の色はほとんど黒か白である。

総護が選んでに買ったのでたぶん似合う……はず。

そして昼時。偶々見つけたオープンテラスのカフェに入った。

頼んだ料理は俺がミートソースのパスタ、総護がヴォンゴレだ。

「来たようだね」

「……だな」

置かれたのは旨そうなパスタ料理だった。

「なかなかの味だな」

「このヴォンゴレも美味しい」

俺のも総護のもなかなか旨かった。

食後、コーヒーを飲んでいると、

「……総護、探査回路に束の反応があるんだが」

「……どこにいる？」

「少し離れているが俺たちを見れる位置だな。ここ出入り口から10メートルほど離れた通路の排気口にいる」

「なぜそんな所にいるんだ？」

「そこがばれずにお前を見れるからだろ」

「……ここで別れようか」

「行ってこい。それに久しぶりだろ？」

「ああ。悪いね」

「気にするな」

俺が教えた通路へと向かった。代金は払ってくれたようだ。

「あれ、お兄ちゃん？」

「ん、白亜か」

俺を呼ぶ声。俺をお兄ちゃんと呼ぶのは一人しかいない。探査回路に反応があったから誰かはわかるんだが。

「シャルロットとラウラか」

「あ、うん。買い物にね。お兄ちゃんは？」

「さっきまで総護と買い物だ」

「さっきのはやはり総護だったか」

「総護はどうしたの？」

「アイツに惚れている天才のところに行った」

「それって篠ノ之博士？」

「ああ。探査回路に反応があった」

「白亜、探査回路とはなんだ？」

「その前に注文しろよ」

「あ、うん」

「そうだな」

シャルロットがラザニア、ラウラは日替わりのパスタだ。

「で、探査回路とはなんだ？」

「相手の大体の強さと位置を感知する能力だ」

「なかなか便利な能力だな」

「ヴァーダン・オージェも便利だと思うが？」

「白亜には必要はないだろう？」

「確かに必要ないな」

「その話はおしまいにして、料理食べよ！」

「う、うむ、そうだな」

「俺はもうしばらくここでくつろいでから帰るとするか」

「そういえば、ラウラは何で買った服着てこなかったの？」

「その、なんだ。汚れては困る」

「ふうん？ あ、もしかして、お披露目は一夏に取っておきたいとか？」

「なっ！？ ち、違う！ だ、ただ、断じて違うぞ！」

明らかに凶星だ。

「そっか。変なこと言ってごめんね」

「ま、ま、まったくだ」

「「ラウラ」」

俺とシャルロットの声が重なる。

「な、なんだ？」

「「フォークとスプーンが逆^だ」」

「~~~~~!!」

指摘されて気づいたラウラは耳まで真っ赤になって口に運んでいたスプーンを離れた。

「ご、午後はどうする？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなあ。日本製の時計って、ちょっと憧れだったし」

「腕時計が欲しいのか？」

「うん、せっかくだからね。ラウラはそついうのってないの？日本製の欲しいもの」

「どうせ日本刀だろ？」

「うむ。日本刀は是非とも欲しいな」

「……女の子的なものは？」

「ないな」

「そ、そうだ、どうせならお兄ちゃんもどつっ。」

「俺は遠慮しておく。女同士楽しみ」

「……どうすればいいのよ、まったく……」

隣の席の二十代後半と思われる女性の声が聞こえた。
悩みがあるのか料理は冷め切っている。

「はぁ……」

深淵の色が見えるため息。

「ねえ、お兄ちゃん、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

「どうするつもりだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

そう言ってシャルロットは席を立て隣席の女性に声をかけた。

「あの、どうかされましたか？」

「え？　——！？」

俺たちを見るなり、ガタンッ！　とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる。そしてそのまま、シャルロットの手を握った。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「え（は）？」

「というわけでね、いきなりふたり辞めちゃったのよ。辞めたって
いうか、駆け落ちしたんだけどね。はは……」

「はあ」

「ふむ」

「……………」

「でもね、今日は超重要な日なのよ！ 本社から視察の人間も来る
し、だからお願い！あなたたち三人に今日だけアルバイトして欲し
いの！」

ちなみにみこの店はメイド & amp ; 執事喫茶だ。

「話を聞く限りでは二人で十分なはずだが？」

「ついで？」

「俺は調理場に行かせてもらう」

「え、あなたには接客して欲しいんだけど……」

「接客は嫌いだ。それにあんたは俺たちに頼んだ立場だということ
を忘れるな」

それに加えて執事服を着るつもりはない。

「くっ……！痛いところを突かれたわね」

「白亜は料理できるのか？」

「それなりにな。一夏よりはできる」

「一夏よりって相当だね……」

「メニューとレシピを教えてくれ」

「え、あ、はい。調理場の人が教えてくれるわよ」

「わかった」

「じゃあ、みんな着替えてきてね」

着替え終わり、再び集合する。

「あのー……」

「なにかしら？」

「なぜ僕は執事の格好なんでしょうか？」

「だって、そっちの子が接客を辞退するから。それに、ほら！そこいらの男なんかより、ずっとキレイで格好いいもの！」

「そうですか……。うう……ひどいよ、お兄ちゃん……」

「悪いな、シャルロット」

落ち込み気味になるシャルロット。

「大丈夫、すごく似合ってるから！」

「そ、そうですか。あはは……」

おそらくそういうことではないんだがな……。

「店長、早くお店手伝って」

フロアリーダーがヘルプを求めて声をかける。すぐに店長は最後の身だしなみをして、バックヤードの出入り口へと向かった。

「あ、あのっ、もう一つだけ」

「ん？」

「このお店、なんていう名前なんですか？」

そういえば聞いてなかったな。

店長は大人びた容姿に似合わないお辞儀をした。

「お客様、@クルーズへようこそ」

「紅茶二つにコーヒー四つお願い！」

「了解」

俺はさつきから頼まれる品（3分の2が紅茶やコーヒー）を素早く仕上げる。

「紅茶2、コーヒー4、できたぞ」

俺の作業のよさにもとからいた人たちは驚いていた。

「ホットケーキとシナモントーストお願いします！」

「エビピラフと日替わり定食お願い！」

俺はレシピを覚えたので、エビピラフを作りながらホットケーキを作る。

元々いた人たちはシナモントーストと日替わり定食を作る。

「ホットケーキ完成」

「シナモントーストできたよ」

エビピラフの仕上げにかかる。

「エビピラフ完成」

「こっちは日替わり定食できたぞ」

「シャルル君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

黒神は二人いるので、少し前まで使っていた偽名の「シャルル」を使っていた。

臨時の同僚にあたるスタッフたちは、ほうつとため息を漏らした。初めてのアルバイトだというのに、その立ち居振る舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、けれど嫌味ではない。

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

年上であるにもかかわらず、女性は緊張した面持ちでシャルロットに答える。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで」

「わ、私もそれでっ」

この二人は常日頃からノンシュガー・ノーミルクのだが、今日に限ってはあえて目の前の美形執事に奉仕してもらいたい一心でわざとそう答えたのだった。

シャルロットは柔らかな笑みの浮かべてうなずく。

「かしこまりました。それでは、失礼いたします」

女性客はシャルロットに見入っていた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう……」

それぞれ、カップを受け取った女性客は、ぎくしゃくとした動きで一口飲んだ。

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください。
お嬢様」

綺麗なお辞儀をするシャルロットはまさしく「貴公子」だった。

一方、ラウラは男性客三名のテーブルで注文を取っていた。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

「……………」

「あのさ、お店何時に終わるの？一緒に遊びに——」

ダンッ！ と、テーブルに垂直に叩きつけられたコップが大きな音と一緒に滴を散らかす。

面食らっている男性客に、ぞっとするほど冷たい声で告げた。

「水だ。飲め」

「こ、個性的だね。もっと君のことよく知りたくなつ——」

台詞の途中で、オーダーを取ることなくテーブルを離れる。そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持つて行った。

「飲め」

ソーサーが割れるのでさつきよりは多少やさしめにカップをテーブルに置く。それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮なくこぼれた。

「え、えっと、コーヒー頼んだ覚えは……」

「何だ。客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけだし……」

「た、例えば、コーヒーにしてモカとかキリマンジャロとか——」

言葉を遮るように、ラウラはまったく笑ってない目で、その顔に嘲笑を浮かべた。

「はっ。貴様ら凡夫に違いがわかるとでも？」

「いや、その……すみません……」

結局、ラウラの絶対零度の視線と許しのない嘲笑に折れた。

「コーヒーを飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい……」

ドイツの冷水と呼ばれたラウラの一面は今でも健在のようだ。

しかし、その人を寄せ付けない態度ですら、美少女の外見を伴えば魅力となるらしい。

「あ、あの子、超いい……」

「罵られたいつ、見下ろされたいつ、差別されたいいつ！」

特殊な性癖を持つ者までいた。

「あ、あのつ、追加の注文いいですか！？できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒーください！銀髪のメイドさんで！」

「こっちにも美少年執事さんを一つ！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

そんな騒動は一気に店内に感染し、爆発的に喧噪を大きくしている。そして、混雑が二時間ほど続いて、さすがのシャルロットとラウラにも精神的な疲れが見え始めた頃、その事件は起こった。

「全員、動くんじゃないえ！」

「全員、動くんじゃねえ！」

男の声が聞こえた後、銃声が聞こえた。

「きゃあああつ！？」

「騒ぐんじゃねえ！ 静かにしろ！」

何かあったようだ。俺は調理場からフロアを覗く。

視線の先にあったのは、ジャンパーにジーパン、覆面、手には拳銃を持った男が三人いた。そして、背中のバックからは何枚かの紙幣が飛び出していた。

「……銀行強盗か」

見るからに古い。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返し——」

警察の対応も古かった。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員——」

「うるたえるんじゃねえっ！焦ることはねえ。こっちは人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金支払って手に入れたコイツがあるし」

威嚇射撃。蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げた。

「そろそろ出るか……」

「おい、聞こえるか警官ども！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！もちろん、追跡車や発信機なんかつけるんじゃないぞ！」

「そろそろ幕を下ろさせてもらおうか」

「なんだ、お前。大人しくしていろっていつのが聞こえなかったのか？」

「貴様らが大人しくしろ！」

俺が一番近くにいた雑魚1を蹴り飛ばす。豪快な音と共に蹴り飛ばされた男はそのまま気絶した。

「な、なっ、なにしゃがる！」

「ただの塵掃除だ」

さっき蹴り飛ばした際にテーブルから落ちたナイフとテーブルの破片を即座に拾い、雑魚2に投げる。ナイフはサブマシンガンに突き刺さり、破片は男の眉間にあたり、そのままガンッ！と音と共に

気絶する。

「後は貴様だけだ。塵のトップ」

テーブルの破片をさらに2つ拾い、リーダー格の男のハンドガンを弾き飛ばす。止めに破片を眉間に決めて、意識を奪った。

「お兄ちゃん。なにしてるのさ……」

「ただの塵掃除だ」

俺は落ちたハンドガンとショットガン、使い物にならなくなったサブマシンガンを拾い集めた。

「お、終わった……？」

「助かったの、私達……」

「い、一体何が……」

しばらくの間、静まり返っていた店内。危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々は、何度もまばたきを繰り返し俺の姿を呆然と眺めていた。

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！あ、ありがとう！黒髪の少年、ありがとう！」

助かった実感がわいたのか、突然店内が騒がしくなる。その様子を見て、警官隊も詰めかけてくる。

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「お前らは下がれ。代表候補生で専用機持ちが公になるのはまずい」

「そうだな。このあたりで失敬するでしょう」

警官隊やマスコミ関係者も見えた。

——しかし、事態は再び変化する。

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いつそ全部吹き飛ばしてやらあつ！」

軽く四十平方メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾が見えた。

「悪いな、二人とも。処理任せた」

俺が持つショットガンとハンドガンをシャルロットとラウラに投げ渡す。

ダダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

高速五連射×2の弾丸は、的確に起爆装置と爆破の信管、そして導線だけを撃ちぬいた。

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

ジャキッ！ と二丁の拳銃を突きつけられ、さっきまでの威勢がなくなり、男は震える声で謝った。

「す、すみつ、すみませんっ！ も、もうしまつ、しませんっ。い、命ばかりはお助けをっ……」

ドスッ 俺は手刀で男の意識を奪い、俺たち三人はこの場から去った。

そして、『黒髪の美少年と銀髪の美少女メイド、金髪の美少年執事が銀行強盗を全滅させた』という噂が流れた。

その日にシャルロットとラウラは一夏と少しあったようだった。

Side ～白亜～ out

第26話 夏休み2（後書き）

長くなりました。

プールと銀行強盗に白亜を介入させたかったので、原作との時間ずれをしました。

感想等、よろしくお願いしますm（　　）m

第27話 夏休み3 〽告げられた過去〽(前書き)

修学旅行終わった……。しかも途中で体調崩して残念な結果になってしまったOTL

中学の記念が残念すぎる……。OTL

残念すぎる結果に終わってしまった修学旅行を終え、なんとか更新できました。

第27話 夏休み3 告げられた過去

Side 白亜

「広いな」

「始めて来たよ、そーくんの家」

「家と言つより城だな」

「総護は一体何者だ？」

「全員着いて来い。俺の後を追わんと危険だ」

「危険とはなんですか？」

「トラップがある」

「さすがにここまで広いとトラップの一つや二つはあるってわけね」

「数は相当あるぞ」

「げっ、マジかよ……」

「行くぞ」

俺達は総護の家（もはや城）に来ている。
なぜこんなことになっているかというと、俺がバイトに付き合わされて、銀行強盗を全滅させた日に、総護が束と相談して、一夏たち、

専用機持ちとブリュンヒルデに俺たちの過去を話すことにしたらしい。俺たちの過去はブリュンヒルデはともかく、一夏たちには早過ぎる気がするんだが。……シャルロットには話したけど。

「すげえ……」

一夏たちが驚愕の表情をしている。
なぜなら、天井が青空だからだ。

「この青空の光の射すところはすべて総護に監視されている。そして、こここの壁面すべてに監視カメラが設置され、青空の光が届かないところも管理されている」

「すべて!？」

「馬鹿げた機能だな……」

「この広さの壁面すべてって、どんだけ金かってんのよ……」

「さて、そろそろか」

「これだけ広くてもう着くの？」

「あいつなりの配慮だ。お前たちへのな。あれをくぐれば総護のいる部屋に着く」

「ようこそ。私の城、『ラス・ノーチエス虚夜宮』へ」

「そーくーん！」

「束か。白亜、案内ありがとう」

「それにしても久しぶりだな、ここは。相変わらず無駄に広い」

「で、藍染。私達に何の用だ？」

「いい加減教えておいたほうがいいと思ってね。私と白亜の過去を」

「すでにシャルロットはざっくりだが知っているがな」

「え？みんなに教えるの？『アレ』は重過ぎるよ？」

「お前ら見ただろ？臨海学校の暴走事件のときにいた仮面をつけた奴を」

「あれか……」

「あの胸に孔が開いたヘンなのですわね……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。みんな、何のことを言ってるんだ？」

「ああ、お前はあの時はいなかったな」

「一夏が来る少し前にヘンなのがいたのよ」

「白亜が速攻で消したけどね」

「で、あれはなんだったんだ？」

「それも含めて、今から説明するんだ。まずは適当に座ってくれ」

一夏たちは広すぎる部屋にあるテーブルに俺と総護を囲うように座る。

「さて、まずは私達のISについてだ」

「IS？まあ、あんたたちのISは普通じゃないんだけど」

「私達のISが通常のISと違うのはみんな知っているだろう。通常のISと違う点、まずはコアだ」

「コア？」

「私達のISのコアは『クロス・コア』と言って、通常のコアよりも強度等が桁外れな性能を持つ」

「今のところクロス・コアは俺の『十刃』、総護の『崩玉』、織姫の『盾舜六花』に組み込まれている」

「『クロス・コア』ってなんだ？」

「『クロス・コア』はねえ、この天才束さんと愛しのそーくんとは
ーくんが作り出したこの世に三つしかない特殊なコアでねえ、所持者の素から持つ能力をISに組み込み、IS対応にしたり、その能力を強化したり、所持者以外の能力を使えるようになったりする最高性能にして規格外仕様なコアだよ。欠点は組み込んだ能力は制限されるか使えなくなることなんだよね」

「所持者の素から持つ能力って……」

「私は『事象を拒絶する』能力を持っていたんだよ」

「私は『鏡花水月』と一部の『鬼道』がそうだった」

「そして俺が『クアトロ・エスパード第4十刃』としての能力だ」

「クアトロ……エスパード？」

「それが俺の過去だ」

「黒神の過去？　どういうことだ？」

「俺は元々人間ではない」

「人間ではないってどういうことだ？」

「白亜は暴走事件のときに現れた虚の頂点に立つ十人のうちの一人
ホロウだったんだ」

「本当の俺を見せてやる。総護、待機状態の斬魄刀をしばらく持つ
ていてくれ。——クロス・コアからクアトロ・エスパードの力を
隔離」

俺のIS『十刃』から俺の持つ能力を隔離し、俺の体に戻る。

「ぐっ……」

痛みと共に力が戻る。そして、死覇装の胸元を開く。

「なっ……！」

「そんな……」

頭に破面の仮面、両眼から垂直に伸びた緑の線の仮面紋、エスティグマ喉元に孔、左胸に「4」の刻印。

服装は元から死覇装だったので昔の姿そのものになった。

「第4十刃、ウルキオラ・シファア。これが俺だ」

「始めは十刃の力を封印し、白亜を人間にした。クロス・コアが完成したことにより、白亜は人間のままで十刃の力を扱えるようになった」

「この状態ではブリュンヒルデが斬りかかろうと傷一つつけることもできない。できるのは総護だけだ」

「さて、そろそろ本題に入ろうか。白亜は破面と呼ばれる虚の頂点、十刃の一人だ。だが、その十刃を作るにあたって二つのプロジェクトが関わってくる」

「『プロジェクト虚』と『プロジェクト破面』だね」

「そうだ。初めに興ったのが『プロジェクト虚』。これは人間を凌駕する戦闘能力を持つ生物兵器を生み出すためのプロジェクトだ。

ヒュージ・ホロウ暴走事件のときは虚、ただの雑魚だ。アレよりも巨大なのが

巨大虚だ。メノス・グランデ雑魚だが人間を遥かに超える能力を持つ。巨大虚を

上回る能力を持つのが大虚だ。大虚には階級があり、『ギリアン

級』、『アジューカス級』、『ヴァストローデ級』の三段階があり、
最下級大虚は数が最も多く、外見にほとんど違いがない。明確な
自我を持たず、知識は獣並みしかない。中級大虚は強い自我を持
った特別なギリアン級が進化したものだ。見た目は個体ごとに違
い、ギリアンよりも小さく、数も少ない。知能が高く、戦闘能力
はギリアンの数倍だ。数の多いギリアンをまとめる存在だ。最
上級大虚は大虚の中で最上級で、大きさは人間程度しかない。見
た目は人間に近いが、完全に人型ではない」

「ちょっと待つて。白亜は完全に人型だよね？なんで？」

「俺は破面アランカルと呼ばれる存在だ。『プロジェクト破面』により変化し
たヴァストローデだ」

「話を続けようか。ヴァストローデの戦闘能力はアジューカスを
遥かに超える。いくらISを纏っていても一夏たち程度なら倒せ
ないだろう。しかしまあ、織斑千冬なら互角くらいなら渡り合え
るだろう。ちなみに虚には超速再生能力があり、傷は即座に回復
する」

「ならどうやって倒すのよ！」

「虚の弱点は仮面だ。仮面を破壊すれば消滅する。それ以外に普
通なら死ぬ傷……頭を落としたり、体を真つ二つにする等がある」

「つまり殺すことを前提にしろ、と言うことだ」

「殺すつて……」

「そんなこと……」

「できるわけねえじゃねえか！」

「相手は人ではない。ただの生物兵器だ。まあ、人の形をしているがな」

「さて、次に興った『プロジェクト破面』について説明しようか。これは『プロジェクト虚』により生まれた虚に私の持つ力を手に入れようとしたプロジェクトだ。破面は不完全で、成体になる者がすべてではなかった。成体の破面は割れた仮面と白い死覇装を纏い、真の姿と能力を刀状に封印した『斬魄刀』を持っている。特に大虚が破面化した場合、破面化と同時に孔の部分を除けばほぼ人間とほとんど変わらない外見になる。但し、確実に人間と変わらないの外見になるのはヴァストローデ級だけで、ギリアン級・アジューカス級は破面化の際に少なからず虚を思わせる特徴を残すことのほうが多い。虚の特徴を多く持った者ほど知能が低く、死覇装を纏っていない者もいる」

「死覇装ってなんだ？」

「話の流れから読みなさいよね、バカ！　つまり、白亜が着ているのが死覇装って奴なのよ」

「元のベースはそーくんの黒い死覇装だね」

「藍染も白だった筈だが？」

「私は元々黒の死覇装だ。『崩玉』に斬月を追加させたときに設定を変えたんだ」

「一応言っておくが『斬月』は崩玉展開時の背中にある無駄にデカイ斬魄刀だ」

「あれ？そんなのあったけ？」

「お前は一々口出しするな、馬鹿者。話が進まん」

一夏が黙ったところで総護が話を再開する。

「破面の孔は虚と違い、胸にあるとは限らない。白亜……いや、この場ではウルキオラと呼ぼうか。ウルキオラの孔は喉元にあるように、体の何処かにある。ただし例外もあり、孔があるか不明な破面もいる。それと殆どの破面は虚のときに持っていた超速再生能力と引き換えに強大な力を手に入れた。破面は人間に近い感情や思考を持っている。そして、すべての破面の中で戦闘能力が高い10人を『十刃』と呼ぶ。十刃にはそれぞれ人間が死にいたる要因である十の死の形を司り、それが各十刃の能力・思想・存在理由になっていた」

「俺の持つ『十刃』には俺達がプロジェクトを破壊したときの十刃の能力を強化したものと劣化させて組み込ませた。その時の帰刃名と死の形を順番に教えてやる。？」
「？」は『喰虚』、死の形は『強欲』。
「？」8は『邪淫妃』、死の形は『狂気』。
「？」7は『呪眼僧伽』、死の形は『陶醉』。
「？」6は『豹王』、死の形は『破壊』。
「？」5は『聖哭螳螂』、死の形は『絶望』。
「？」4は『黒翼大魔』、死の形は『虚無』。
「？」3は『皇鮫后』、死の形は『犠牲』。
「？」2は『髑髏大帝』、死の形は『老い』。
「？」1は『群狼』、死の形は『孤独』。
「？」10および？0は『憤怒』、死の形は『憤怒』だ。
俺はさっきも言ったように？4だ。この中で『黒翼大魔』を見たことがあるのは総護と織姫、束の三人だけだ」

「織斑先生と戦ったときは使いませんでしたの？」

「私とやったときは黒神は？9？5、？3を使った。？4を使わなかったのはこれが関係しているようだな」

「ああ。？4は俺自身の能力だ。こいつはクロス・コアの核に組み込まれている。まずありえないが？4使用時に大破した場合はしばらくの間俺自身の能力はさらに半減され、十刃を使用できなくなるからな」

「つまり私にかなり能力制限した状態で、それに加えて本気も出さずに闘ったのか」

「本気の全力を出したらいくらブリュンヒルデでも死ぬぞ。この世界で全力の俺に勝てるのは総護だけだ」

「鏡花水月があるからか？」

「それもあるが根本的問題だ。クロス・コアに能力を組み込んでいるために今の総護は身体能力的にも普通の人間よりも優れているだけだが、本来の総護の力はすべてにおいて俺を上回る」

「「「「「「「！？」「「「「「」

「あんたより上って、総護は人間でしょ！？」

「人間で化け物より強いって、総護のほうが化け物だな」

「総護がその気になれば世界を余裕で支配できる」

「昔はそんなことも考えていたね。今ではどうでもいいさ。この環境は十分面白い」

「そうか……」

俺も十分気に入っているしな。

「お前らが過去を私だけでなく、こいつらにも教えたということはなにかあるのだろう？」

「『亡国機業』と二つのプロジェクトを行っていた『ファントム・タスク虚圏』が繋が
り、私とウルキオラで抹消したプロジェクトが復活した。私の知る限りでは亡国機業

はISを狙っている。つまり、ISを多く保持し、尚且つ男のIS操縦者である私達も狙うであろう」

「亡国機業と繋がった虚圏は虚を作り出し、俺たちの前にデータ収集のために送り込まれるはずだ。それに十刃であった俺のデータと、虚圏の元上位権力者であり、破面化の礎になった総護の能力のデータを収集するために狙われる」

「つまり、虚と破面の特徴を教えて対策を取ろうってことだよな？」

「そうだ。束、持ってきたか？」

「もっちらんさー！そーくんに頼まれたから持って来たよ！はーくんと闘ったのときよりも強化した、第四世代に匹敵する性能を持たせたちーちゃんのお機、『暮桜』！」

「またお前と戦うことになったか……。頼むぞ『暮桜』……」

「準備はできた。今からヴァストローデとの戦闘になった場合をイメージし、ウルキオラと織斑千冬、一夏、箒、セシリア、鈴、シヤルロット、ラウラの1対7の殺し合いをしてもらう」

「殺し合いだと！？ふざけるな！」

「ふざけてなどいない。これから人間に酷似した姿の破面と命をやり取りをすることになる。破面と闘うことに躊躇うと自分が死ぬ。そのためのシュミレーションだ」

「私達はそんなことを言っているのではない！もしもこの場の誰かが大怪我をしたらどうするつもりだと言っているんだ！」

「なんだ、その程度のことか」

「その程度だと！？人の命が関わって来るんだぞ！」

「そのときのために織姫がいる」

「なんだと？」

「私の六花は『事象を拒絶する』能力を持つって言ったよね？つまり、事が起こる前まで戻すことができるんだよ。寿命で死なない限り、私の力で生き返る」

「そういうことだ。怪我に関しては気にするだけ無駄だ。俺は帰刃していいのか？」

「初めの方は素で7人を相手にしてもらうが、適当に帰刃してもらって構わない」

「わかった。まだ天蓋に出なくてもいいよな？」

「室内でなければどこでもいいよ。ただ、帰刃を使うなら天蓋の上でやってくれ」

「何で態々天蓋ってやつの上で帰刃しないといけないんだ？」

「また一夏か。いや、今回はこの場にいる殆どの疑問か」

俺と総護以外が頷く。

「ウルキオラ……クアトロ以上の帰刃はそのもので天蓋内を破壊しかなないからだ」

「……いい加減慣れてきましたわ……お二人の異常さには……」

「……俺もだ……」

「私も……」

「全員慣れてきてるよね？」

「だろうね……」

「さあ、やろうか。俺は容赦はしない。殺す気で来い」

「やってやるうじゃない！」

「さて、やる気になったところで早速やるうか」

俺たちは外に出て、一夏たちIS組みは着替えさせた。

「そろったな。もう一度言っておく。俺は殺す気でやる。お前らは俺を殺す気で来い」

「この人数だ。それに千冬姉もいるんだし、やれるさ」

「始めるか……。総護、合図を」

「煙幕と共に始めてくれ——縛道の二十一『赤煙遁』」

大きな煙幕が上がる。

模擬の殺し合いが始まった。

武装から前衛が一夏、箒、ブリュンヒルデ。後衛がセシリア、シャルロット。前衛、後衛兼用が鈴とラウラ。

「はぁああああ！」

一夏の雪平式型が俺をめがけて振り下ろされる。
俺はそれを素手で掴む。

「な!？」

「これなら!」

箒が二本の刀で斬りかかってくる。

雪平式型を掴んだままの一夏を箒に向けて投げる。
そして、俺はブリュンヒルデに向かう。

「相変わらずの戦闘能力だな。 だが！」

雪片を振りかざすブリュンヒルデ。俺の頭上と左からはレーザーと実弾が飛んでくる。それと

「衝撃砲か……」

俺は射撃を気にせずにブリュンヒルデの雪片を手刀で迎え撃つ。

ガギイイン！

鋼同士がぶつかり合ったような音が響く。

「さすがはブリュンヒルデというところか。 俺の鋼皮が少し斬られたか」

俺の手には小さな傷ができていた。

「そろそろ本気で行くか……」

斬魄刀を抜き、ブリュンヒルデ、一夏、箒を同時に相手をする。
飛んでくるレーザーと射撃は避け、衝撃砲は虚弾で相殺する。

「虚閃」

ブリュンヒルデの雪片を片腕で受け止め、虚閃を一夏に放つ。

「ぐっ……」

直撃はしなかったようだが、装甲が削られていた。

それから10分。

虚弾と虚閃を使い、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラにもダメージを負わせ、一夏と箒の装甲はかなりダメージを受け、ブリュンヒルデは俺に傷を少しだが負わせていた。

「そろそろ幕引きだ」

俺は天蓋に向かって跳び、天蓋の一部を切り裂き、破壊する。

天蓋の上には夜空が広がる。

俺は天蓋にある塔の頂上に降り立ち、帰刃する。

「全員来たな。——鎖せ『ムルシエラ黒翼大魔』」

黒い液体が舞い上がり、雨のように降り注ぐ。

俺は背中に漆黒の翼を生やし、四本の角の生えた兜状の仮面、スカーフト状の死覇装になった。

「あれが……」

「白亜の本当の姿……」

「動揺するな。構えを崩すな。意識を張り巡らせる。一瞬も気を緩めるな」

手に光の槍を生み出し、一瞬で一夏に一撃を入れて、エネルギーを切らせた。

「なに!？」

「速い……」

「反応できなかった……!？」

光の槍を連続で投げ、セシリア、鈴、ラウラのエネルギーを切らせた。

「この程度か……残念だ」

高速で移動し、光の槍の一撃をシャルロット、箒に入れて、残りはブリュンヒルデ一人になった。

「記念だ。見せてやろう。これが、解放状態の十刃が放つ、――黒い虚閃だ」

俺の指先に碧色に縁取られた漆黒の光が集まる。

セロ・オスキュラス
「“黒虚閃”」

放たれた虚閃はブリュンヒルデに当たった瞬間、割れた。

「ほう。斬ったのか。さすがだな」

「零落白夜で斬れるとは思わなかったがな」

「一夏ではできない芸当だな。さあ、残りは貴様一人だ。貴様の力、ヴァストローデに届くところを見せてもらおうか！」

光の槍を投げるが、雪片で弾かれる。この速度の槍に追いつけるとは……。

「貴様も十分異常だな」

「それは光栄だな！ はあああああつー！！」

光の槍と鏑迫り合いになっていた状況から雪片の刃が俺に届く。そして、

俺の右腕を切断した。

「白亜の腕が……」

「うそ……でしょ……」

「千冬姉……いくらなんでも……」

「やりすぎでは……?」

「お兄ちゃん……」

そんな声が聞こえてくる。

「俺の腕を切るか。 さすがと言っべきだな、ブリュンヒルデ」

「殺す気で来いといったからな。 遠慮はしない」

「だが、この程度の傷は無駄だ」

「っ!？」

ブリュンヒルデの驚愕の表情。 まあ、普通驚くか。 腕が再生したのだから。 腕が再生し

「俺は超速再生能力を保ったまま破面となった个体だ。 脳や内臓が吹き飛ばされない限り殺されることはない」

「さすがは頂点に立つものだな。 常識は存在しないか」

「俺たちの存在そのものが常識ではない。 常識が存在するわけではない」

「それもそうだな」

「そろそろ終わらせるか」

「そう簡単に負けるわけにはいかん！」

光の槍と雪片の刃が交わり、飛ぶ槍は弾かれ、稀に光の槍は打ち消される。

ここまで反応されるのは久しぶりだな。だが、攻撃はブリュンヒルデに少なからず届く。

「全力を少しだけですか」

「これだけやってまだ全力ではないか。つくづくふざけた戦闘能力だな」

……いや帰刃した俺に着いて来るだけでも十分ふざけている。

心の中で突っ込んだ後、移動速度を上昇させ、圧倒的なスピードで攻める。

反応されていた光の槍がブリュンヒルデの装甲に確実に届き始める。

「終わりだ。——黒虚閃」

漆黒の閃光がブリュンヒルデとその機体が飲み込まれた。
今度は切り裂かれず、ブリュンヒルデは墜ちた。

「やはりヴァストローデに確実についていけるのは織斑千冬のみか」

「予測通りだな」

「一夏さん達だと4人は必要だね」

「用意しておいて正解だったな」

「みんなに渡すものがある」

総護は一夏たちにキューブ状の箱を渡す。

「なんだこれ？」

「それは反膜の匪。^{カハ・ネガシオン}元々は十刃に託す部下のための道具だったんだけど。基本的^{ヌメロス}に数字持ちを対象にしたものだから、それ以上の霊圧を持つものに対しては使用時間が限定されるんだ」

「気になるのがあるが、この能力は？」

「対象を永久的に異次元に幽閉する。元々は虚を対称にするものだが、対IS用にも改良した物だ。ISには第二世代型なら軽く見積もっても5時間。第三世代型なら4時間、第四世代型なら3時間は幽閉できるはずだ。」

「ちなみに、これはISに対しては機能制限してある。理由はISと人間ごと永久的に幽閉してしまうからだ。だから、君たちは絶対にリミッターを外さないこと。まあ、簡単にリミッターが外れるほど脆い造りはしてないけどね」

「間違ってもISを展開していない人間には使用するな。リミッターの意味がなくなる」

「もし使用した場合は人間と待機状態のISの両方を永久的に幽閉するということか」

「そういうことだ」

「使用条件はもしもの緊急時のみだ」

「『『『『『わかった（りましたわ）（わ）（よ）』『』『』『』』』』」

「それで、気になることはなんだ？」

「数字持ちと霊圧とやらだ」

「数字持ちは成体の破面のことだ。数字持ちの数字は生まれた順番に11以上の数字が与えられることから数字持ちと呼ばれる。」

次に霊圧だ。霊圧を説明する前に霊力と呼ばれる力を教えるか。

霊力は霊なる存在に働きかける力のことだ。普通の人間も持っているがとても微弱、霊感があるから霊が見えるのは霊力が並みの人間よりも高いから見える。霊力の高さが戦闘能力の高さを現すケースが多く、虚や破面は高い霊圧を持つ。霊圧は霊的な圧力のこと、霊力が高い者ほど発する霊圧も強くなる。一定以上の霊力を持たないものは霊圧を発することはない。普通の人間が発することがないのはそのためだ。そして、霊圧は単なる威圧感だけではなく、ある程度の実質的な圧力を持つ。虚閃や虚弾、鬼道がそれにあたる」

「ちなみに、クロス・コアから力が戻っているウルキオラは今、全力で霊圧を抑えている。私もクロス・コアから力を私自身に戻せばウルキオラ以上の霊圧を放てる」

「総護が異常なのは人間なのに霊力が異常すぎるほどに強大だからだ」

「総護の異常さがわかった気がする……」

「興味本意なのだが白亜の霊圧とやらを実際に感じさせてもらえないだろうか？」

「別にいいが、霊力の無い者が霊力の高い者の霊圧を受けると気を失うことがあるが？」

「それでもだ」

「ウルキオラ、一応抑えておけ」

「全員、覚悟はできているのか？」

全員無言で頷く。

「行くぞ」

抑えて半分にも満たない霊圧を発する。

「がっ……！？」

「な……に……！？」

「これほどか……」

総護、織姫、ブリュンヒルデ以外のメンバーは全員膝を着く。

「もう止めておけ」

「そうするか。さすがはブリュンヒルデ。全力ではないにしろ立ったままか」

「私でもきつかったがな」

それでもさすがだな。

「お前ら、大丈夫か？」

「ああ」

「何とか……」

「こいつらの共通意識は意識が飛びかけたところか？」

「だろうね」

例外を除いたメンバーは息を乱していた。

「しばらく休んでから解散としようか。 帰りは黒腔ガルガンタでそのままI
S学園寮でいいかな」

「そうするか」

それから一時間ほどで一夏たちは回復した。

「さて、帰るか」

「IS学園まで黒腔を繋げた。白亜、頼んだよ」

「ああ。お前は束を任せた。全員、俺の後ろについて来い。
決して俺の後ろからずれるな。墜ちるぞ」

「ちなみに墜ちたらたぶん死ぬから」

そのセリフで全員固まった。

「安心しろ。俺が広い範囲で足場を作ってやる。ふざけない限り墜ちることはない」

「それならいいけど……」

「黒腔を開いた。通常の10分の1の距離しかないとすぐに着くはずだ」

「それはありがたいな」

「行くぞ」

俺たちは黒腔を使い、虚夜宮を出た。

S
i
d
e
〜
白
〜
o
u
t

第27話 夏休み3 〵告げられた過去〵（後書き）

内容は14話でシャルロットに話した内容をより詳しくしたものでした。

内容が14話と大分変わっている気はしますが、この中ではこの話が正確なので14話の方はあまり宛にしない方がいい気がします。編集しても上手くまとめられる気がないので、あくまでもこちらが詳しい設定です。

Wikiを見て破面や虚、霊圧辺り（殆ど全部ですが）を勝手に解釈と変更をしました。

感想など、よろしく願いますm（ ー ）m

第28話 新生徒会長（前書き）

今回は短めです。

第28話 新生徒会長

S i d e 白亜

SHRと一限目の半分を使い、全校集会が行われた。内容は今月にある学園祭についてだ。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

久しぶりに見るがイラつくな。夏休み入る前に何度か部屋に侵入されたからな。奴への苛立ちがある。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容と言うのは」

嫌な予感がするんだが……。

「名付けて、『各部対抗織斑一夏・黒神白亜・藍染総護争奪戦』！
コイツ……、一回殺してやろうか……。

「“散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれ
ば空 槍打つ音色が虚城に満ちる”！」

大声で詠唱を始めた総護。

「総護待て。この場にいる全員まとめて吹き飛ばす気か」

俺は響転で楯無の真横に移動し、斬魄刀を首筋に近づける。

「楯無。 大体の予想はつくが、この説明をしてもらおうか？」

「は、白亜君？ これは一体どういう状況なのかな？」

「俺の問に答えろ」

「私の話聞いてる？」

「俺の問に答えろと言っているんだ」

「君たちを投票で一位の部活に強制入部させようって企み？」

「俺は承諾していない」

「だってあなたたち男子3人が部活に入らないのがいけないんだもん！」

「開き直るな。 どうせ俺たちを生徒会に強制入部させるのが目的なんだろ？」

「あはっ、ばれた？」

「……………」

「……………なんで黙るのかな？」

「貴様に呆れていたただけだ」

「呆れないでくれる？」

「10分だ」

「……どういうこと？」

「10分で貴様が俺に一撃入れることができたなら乗ってやる」

「そんな内容でいいの？」

「どうせすぐに終わる」

一限目の残りと二限目の始めの時間を使い、俺と楯無の戦闘が始まった。

条件は『10分間で楯無が俺に一撃入れれば勝ち』。

制限なしの試合で俺が不利と思われる試合だったが、決着は1分で行った。勝者は俺。

見ていたものは言葉を失っていた。なぜなら、

楯無は殆ど動かず、一方的な俺の攻撃で幕を閉じたからだ。

「?2セグンダを使つては勝てるはずもないか」

「?2はリミッターを掛けてあるとはいえ、最悪の能力だからな」

「リミッターをはずせば即死だな」

「?2『アロガンテ髑髏大帝』は老いを司る。つまり、人の死への時間を操ると言つても過言ではない。そのままだと普通に死ぬため、リミッターをかけ、A I Cと同等の効果を持つ反則能力となつた。」

「今から白亜君が生徒会長だね」

髑髏大帝の話を終えてしばらくして敗者の登場。

「俺が生徒会長だと? 何の冗談だ、楯無」

「この生徒会長は最強の称号なのよ」

「……世界最強が俺の隣にいるが?」

「私は遠慮しておく」

いいこと思いついた。

「楯無は会長代理兼補佐だな」

「代理兼補佐? どういうこと?」

「面倒なことは任せるが、最終決定権は俺にある。俺に従ってもらう」

「それって白亜君の奴隷？」

「捉え方によってはそうなるな。だが、変な方向に想像するなよ」

「いゃん」

「……貴様はどうしたらその反応になる……」

「それはどうでもいいが、それなら私達に大した支障はない」

「そうだな。総護は生徒会に入るが、仕事は本人の意思でさせること。一夏に関しては変更無し。放送を入れておけ」

「わかりました」

放送により、学園中に変更点が伝えられ、俺が生徒会長になった。放送後、一夏は俺に文句を言ってきたが無理矢理黙らせた。

そして放課後の特別HR。出し物を決めるために無駄に盛り上がっていた。

「「「却下」」」

「「「「えええええー！！」」」」

女子のブーイング。

内容が『男子のホストクラブ』『男子とツイスター』『男子とポツキー遊び』『男子と王様ゲーム』……。ふざけるな。

「生徒会長権限で却下する」

「職権の乱用よ！」

「使えるものは使わせてもらっ」

こうでもしないと面倒だ。ちなみにこの場にブリュンヒルデはいない。

「俺が認めるものを考えろ」

「メイド喫茶はどうだ」

この発言をしたのは意外な人物、ラウラだった。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。

確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

キャラに合わないな。

「いいんじゃないかな？ 一夏たちには執事が厨房を担当してもらえばオーケーだよな」

「織斑君、執事！　いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうするの！？　私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

「問題は生徒会長が認めるか、だよ」

その一言で俺に視線が集まる。

「俺と総護が接客をほとんどしないことが条件だ」

「男子二人が抜けちゃ、客入りが減っちゃうよ！」

「ならボツにするが？」

「それに白亜はほとんどと言っているんだ。　やらないわけではない」

「そ、それなら……」

「そ、それに織斑君がいるし！」

「で、衣装はどうする？」

「メイド服ならツテがある。　執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

またも意外なラウラ。　クラス全員が目を丸くする。　そして咳払

いをするラウラ。

「——ごほん。 シャルロットが、な」

いきなり振られたシャルロットは困った顔をしていた。

「え、えっと、ラウラ？ それって、先月の……？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

@クルーズなら交渉の余地はある。

「あそこなら俺も交渉しよう」

不安そうに告げるシャルロットに加勢する。 クラスの女子は『頑張って、生徒会長！』と言う者と、『怒りませんとも』と言う者がいた。

かくして、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった。

Side 〱 白亜 〱 out

第28話 新生徒会長（後書き）

白亜を生徒会長にしました。

……俺は何をしたかったんだ？

えーと、まあ、なんとかあります。

感想等お願いしますm（| |）m

第29話 生徒会難儀（前書き）

今回は生徒会メンバーがよくです。

第29話 生徒会難儀

Side 一夏

「やあ」

「……………」

報告のために職員室にいたのだが、そこから出たら一人の女子が待っていた。

それは元生徒会長で、現在の生徒会長代理兼補佐である更識楯無だった。

「……………何か？」

「ん？ どうして警戒しているのかな？」

「なんで生徒会長代理兼補佐の人が俺のところに来てるんですか……」

「生徒会長の白亜君の命令」

「なんで白亜本人が来ないんですか？」

「忙しいのよ。だって……」

その瞬間、俺たちの目の前を陰が通り過ぎていった。

「……………は？」

「容赦ないわねえ、白亜君」

「なんですか？ 今のは」

「白亜君に吹き飛ばされた生徒よ」

「何で吹き飛ばされているんですか？」

「最強である生徒会長はいつでも襲っていいの。そして勝ったらその者が生徒会長になる。だから白亜君が生徒会長になったわけ」

「無茶苦茶ですね」

「私のときは襲撃は殆どなかったんだけどなあ。やっぱりこれはキミのせいかな？」

「なんですか」

「今月の学園祭でキミが景品になったから一位を取れそうにない運動部と格闘系が実力行使に出たんでしょう。白亜君を失脚させて景品キャンセル、ついでにキミを手に入れる、とかね」

「……さつきから轟音が響き、物と人が通り過ぎている。女相手でも容赦ないなあ。」

「白亜君からの言伝よ。生徒会室に來い、とのことよ」

「はあ」

「その返事は肯定？」

白亜の命令ってことは行かないとダメだよな。

「行きますよ」

「うむ、よろしい」

俺は先輩について行った。

S i d e ー 夏 ー o u t

S i d e ー 白亜 ー

「連れて来たわよ」

「来たか。 悪いな楯無」

「いえいえ」

「俺はなんで呼ばれたんだ？」

「特に理由はないが、とにかく座れ」

「わかった……っつて、あれ？」

「わー……。おりむーだー……」

「なんでいるんだ？」

「それは俺も驚いたことだ」

「私もだ」

なぜかいつもよりも眠たそうな布仏本音。 一夏を見つけて3センチほど上げた顔をまたテーブルに戻す。

「お客様の前よ。 しっかりしなさい」

「無理……。 眠……。 帰宅……。 いい……。 ？」

「ダメよ」

仕事ができる風の三年、布仏虚の回答に崩れ落ちた。

「えーと、のほほんさん？ 眠いの？」

「うん……。 深夜……。 壁紙……。 收拾……。 連日……。 」

「う、うん？」

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね」

「コイツの場合はそうではないだろ」

「うつ……。 本名知らないし……。 」

「ある意味すごいな」

「ええ〜!？」

布仏本音にしては珍しいってか初めて聞く大声だな。

「ひどい、ずっと私をあだ名で呼ぶからてつきり好きなんだと思っ
てた〜……」

「いや、その……ごめん」

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた。わかったよー、お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私は布仏^{のほとけうつほ}虚。妹は本音」

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。　　うちは、代
々」

「そろそろ本題に入っているか？」

「構わないわ」

「今回の騒動……俺たちの部活動対抗戦は俺達が部活に入らないこ
とで色々と苦情が寄せられていたらしい。　で、生徒会は俺達をど
こかの部活に入部させるために学園祭の投票決戦が考案された」

「そのおかげで私は白亜君に一方的に負けて代理兼補佐になったわ

けなんだけどね」

「それとこの状況になんの関係が？」

「俺は生徒会長になったので、俺と総護の景品は無効にしたが、お前を無効にしなかった理由が各部の対抗意識の上昇のためだ」

「その交換条件として、私が白亜君の代わりにキミを鍛えるってこと」

「なんで白亜の代わりに更識先輩が俺のコーチになるんですか」

「楯無は俺よりも普通のIS戦闘経験が豊富だ。通常のISについて教えるのは俺よりも上手い」

「ちなみに拒否権はない」

「……わかった」

強制的に一夏は楯無に教えられることとなった。

そして、一夏の波乱が始まったらしい。

一夏はなぜか楯無と同居することになり（俺が認めた）、精神を削られていたようだ。

「楯無」

「なになな？」

「お前は一夏に何をしている？」

「んー……、イタズラ？」

「一度は認めたが度が過ぎれば戻ってもらっぞ。ここ数日の一夏は疲労感が相当だ。あれ以上は黙認しかねんぞ」

「わかったわ」

……どうだか。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

「あ〜……」

いつもの面々が苦笑いで眺めている。

「一夏、お疲れ様」

「おー……シャルか……」

「お茶飲む？ ご飯食べられないなら、せめてそれだけでも」

「おう……サンキュ……」

たぶんこんな生活が続いたら、冗談じゃなくて死んでしまう。
たぶん衰弱死。

「それで、あの女はどうしたのだ？」

「生徒会の仕事があるって出て行っただぞ」

「そーそー。書類がちよお溜まってるんだよね〜」

生徒会書記。 手伝えよ。

「私はね〜、いると仕事が増えるからね〜。 邪魔にならないようにしてるのだよね〜」

「自分で言っなよ……」

でもまあ、完璧超人が三人もいる空間では邪魔か？

「コホン。……一夏さん？」

「ん。なんだよ、セシリア。改まって」

「あの部屋にいるのがつらいなら、仕方なく、人助けと言うことで、武士の情けと言うことで、わたくしの部屋にいらしても構いませんわよ？」

あのベッドで部屋の殆どを占領している部屋か。

「ちょっとセシリア！待ちなさいよ！一夏、あんたこっちの部屋に来なさいよ。トランプあるわよ？」

「トランプで釣られるとか、小学生か！」

「じゃあ金平糖」

「幼稚園児か！」

なぜランクを下げたんだ。

「なら一夏さん、私の部屋と変わらない？」

そう言ったのは織姫。

「それか白亜に相談するか」

「……その手があったか」

そつえば白亜は生徒会長だ。

一度は認めた楯無先輩の同居を取

り消しにしてもらえば……。

「ありがとう！ 白亜にちょっと話してくる！」

俺は希望を見て走り出した……が、

「織斑、寮内は走るな」

千冬姉の出席簿アタックが俺に直撃した。

結果、白亜に頼み込んで楯無先輩との同居生活は幕を閉じた。

S i d e ー 夏 ー o u t

第29話 生徒会難儀（後書き）

何とか2話投稿できました。

次回は学園祭です。内容が今一思いついていません。
感想等お願いします。

第30話 学園祭1（前書き）

なんとか無理矢理投稿しましたが、とにかく30話目です。

第30話 学園祭1

Side 白亜

学園祭当日。

「さすがに忙しそうだな」

1年1組の『ご奉仕喫茶』は大盛況だった。

「あ！ 黒神君だ！」

「嘘！ どこにいるの！？」

「織斑君の燕尾服もいいけど、黒神君のオリジナル衣装もいいわね！」

俺は死覇装を着ている。手伝いるときに着替えるのが面倒だからだ。

「白亜！ 来たなら手伝ってくれ！」

「悪いが今は無理だな。校内の見回り中だ」

「絶対に手伝えよ！」

「また後にな」

俺は教室を後にする。

「えー。黒神君の接客受けられないのー？」

「藍染様もいないの？」

「残念……」

五月蠅いな、本当に。

そして校内を見て回り、生徒会室に入った。

「準備はできているか？」

「大丈夫です」

生徒会の出し物の準備はできているようだった。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 一夏 〱

白亜が出て行ってすぐに来たのはチャイナドレスを着た鈴が来た。

「ご注文は何になさいますか？ お嬢様」

「そ、そうね……」

メニューは俺が持って見せている。……なんか、だんだん慣れてきた自分が怖い。

「この、『執事にご褒美セット』って何よ？」

……。

「当店おすすめのケーキセットはいかがですか？」

「おいこら、誤魔化そうとしたでしょ」

「とんでもございません」

「……そのしゃべり、やめなさいよ。 気持ち悪い」

「お前なあ！ こっちは仕事だっつーの！」

「じゃあ『執事にご褒美セット』をひとつ」

……。

「お嬢様、こちらの『メイドにご褒美セット』はいかがでしょうか？」

「一夏。あんた、自分絡みでしょ」

…。

「お戯れを、お嬢様」

「お、お嬢様だって言うんなら、言うこと聞きなさいよ。……『執事にご褒美セット』ひとつ」

さすがに三度目の抵抗はできず、渋々了解する。

「『執事にご褒美セット』がひとつですね。 それでは、少々お待ちください」

キッチンテーブルに戻った俺はすぐさま品が渡された。

「お待たせしました、お嬢様」

「う、うむ。くるしゅうないわよ?」

なんだよそれ。

「では、失礼します」

「え?」

俺は鈴の正面に座る。

「な、なんで座ってんのよ……。いや、まあ、べ、別にいいけどさあ」

「ご説明させていただきます」

「お、おー。よきにはからえばいいわよ?」

……。

「ええい!やめだやめだ! 鈴なら別に普通に話していいだろ!?」

「ぷっ、あははっ。……まあ、一夏の口調、変だもんね。許してあげるわよ」

お前のほうが変だろ。

「で、これはどういうセットなの？」

「……食べさせられる」

「はい？」

「……だから、執事に食べさせられるセットだよ……」

鈴はボツと顔が赤くなった。

「な、な、何よ、そのセット……ていうか、金とってお菓子あげるとか……」

「キャンセルできねーからな。……だから嫌だったんだよ。あー、ちなみにこれは任意のサービスだから、別にやらなくてもいいからな。そのときは俺も戻るけど」

「じ、じゃあ、なんかもったいないし、せつかくだから、ついだし……ご、ご褒美あげようかしらねっ」

鈴はポツキーを一本手にとって、俺に先端を向けてくる。

「は、はい、ご褒美……。あーんしなさいよ……」

「思いつきり横向きながらするなよ。恥ずかしいならやっぱりしな

くても——」

「す、する！するってば！お金分サービスしなさいよ、まったく！」

「わかったから怒るな」

「じゃ、じゃ、その……あーん……」

「あーん」

口の中にチヨコの甘さが広がる。

「た、食べさせてあげたんだから、あたしも——」

「お嬢様、当店ではその言うサービスは行っておりません」

「そ、そうなんだ。わかったわ」

「……………」

「あの、箒？ もういいぞ？ ていうか、三番テーブルで注文な」

「わかってるっ」

箒は身を翻して行った。

鈴はポッキーを食べている。

「鈴」

「ん？」

「なんか可愛いな、お前」

「ぶーーーーっ!!」

アイスティーを吹き出し、むせ返っている。

「な、な、な……何よ、いきなり!」

「いや、ポツキー食べてる姿がさ」

「か、可愛いってわけ……?」

「おう。リスみたいで」

「・・・リスみたいで——って、このバカ!」

脳天にチョップが刺さる。

「なにすんだよ!」

「こっちのセリフよ!」

立ち上がった俺たちの間に扇子が差し込まれる。そこに書かれていた文字は『羅刹』。

「はいはい、騒ぎ立てないの。 他のお客さんがびっくりするでしよう?」

「なあっ!? せ、先輩? その格好は——」

なぜにメイド服。しかもいつの間に拝借したのか、それはクラスのものと同じものだった。

「楯無」

「へ？」

「名前で呼んでっていったでしょ」

「た、楯無さん」

「よろしい」

扇子を戻した楯無さん。そして……

「どうもー、新聞部です。話題の織斑執事取材に来ましたー」

「あ、薫子ちゃんだ。やつほー」

「わお！ たっちゃんじゃん！ メイド服も似合うわねー。どうせなら織斑君とツーショットちょうだい」

すでにシャッター切ってるし。

そんなこんなでメイドたちとの写真撮影が終了した。

「そうそう、一夏君。私、もうしばらくお手伝いするから、校内色々見てきたら？」

「いいんですか？」

「うん、いいわよ。 おねーさんの優しさサービス」

「俺がいなくなるとクラスのお叱りが……」

「適当に誤魔化しておくから」

大丈夫、かな？

「じゃあ、ちょっとお願いします」

「うん。行つてらっしゃーい」

上着を脱いで廊下に出ると、相変わらずの長蛇の列だった。

声をかけてくる女子に返事をしながら正面玄関へ向かう。

「ちょっといいですか？」

「はい？」

「私、こういうものです」

「えっと……IS装備開発企業『みつるぎ』 渉外担当・巻紙礼子……さん？」

「はい。織斑さんにぜひ我が社の装備を使っただけないかなと思ひまして」

またこういう話か……。

「無許可での生徒への干渉は遠慮してもらおうか」

この声は……

「えーと、あなたは？」

「ここの生徒会長だ。 外部からの干渉は控えていただくか。
このまま引かなければ実力行使に出る」

「白亜助かった。 後任せた！」

俺は巻紙さんを白亜に任せて待ち合わせの場所に急いだ。

S i d e ー 夏 ー o u t

S i d e ー 白亜 ー

「白亜助かった。 後任せた！」

行っただか……。

「で、このまま続けるのか？」

「遠慮させてもらいます」

女は何処かへ去って行った。

「……………」

俺はその女が見えなくなるまでその場に立ち止まったままだった。

「……………らい……………るか……………。 ……の……………、何……………るな」

俺は誰にも聞こえない声で呟き、この場を去った。

S i d e ～ 白 亜 ～ o u t

第30話 学園祭1（後書き）

最後の途切れ途切れの台詞はもしかしたら想像つくかもしれませんがね。

暇な方は考えてみてください。次数は間違っていないはずなので穴埋めです。……でかい穴埋めだな。

毎度のことですが、感想などお願いします。

第31話 学園祭2 劇と異変（前書き）

シンデレラ回です。

それでは31話をどうぞ。

第31話 学園祭2 ～劇と異変～

Side～白亜～

「お嬢様、こちらへどうぞ」

俺は苦手な接客中。

「ご注文は何になさいますか？ お嬢様」

「ふえ」

「お嬢様？ どうかいたしましたか？」

「どうもいたしません／＼」

またか……。

俺が接客した客はほとんどが呆けていた。
何が客（女）をこうさせる。

「御用がなければ私は戻りますが」

「はっ、アイスティーをひとつで！」

「アイスティーを一つですね。少々お待ち下さい」

『俺』が壊れていく……。

アイスティーが渡され、テーブルに戻る。

「お待たせいたしました。　アイスティーでございます」

「あ、ありがとうございます／＼」

「それでは、ごゆっくりお過ごし下さい」

本当に『俺』と言う人格が破壊されていく。　こんなんはやるもん
じゃないな。

そしてやっと戻ってきたの一夏。　そして

「じゃじゃん、楯無おねーさんの登場です」

楯無登場。

「時間か……」

「ときに一夏君。　君の教室手伝ってあげたんだから、生徒会の出
し物にも協力しなさい」

「疑問形じゃない!？」

「うん。　決定だもの」

「俺の意志は……」

「そんなものはない。　弱者^{一夏}には俺の命令^{言葉}を拒否する権利はない」

「ところどころ字が違っ!　で、出し物は!？」

「「演劇だ(よ)」「」

「演劇……?」

「「観客参加型演劇」」

「は!？」

「とにかく、俺たちと来い。決定事項だ」

「あのー、お兄ちゃん? 一夏を連れて行かれると、ちょっと困るんだけど……」

「ちょうどいい。お前も来い」

「ふえ!？」

「おねーさんがきれいなドレス着せてあげるわよ?」

「ど、ドレス……」

「景品は一夏関係だぞ?」

止めに一言。 シャルロットの耳元でささやく。

「じゃ、じゃあ、あの……ちょっとだけ」

陥落。 余裕だな。

「じゃあ、篝ちゃんとセシリアちゃんとラウラちゃんもゴーね」

「「「はっ!?!」」」

聞き耳を立てていた三人もターゲットにされた。

「全員、ドレスを着せてあげるから」

「そ、それなら……」

「まあ、付き合っても……」

「ふ、ふん。仕方がないな……」

他三名陥落。

「ちなみに、演目って何なんですか？」

扇子を開く楯無。そこには『追撃』に二文字。

「シンデレラよ」

「一夏、来たか？」

「お、おう……」

一夏の服装は王子様だ。

「くっははは！」

「笑うな！」

「悪い。くくく……」

「だから笑うな！」

「んんっ。王冠だ。着けるよ」

「あ、ああ」

「始まるぞ」

「脚本とか台本とか一度も見てないんだが」

「こっちからのアナウンスにあわせて話を進めればいい。 台詞はアドリブでな」

「大丈夫なのか？」

「安心しろ。 幕開けだ」

ブザーが鳴り、証明が落ちる。

『むかしむかしあるところに、シンデレラという少女が居ました』

楯無のアナウンス。

一夏はセットの舞踏会エリアへ向かっていった。

『否、それはもはや名前ではない。 幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女達を呼ぶにふさわしい称号……それが【灰被り姫^{シンデレラ}】！』

一気にシンデレラの雰囲気が台無しになった。

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。 王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る！』

あいつらは本当に面白いことを考える。

「もらったあああ！」

最初は鈴か。

中国の手裏剣、飛刀を投げる。

「し、死んだらどうするんだよ!？」

「死なない程度に殺すわよ!」

「意味がわからん!」

死んだら景品もひつたくれもない。

鈴がかかと落としをかます。……強化ガラスの靴を履いて……。

「のわあっ!？」

スナイパーライフル……セシリアか。……こいつら、一夏を殺したいのか？

「し、し、死ぬ! 死んでしまっ!」

一夏の嘆きが聞こえてくる。

「一夏、伏せて!」

狙撃から逃げていた一夏は無駄に広いステージを移動し、セシリアの罠にかかった。

そんな一夏の前に現れたのは、対弾シールドを装備したシャルロットだった。

そして、王冠に手をかけた一夏にアナウンスが遮った。

『王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます』

だが、そのまま王冠を取った一夏。

「ぎゃああああっ!？」

バリバリバリ!

一夏の全身に電流が流れる。服の所々が焼ききれ、煙を上げていた。……やりすぎたか？

『ああ! なんとということでしょう。王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。しかし、私達には見守るしかできません。なんとということでしょう』

「二回言わなくていいですよ!」

叫ぶ一夏。嘆いてもどうしようもないがな。

「一夏、そこに直れ!」

「王冠は私がいただく」

箒は日本刀、ラウラは二刀流のタクティカル・ナイフ。シャルロット以外は一夏を殺す気なのか？

「邪魔をするな、ラウラ!」

「こちらの台詞だ。　まずはお前から排除してやろう」

「面白い……来い！」

馬鹿二人は勝手にバトルを始めた。

『さあ！　ただいまからフリーエントリー組の参加です！　みなさん、王子様の王冠目指してがんばってください！』

シンデレラの大群が解き放たれた。

「織斑君、おとなしくしなさい！」

「私と幸せになりましょう、王子様！」

「そいつを……よこせえええ！」

一夏は箒に見つかり、セット上から消えた。

「来たか……。　総護、行くぞ」

「ああ」

楯無も着いてきた。

「お別れの挨拶は済んだか？ ギャハハ！」

「なんのだよ……？」

俺は一夏たちの会話を聞いている。

「決まってるだろうが、てめーのISとだよ！」

「なにっ！？」

やっと使うか……。

「がああああっ！？」

一夏の絶叫。

「さて、終わりだな」

「——貴様がな」

「誰だ！」

「俺を忘れたか？ 不正干渉者。 いや――『ファントム・タスク亡国機業』」

「貴様は……」

「一夏、無事か？」

「ああ……って、白式がない！？」

「君はただ願っているだけでいい」

「リムバー剥離剤をどこで手に入れたかは知らんが、貴様の知っていることすべてを話してもらおうか」

「てめえ、何者だ！？」

「二度も自己紹介をさせるな。 オータム」

「！？ なんててめえが私の名前を……」

「侮るなよ、女」

俺は十刃を展開し、『アラクネ』を展開したオートムへ斬りかかる。

「そうか、てめえが……、てめえがエスパーダか！」

「やはり繋がっていたか……」

そのとき、俺たちの周りに纏わりつく濃い霧。 時間稼ぎはできた

ようだ。

俺は響転でその場を離れる。

ぱちんっ

その瞬間、オータムは爆発に飲み込まれた。

楯無のIS『ミステリアス・レイディ霧纏の淑女』はエネルギーを伝達するなのマシンにより、水を自在に操る。

今のはISから伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが
クリア・パッション一斉に熱に転換し、対象物を爆破する『清き熱情』だ。

「ぐ……がはっ……。 まだ……まだだ！」

「いいえ、もう終わりよ。——ね、一夏くん？」

右手を掴み、意識を集中している一夏がいた。

「……来い、白式！」

一夏は光に包まれ、白式が展開された。

「白式、緊急展開！ 《雪片式型》最大出力！」

『零落白夜』を発動する一夏。

「なあっ！？ て、てめえ、一体どうやって——」

「知るか！ 食らえ！！」

「ぐううつ!?!」

八本の装甲足を集中させて一夏の斬撃を頭上で受け止める。が、力押しで断ち切られる。

瞬時加速付きのスラスター・フルブーストを乗せた蹴りでオータムは壁に吹き飛ばされる。

「総護、奴を拘束しろ!」

「ああ。縛道の六十一、『六——』」

「く、くそ……ここまでか……!」

ブシュッ!

圧縮空気の音を響かせて、オータムのISが本体から離れる。

「何!?!」

「「一夏^{くん}!」」

「縛道の八十一、『断空』」

光を放ち始めたISは数秒後に爆破した。一夏は巻き込まれる前に断空で助かった。

「大丈夫か? 一夏」

「なんとか……。あ! あの女は!?!」

「逃げられたわ」

「居場所はわかる。 探査回路に反応がある。 つ!? この反応は……!」

「どうしたの?」

「虚だ。 おそらくギリアンだ。 だがこの数は……」

探査回路に反応する数はおよそ200。

「俺と総護が対応する。 お前らは女を追え」

「「わかった(わ)」」

Side 〱 白亜 〱 out

第31話 学園祭2 ～劇と異変～（後書き）

新しく IS インフィニット・ストラトス～破滅を喰らう漆黒の月～を始めました。

よければ見てください。

こっちの更新は週に2話は投稿する予定です。

感想等、お願いしますm（――）m

第32話 学園祭3 ～終幕～

Side ～白亜～

「ギリアン程度の反応が約200。そのうちの2つがアジューカスレベルの反応だ」

「斬月を使うおうかな」

移動しながら声を交わす。

「見えた」

「とんでもない数だな」

「数はあっても俺たちの前では無力」

「始めようか」

約200のギリアンは一斉に虚閃を撃ちにかかってきた。

「虚閃」

「縛道の八十一、『断空』」

俺は虚閃で消し飛ばし、総護は断空で防ぐ。

「一気に片付ける。帰刃？^{セスタ}6、軋れ『豹王』^{バンテラ}」

獸人を思わせる姿に変わり、髪が水色になる。

「デスガロン
豹王の爪」

一気に豹王最強の技で攻撃する。

「はああああ！」

巨大な爪は一気に半分ほどのギリアンを消した。 その中にアジユ
ーカスが一体混ざっていたようだ。

「月牙天衝！」

総護は斬月の斬撃でギリアンを消していく。

「「終わりだ」」

「虚閃」

「破道の六十三、『ライジング
雷吼炮』」

俺と総護の広範囲砲でまとまっていたギリアンたちを一蹴した。

「予想よりも早く終わったな」

「そうだね」

俺と総護は一夏たちの方へ行った。

「一夏、楯無、女は？」

「逃げられた」

「ごめんなさい」

「探査回路に反応はない、か。　ラウラとセシリアの反応がここよりも離れたところにあるのだが」

「さあ？　気にしなくてもいいんじゃない？」

「まあいい。　今日はもう休む。　俺は戻る」

「私も戻るとしよう」

「私も戻りましょう」

「あ、俺も」

俺たち4人でこの場を後にした。

そして食堂。

「シャルロット、これをやる」

「え、これって……」

「ああ。一夏の王冠だ」

「あ、ありがとう！ おにいちゃん！」

「ず、ずるいぞ、白亜！」

「そうよ、卑怯よ！」

「なんとでも言え。拾ったものを俺が誰に渡そうがどうこう言われる筋合いはない」

「あ、白亜、なんで女子たちが俺の王冠を欲しがってたんだ？」

「それは『王冠を手に入れた者は織斑一夏と同じ部屋に一時的に暮らせる』ってルールがあったからだ」

「ま、まさか、それで女子があんなに必死だったのか？」

「そういうことだ」

「箒たちがあんなに必死だったのは」

箒たち専用機持ちの顔が赤くなった。

「同じ部屋の人と上手く行っていないのか？」

「なんでそうなる……」

「」「」「はあ」「」「」

専用機持ちたちの深いため息。

「まあ、しばらくシャルロットは一夏と同じ部屋だ」

「よ、よろしくね、一夏」

「おっ」

専用機持ちたちの嫉妬の視線が俺に刺さるが気にしない。

「明日には荷物を運んでおけ」

「うん、わかったよ」

こうして、一夏とシャルロットの同居が再び始まった。

「みなさん、先日の学園祭はお疲れ様でした。それではこれより、投票結果の発表を始めます」

全校の女子がつばを飲む音が聞こえた。

「一位は、生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「……え？」

ぽかんとした全校女子が数秒後に我に返る。

「卑怯！ ずるい！ イカサマ！」

「何で生徒会なのよ！　おかしいわよ！」

「私たちががんばったのに！」

予想通りの女子共のブーイング。

「黙れ！」

俺の一言で女子共は静かになる。

「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』だ。俺たちは参加を強制したわけではない。つまり、それが貴様らの意思だ。貴様らの意見だ」

そして、再びのブーイング。

どんだけ姦しいんだ。

「落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏君は、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

「ま、まあ、それなら……」

「し、仕方がないわね。　納得してあげましょうか」

「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタね！」

「特に問題は無いようなので、織斑一夏君は生徒会に所属、以後は会長の指示に従ってもらいます」

楯無が締めると、女子共からの拍手と口笛がわき起こった。

「っていつか白亜の指示に従うとか!？」

諦める。

「織斑一夏君、生徒会副会長着任おめでとう！」

「おめでとう」

「おめでとう、一夏」

「おめでとう。これからよろしく」

上から楯無、布仏本音、総護、布仏虚だ。

「……なぜこんなことに……」

「あら、いい解決方法でしょう？ 元は一夏くんがどこの部活にも入らないからいけないのよ。学園長からも、生徒会権限でどこかに入部させるようにって言われてね」

「おりむーがどこかに入ればー、一部の人は諦めるだろうけどー」

「その他大勢の生徒が『うちの部活に入れて』と言い出すのは必至でしょう。そのため、生徒会で今回の借置をとらせていただきます」

さすがは幼馴染。見事な連携だ。

「俺の意志が無視されている……」

「あら、なあに？ こんな美少女三人もいるのに、ご不満？」

「そつだよー。おりむーは美少女はべらかしてるんだよー」

「美少女かどうかは知りませんが、ここでの仕事はあなたに有益な経験を生むことでしょう」

「白亜、なんとかしてくれ……」

「前にも言ったが弱者に権利はない」

俺の一言に一夏は崩れ落ちた。

「当面は毎日放課後に集合ですが、派遣先の部活動が決まり次第そちらに行ってください」

「……は、はい……」

「ところで……ひとつ、いいですか？」

「？　なんですか？」

「学園祭のときにいたお友達は、何というお名前ですか？」

「え？　あ、弾のことですか？　五反田弾です。　市立の高校に通ってますよ」

「そ、そう……ですか。　年は織斑君と同じですね？」

「ええ、そりゃまあ」

「……二つも年下……」

「え？」

「なんでもありません。ありがとうございました」

……一夏の友達に惚れたか？

「一夏君の副会長就任を祝ってケーキを焼いてきたから、みんなでいただきますよう」

「わ。さませ」

「では、お茶をいれましょう」

「ええ、お願い。本音ちゃんは取り皿をお願いね」

「は——い」

並べられたケーキは旨そうだった。

「それでは……乾杯！」

「乾杯」

「かんぱーい」

「乾杯」

「……乾杯」

「は、はは……乾杯。はあ……」

こうして、一夏の生徒会所属が決まった。

Side ~ 白亜 ~ out

第32話 学園祭3 〱終幕〱（後書き）

更新速度は少し遅くなるかと思いますが、これからもよろしく願
いします。

感想等、お願いしますm(〱)m

第33話 約束

S i d e 〱 白亜

「えっ!? 一夏の誕生日って今月なの!?!」

「お、おう」

いつものメンツで食事中。

「い、いつ!?!」

「9月の27日だよ。 ちよっ、ちよっと落ち着けて」

「う、うん」

ちなみに、同居期間は終了している。

「に、日曜日だよね!?!」

一夏のことになると熱くなる専用機持ち達。

「に、日曜だな」

「そっか……。 うん、そうだね。 うん!」

「一夏さん、そういう大事なことはもっと早く教えてくださらないと困りますわ」

「え？ お、おう。 すまん」

「とにかく、27日の日曜日ですわね」

セシリアは革手帳に二重丸を描く。

「お前は どうしてそういうことを黙っているのだ」

続いてラウラ。

「え？ いや、別に大したことじゃないかなーって」

「こいつ等はお前のことに關しては、お前が思っているほど小さいことではないということを覚えておけ」

「お、おう。 わかった」

「9月27日！ 一夏さん、予定は空けておいてくださいな！」

「あ、ああ。 一応、中学のときの友達が祝ってくれるから俺の家に集まる予定なんだが、みんなも来るか？」

「も、もちろん！ 何時から！？」

「えーっと、四時くらいかな。 ほら、当日ってあれがあるだろ？」

ISの高速バトルレース『キャノンボール・ファスト』。 市の特別イベントとして開催され、学園の生徒は参加することとなっている。

「ん？　そういえば明日からキャノンボール・ファストのための高機動調整をはじめなんだよな？　あれって具体的には何をするんだ？」

「ふむ。基本的には高機動パッケージのインストールだが、お前の白式にはないだろう」

「その場合は駆動エネルギーの分配調整とか、各スラスターの出力調整とかかなあ」

「そういえば、白亜達って出るのか？」

「俺と総護か？　どうなるかは検討中だ。　出るのならば、響転と瞬歩は禁止される」

「響転と瞬歩がありなら、俺たち絶対勝てないよな？」

「不可能だな。　響転無しでも使用する帰刃によっては勝ち目はないぞ」

「否定できないな……」

「未だに帰刃しなくても勝てないしね……」

「織姫も出るか検討中だ」

「え、なんで？」

「織姫の六花は元々は織姫の能力から来ているが、能力を除けばただの人間だ。　機動スペックはそこまで高くないからな。　勝てる

確立がお前らほど高くない。まあ、俺と総護が出ない場合なら、勝たせることはできなくもないがな」

「一応聞くが、どうやってだ？」

「俺と総護監修の下、六花を改造する」

「うわー。本当に勝てそうにないかも……」

「そういえば白亜、一夏の生徒会の貸し出しはまだなわけ？」

「今は抽選と調整中だ」

「ふーん……」

「さて、俺は戻る。一夏、がんばれよ」

「？ お、おう」

一夏は理解で来ていないな。まあ、今一夏の部屋に楯無がいるのは俺しかわからんだろうがな。

「週末、遊びに行かない？」

自室。 織姫に遊びの誘いを受けていた。

「どこにだ？」

「買い物とかかな。 それと映画見たりとか」

「映画？ 俺はそういったものには興味はないんだが……」

「白亜もそういうのにも少しは興味をもったら？」

「興味が無いものはない。 まあ、生徒会の仕事はなかったはずだが、もしものときは楯無に任せればいいか」

「そういう風に先輩を使っているの？」

「そういう条件だ」

「白亜らしいね。 じゃあ、週末に行こうか」

ガチャッ

ヒュッ！ ストンッ！

「何のようだ？ 楯無」

「いきなりナイフを投げるのはどうかと思うんだけど？」

「態々外してやってるんだ。 当たる事は万が一もない」

「それもどうかと思うんだけど……」

「で、用件はアメリカ軍基地が襲撃されたことか？」

「そのとおりよ。 でも、これは非公式の情報なんだけど？」

「クラッキング」

「犯罪よ？」

「ばれなければ問題ない」

「ちなみに、ただのクラッキングじゃないですよ。 17代目楯無さん」

「俺監修の特殊クラッキングだ」

それは異変と同時にクラッキングをするという荒業で神業的システムだ。 世界の情報は大体入手できる。

「それはそうと、何で知ってるの?」

「そんなものは簡単にわかる。一応言っておくが《ミストルティンの槍》でも俺は倒せんぞ?」

「そんなことも知ってるのね……。用件は以上よ。じゃあね、白亜君」

楯無は去って行ったようだ。探査回路で楯無の反応は遠ざかっている。

「白亜って、楯無さん嫌い?」

「あいつは俺の部屋に勝手に侵入してきたからな。お前も知っているだろ」

「あー、うん」

俺が生徒会長になる前、何度か楯無は俺の部屋に侵入してきている。そのたびに俺は追い出していたのだが。それが理由で俺は楯無に苛立ちを覚えている。

「今度侵入してきたら一度殺してやろうか……」

「さすがにやめておいたほうがいいと思うよ。もしの場合は私が治すけど」

「そのときは任せた」

S
i
d
e
~
白
~
o
u
t

第33話 約束（後書き）

次回は白亜と織姫のデートみたいな感じになると思います。
上手く書く自信はないんですけど……。
感想等、お願いしますm(_____)m

第34話 デート？（前書き）

どんどん更新のペースが落ちてますね……。では34話です。

第34話 デート？

S i d e 〱 白亜 〱

「どこから行く？」

「うーん……、買い物かな」

約束通り遊びに来ていた。

「行くか」

「いでででででっ!？」

俺達が動き始めようとしたとき、男の悲鳴が聞こえた。

悲鳴が聞こえたほうを向くと男の腕をねじ上げたシャルロットがいた。そして、もう一人の男を一夏が殴って吹っ飛ばしていた。

「うっぎゃああああああ!」

そして、男の叫びが響いた。

「女性に対する強引な勧誘は条例違反だよなあ。はい、こつち来てね。おつかれちゃん」

中年巡査部長は、駅内の派出所へ男たちを連れて行った。

「何をしていたんだ？」

「一夏と買い物に來ただけど、僕が早く來すぎて、さっきのチャラ男に絡まれてたんだ……」

「それで一夏が登場、チャラ男退場ってところか」

「そんな感じかな……」

「さて、二人の邪魔をするのは悪いので俺たちは退散するでしょう」

「二人じゃなくて鈴も来るはずだよ」

「あー、鈴これないってよ。急用らしい」

「え……ええ!？」

「それなら、私達が邪魔するのはダメだね。がんばってね」

「?何にがんばるんだ？」

「「「はあ……」」」

俺と織姫、シャルロットのため息が重なる。

「何ため息なんてついているんだよ」

「お前のせいだ。まあ、俺たちは行くからな」

「またね、お兄ちゃん、織姫」

「じゃあな」

「またね」

俺たちは一夏とシャルロットと別れた。

「買い物つて何を買うんだ？」

「ちよつと雑貨品をね」

「そっいえばシャンプーとかが切れていたっけか」

「だからだよ。それに……」

「それに？」

「白亜とデートしたかったし／＼」

「そういうことか。それならとっとと買うものだけ買って、何処かに行くか」

「い、いいの？」

「俺はお前の好意を返すことはできないからな。この程度のことなら構わない」

「ありがとっ！」

それから俺たちは切れていたものを補充し、午前中には必要なものはすべて買っておいた。

「昼からはどうするんだ？」

「映画とか見たりとかがいいな」

「映画か……。何を見るんだ？」

「内緒」

内緒か。なにかありそうだ。が、断るわけにはいかない気がする。

「行こ！」

俺は織姫に連れられて映画館へと向かった。

「……なんなんだ、これは？」

今見ている映画は俺には理解できない。

恋愛なのか、お笑いなのか、ホラーなのか今一つかみどころのない映画だった。

「おもしろかったー」

「……どこがだ」

「え？ 面白かったよ？」

「あの意味のわからん映画はなんなんだ……」

「そこがいいだよ」

「お前はずれていると思うが……」

これだけではない。 コイツは甘いものが好きだが稀に怪奇的料理を作り上げることがある。 それ以外にも、スポーツを組み合わせて珍スポーツを考えたり、頭はいいのに思考回路がおかしい。

「はあ……」

自然にため息が出る。 出てしまう。

「そろそろ帰るか？」

「最後にちょっとよりたい所があるんだけど……」

「どこだ？」

「うん。 ちょっとアクセサリーを見たくてね」

「アクセサリー？」

「うん。 ちょっとね」

で、着いたアクセサリー店。

「何を買うんだ？」

「ブレスレットとかかな」

「見ていていいぞ。 俺はその辺で見てるから」

「あ、うん」

さて、どうするか。 適当に見て回るか……。

ダイヤモンド、ルビー、サファイアなど……。

「ここはこういうものしかないのか？」

宝石と呼ばれる類のものばかりだ。

一夏の誕生日に何かプレゼントでもするか。

「ブラックダイヤか」

このあたりで買っておくか。白式があるからブレスレットはなしだな。ネックレスかリングか。

「こいつにするか」

選んだのはブラックダイヤを使用したネックレス。値段は10万。

「織姫にも買っておくか」

織姫の誕生日はすでに過ぎてはいるが、いい機会なのでプレゼントをあげないとな。

9月の誕生石はたしかサファイアとかだっけ。

サファイアの品を見ると指輪が多い。ここの商品は豊富だ。種類や色も豊富で迷う。

「これにしよう」

パパラチアサファイアという赤いサファイアを使ったシンプルなデザインの指輪。値段は15万。

会計のときに店員が驚いていたが、それもそうか。25万が学生の財布から出てきたんだからな。

ちなみに、俺の所持金はそこの金持ちに引けをとらない。虚圏を潰したときに総護と一緒に奪ってきたからな。その何割かを貰ったのだが、その額が普通に億越えしていた。あまり使うことがないから残りまくっている。未だに億越えの所持金だ。さらに

言つと俺の財布の中には常に100万くらい入っている。奪われることはありえないし、まだ有り余っているし。

「あ、白垂」

織姫の手には袋があつた。織姫も何か買ったようだ。

「帰るか」

「うん」

俺たちがIS学園に戻つたのは夕飯前だったので、夕飯を食べて現在のは部屋にいる。

「織姫。遅れたが誕生日プレゼントだ」

俺は今日買ったサファイアの指輪を渡す。

「え、あ、ありがとう」

俺の渡した指輪を見て驚く織姫。

「これって高かったんじゃない……？」

「たったの15万だ」

「15万って相当高いと思うけど……」

「そうなのか？」

「そうなの！」

どうやら俺の金銭感覚はズレているようだ。

「まあ、俺からのプレゼントだ。受け取れ」

「う、うん。大事にするね」

「そうしてくれ」

「白亜、これ。私からのプレゼント」

「プレゼント？ 何で俺が……」

「特に理由はないけど私からのプレゼント。受け取って？」

受け取った箱の中身はブレスレットがあった。

「いいのか？」

「うん。受け取って」

「有難くいただく」

互いにプレゼントを渡し、デート？が終わった。

Side～白亜～out

第34話 デート？（後書き）

白亜と織姫のデート？でした。

白亜をどうしようか迷っている作者です……。

そしてずれている白亜の金銭感覚。

なにをしたかったのかわからなくなる作者でした……。

感想等、お願いしますm（　　）m

第35話 不参加（前書き）

今回は少し短めです。

第35話 不参加

S i d e 〱 白亜 〱

月曜の朝、教室は騒がしかった。

「井上さん、その指輪って!？」

「それって高いよね!？」

「何で持ってるの!？」

「羨ましい!」

俺があげたプレゼントを見た女子たちが織姫に詰め寄っていた。

「え、えーと……」

あまりの女子の多さに困っている織姫。

「これは白亜から貰ったんだ」

その一言で織姫の周りにいた女子が一斉に俺のほうを向く。

「何で黒神君から貰っているの!？」

「少し前に私の誕生日があって、そのプレゼントにしてくれたんだ」

「ずるい! 井上さんずるい!」

「気になったんだけど、その指輪の値段は？」

「えっと15万だったよ。　ね、白亜？」

「ああ」

静まり返る女子たち。　そして、その沈黙を破ったのはその中の女子の一人だった。

「そんな高いものを何であげたの？」

「織姫とは古い仲だからな（嘘だ）。　それに金には困ってないんでな。　その程度の額なら普通に買える」

再びの沈黙。　そして

「やっぱりずるい！」

「これは差別だ！」

「神に異議を唱える！」

また騒がしくなった。　こいつ等は本当に姦しいな。

「一体何の騒ぎだ」

女子たちが固まる。

「「「お、おはようございます。　お、織斑先生」」」

「で、何の騒ぎだ？」

「え、えーっと、そのー……」

「何の騒ぎだと聞いているんだ」

「えっと……、井上さんが持っている指輪を見て、その指輪について聞いていたんです」

「井上、その指輪はどうした？」

「白亜に買ってもらいました」

「黒神、それは事実か？」

「ああ。事実だ」

「全員席に座れ。SHRの時間だ」

ブリュンヒルデはため息をついてからそう告げていた。

そして放課後、俺は生徒会室にいる。

「セシリアがんばるな」

「それもそうだろ。一夏のマッサージが受けれるんだからな」

俺と総護は窓からテニスコートを眺めている。

今日から『生徒会執行部・織斑一夏貸し出しキャンペーン』が始まったのだ。

「楯無、一夏のマッサージはそんなにいいのか？」

ふと気になって聞いてみる。

「すごい気持ちいいわよ」

「もうアイツは主夫だな」

そう言わざる得ないほど、あいつの主婦技術がある。

「セシリアが勝ったようだ。ストレート勝ちで」

「セシリアの優勝か。さすがは代表候補生といったところか？」

「恋する乙女は強いだよ」

「そういうことにしておこう」

「そういえば白亜君」

「なんだ？」

「織姫ちゃんに15万の指輪をプレゼントしたというのは本当なの？」

「それがどうかしたか？」

「しかもサファイア付きの指輪を」

「だからそれがどうかしたか？」

「私にも何かプレゼント頂戴！」

「なぜ俺が楯無にプレゼントをあげなければならん」

「なぜって平等にして欲しいからだよ」

「この世界は一度も平等であったことはない。それに大して付き合もない奴にプレゼントをやるほどお人好しでもない」

「ぶー。 ケチー」

「ケチで結構」

「私と白亜、織姫の三人は今回のキャノンボール・ファストは不参加にしようとしているのだが」

「え、なんで？」

「私達のISは普通ではないので、ここ以外で見せ付けるのはやめておいたほうがいいのでな」

「まあ、俺と総護の場合は俺と総護が出たら誰も勝てなくなるからもだけどな」

「速度ではすでに私達のISがトップだからね」

「速度だけじゃなくてすべてにおいてトップじゃないの？」

「そうだな」

現に俺は楯無を瞬殺しているんだがな。

「ということで、今回のキャノンボール・ファストに俺と総護と織姫は不参加で決定だ」

無理矢理な感じで決定した。

S
i
d
e
~
白
~
o
u
t

第36話 キャノンボール・ファスト

Side 〱 白亜

「はい、それでは皆さん。今日は高速起動についての授業をしますよー」

山田先生の声が第六アリーナに響き渡る。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週いいましたね？ それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

山田先生がそういつて手を向ける先には、セシリアと一夏と俺がいた。

「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

B T兵器をすべて推進力に回しているのが、このパッケージの特徴だ。

「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑君！ そして、当日は不参加ですが、帰刃^セ？ 6を解放してくれた黒神君！ このさんにんに一周してきてもらいましょう！」

水色の髪を靡かせている俺に視線が集まる。

(こいつらのほとんどは？6以上の帰刃は見たことがなかったか…)

実際、このクラスの4分の1ほどが？2は見たことがあるはずだが。

「では、……3・2・1・ゴー！」

山田先生のフラッグで一夏とセシリアは一気に飛翔、そして加速をして音速を突破する。

俺は一蹴りで音速を超える。

「遅いぞ。　まだ半分も出してないぞ」

『お前のは異常すぎるんだよ！』

「まあいい。　俺は先に行くぞ」

そう告げて中央タワーの外周をさらに速度を上げて跳ぶ。　豹王は“飛ぶ”というより“跳ぶ”の方があっている。　基本は“跳ぶ”なんだが、IS化した際に変化した。　“飛ぶ”ものと“跳ぶ”ものの二つに別れた。

俺が戻って数秒後に、一夏とセシリアは併走して地表に戻ってきた。

「はいっ。　おつかれさまでした！　三人ともすっごく優秀でしたよ」

すでに十刃は解除している。　ふと一夏を見ると、へんな角度で固まっていた。

なにをしているんだ……。

「いいか。今年は異例の一年生参加だが、やる以上は各自結果を残すように。キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きてくるだろう。それでは訓練機組の選出を行うので、各自割り振られた機体に取り込め。ばやばやするな。開始！」

毎年の恒例行事であるキャノンボール・ファストは本来、整備課が登場する二年生からの参加のイベントだが、今年は予期せぬ出来事に加え、専用機持ちが多いことから、一年生時点で参加することになった。

訓練機部門はクラス対抗戦となるため、景品が出るようだ。

「よし、勝つぞー」

「お姉様にいいとこ見せなきゃ！」

「勝ったらデザート無料券！これは本気にならざるを得ないわね！」

燃える女子に触発されてか、教師陣の指導に余念がない。

「俺たちはどうする？」

「まあ、一夏たちの様子見が妥当だろうが、織姫の六花の改造でもしようか」

「そうするか」

俺たちは出ないが、織姫の六花の強化くらいはちょうどいい暇つぶしになる。暇つぶしだが、しっかりと、魔改造とまではいかんが、改造を施し始めた。

改造の最中に、一夏が来た。

「ちょっといいか？」

「なんだ？ 一夏」

「俺のIS見てくれないか？」

「白式をか？ 誰の差し金だ？」

「いや、俺の考えから見てもらおうかと思ったんだが……」

「白式は『雪羅』があるから『雪片式型』は封印してスラスターのほうに全振り。ただし、『雪羅』はエネルギーを使いすぎるから極力使わず、回避優先。そんなところだろう」

「やっぱりそれしかないか……。エネルギーの使い方が勝負の決め手か」

「そういうことだ。お前は箒のところでも行って来い。どうせ展開装甲の割り振りについて悩んでいるだろう」

「わかった。ありがとな」

一夏は箒の元へ向かっていった。

「さて、改造の続きでもするか」

俺たちは六花を改造しながら、時間を過ごし、一夏たちは模擬戦をしたり話し合ったりしていた。

そして、キャノンボール・ファスト当日。

会場は超満員で、空には花火が上がっている。

プログラムはまず最初に二年生のレース、それから一年生の専用機持ちのレース、そして一年生の訓練機組のレース。そのあとに三年生のエキシビジョン・レースがある。

「あれ？ このサラ・ウェルキンってイギリスの代表候補生なのか」

「そうですね。専用機はありませんけど、優秀な方でしてよ。わたくしも操縦技術を習いましたもの」

すでに『ブルー・ティアーズ』の高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を展開している。

「鈴のはこついな」

「ふふん。いいでしょ。こいつの最高速度はセシリアにも引けを取らないわよ」

増設すらスターを四基積んでいる状態の高速機動パッケージ『風』^{フヘン}は、それ以外にも追加胸部装甲が大きく前面に突き出している。鈴は完全にキャノンボール・ファスト仕様の装備だ。セシリアのパッケージは本来強襲離脱用、他のメンバーは間に合わせだ。

「ふん。戦いは武器で決まるものではないということを教えてやる」
紅椿を纏った筈。

「戦いとは流れた。全体を支配する者が勝つ」

背中に三基の増設スラストを装備したラウラが話しに入ってくる。

「みんな、全力で戦おうね」

ラウラと同様に三基の増設スラストを、肩に左右一基ずつ、背中に一基配置している。ちなみに、デュノアとの縁が切れているため、俺お手製だ。第三世代型のISに負けず劣らずの性能を持っている。

「そろそろ時間だ。スタートポイントまで移動するぞ」

マーカー誘導に従い、スタート位置へ移動した。

『それでは皆さん、一年生の専用機持ち組のレースを開催いたします！』

大きなアナウンスが響く。

……戻るか。

レースがスタートしてから、俺は見回りに戻った。

そして、レースが二週目に入ったときに、異常は起きた。

上空から飛来した機体がトップのラウラとシャルロットを撃ち抜いた。

「……あれが、BT二号機『サイレント・ゼフィルス』か……」

見るとセシリアがサイレント・ゼフィルスに向かっていった。

「一夏！ 鈴！ 箒！ セシリアを援護しろ！ 避難完了後、俺も行く！」

「わかった！」

さて、俺はまず観客たちの避難させなければな。

「俺達が護衛する！ 危険が広がる前に素早く避難してくれ！」

織姫、総護も避難誘導を始めていた。

「楯無、そっちは？」

「今さっき女の子を一人、奥のスタッフルームへと招待しておいたわ」

「そうか。そろそろ一夏たちを助けに行きたいから、任せるぞ」

「ええ」

俺は一夏たちの援護に行った。

「一夏、鈴、大丈夫か？」

「俺は何か。それよりも鈴が……」

「あんたがノロいからよ……ゲホゲホッ！」

「鈴！」

どうやら身代わりになったらしい鈴は最終保護機能で気を失った。

「こいつは俺が引き受ける。一夏は筭からの補給を受けておけ」

できるかどうかは知らんがな。

そのころセシリアはアリーナのシールドを破壊して、市街地へと飛んでいった。

「死ぬなよ、セシリア」

俺はシールドの隙間へと跳んだ。しかし、

「あなたをここから通すわけには行きません」

「覚悟してください」

「元クアトロ・エスパード、ウルキオラ・シフアー様。あなたに
はここで死んでもらいます」

大量に出てきた虚。そのなかに一体のヴァストローデ級の虚がいた。

「想像以上に早い登場だな。　ヴァストローデ」

「あなたをここを通すわけには行かないですよ」

「そうか。　それなら、力ずくで通るまでだ。　——— 帰刃？9、

食い尽くせ『喰虚』」

「本当の帰刃は見せてはいただけないですね。　行きなさい、ア
ジューカスたちよ」

アリーナにおよそ100のアジューカスたち。

「よくもまあ、この短期間でここまでの数と進化を遂げさせたな」

「覚悟！」

「死ねや！」

迫り来るアジューカスの大群。　俺は《スターライトmk?》と《
双天牙月》を持ち、偏向射撃とブーメラン投擲、手が空いていると
きに虚弾でアジューカスたちを殲滅していく。

「さすがはウルキオラ様。　さすがのお手並みですね。　アジュー
カスたちよ、やりなさい」

アジューカスたちはその声で俺の直線状に並んだ。そして、同時に虚閃を放ってきた。数にして80。大量の虚閃が相乗効果で威力を上昇させて迫ってくる。チツ、避けきれないか……。

「三天結盾、私は拒絶する！」

「縛道の八十一『断空』」

この声……、助かった。

「帰刃解除」

喰虚を解除して、通常時に戻る。次の帰刃まで一分。そして、迫ってきた虚閃は織姫の拒絶の盾と総護の防御壁により防がれた。

「あなたは……藍染様」

ヴァストローデがぼつりと言った。

「あなたは……あなたには着いてきてもらいます！」

ヴァストローデとアジューカス。虚の強者の大群が一斉に攻めてきた。

「仕方がない。卍解^{ばんかい}」

崩玉の単一仕様能力『卍解』。白い死覇装は黒くなり、大剣だった《斬月》は漆黒の長い刀《天鎖斬月》となった。

「月牙天衝」

漆黒の斬撃。この一撃でアジューカスが5体は消えた。そしてタイミングよく、一分が経過した。

「帰刃？6、軋れ『豹王』」

こいつら、特にヴァストローデ級となればやはり？6以上の帰刃で対応した方が楽だ。

近接特化の豹王でアジューカスを切り裂き、吹き飛ばし消していく。アジューカスの残りが40ほどになったとき、

「さすがですね。しかし、これで私たちの役目は終わりです。今回は引きましょう」

虚たちは一斉にシールドの隙間から出て行き、そして虚空へと消えた。

「セシリアの元へ急ぐぞ」

「ああ」

「俺も行く」

俺と総護、一夏は（一夏は俺に掴まって）響転と瞬歩で超高速で移動した。

そして、セシリアの元に辿り着くと、サイレント・ゼフィルスに四本のビームが貫いていた。

「セシリア！　しっかりしろ！」

「あら、一夏さん……。　ふふ、遅刻でしてよ」

「悪いな！」

「仕方がありませんわね。　デート一回で許してあげます……。わ……」

「！？　おい、セシリア！　セシリア！」

セシリアは気絶したようだった。

「さすがの貴様でも俺と総護を同時に相手にして無事に戻れると思うなよ」

「ほざけ。　——スコールか、何だ？　……。　わかった、
帰投する」

そのままサイレント・ゼフィルスは去っていった。

Side～白亜～out

第36話 キャノンボール・ファスト（後書き）

一話でキャノンボール・ファストは終わらせました。

次回は一夏の誕生日です。 お楽しみに。

感想等あつたら遠慮せずへビーなものでござ。

第37話 誕生日パーティー（前書き）

今回の最後にお知らせがあります。

第37話 誕生日パーティー

Side 白亜

「せーのっ」

「一夏、お誕生日おめでとうっ！」

シャルの合図でクラッカーが鳴り響く。

「お、おう。 サンキュ」

時刻は夕方五時、場所は一夏の家…… まではいいんだが。

「この人数はなんだよ……」

織姫、総護、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルにラウラ。 まあ、いつもの面々だな。 そして、一夏の男友達の二人。 そのうちの一人に似た女子。 さらにその他の生徒会メンバーの楯無と布仏姉妹。 それになぜか新聞部のエースの黛薫子。 リビングはパンク寸前だった。

ブリュンヒルデと山田先生は慌しく働いていたのを見た。
ISで市街地戦闘だからな。 俺も総護も一夏も取調べを受けた。
迷惑な。

「あ、あ、あのっ、一夏さん！ け、ケーキ焼いてきましたから！」

「おお、蘭。 今日、どうだった？ 楽しめたか？ っていつても、

途中でメチャクチャになっただけどよ」

「は、はい！ あの、かつこよかったです！ あっ、ケーキもどうぞ！」

「サンキュ」

この唐変朴は年下までも落としているのか。 相変わらずのフラグメーカーだな。 俺は外に出るか……。

「……なんでついてくる、楯無」

「傷心のおねーさんを慰めて」

「誰がするか。 奴を逃したことをそこまで気にする必要はない。 いくら二度目だとしてもだ」

「そこまで知ってるんだ」

「どうしてかまでは知らんがな」

もとい興味がない。

「辛気臭くするな。 楽しめ。 羽目を外せ」

「それならお言葉に甘えて」

それから楯無は家に入っていた。

「白亜、こんなところにいたんだ」

「織姫か。　どうした？」

「白亜がいなかったからどうしたのになって思って」

「単純に騒がしすぎるのが苦手なだけだ」

これが俺が家の外に出ている理由。

「白亜らしいね。　でも、せつかくのパーティーなんだからみんな
で一緒に楽しもうよ」

「……わかったよ」

リビングに戻るとセシリアはなぜか満足そうにしていた。

「お、白亜。　紹介するぜ。　俺の友達の子五反田弾と御手洗数馬だ」

「五反田弾だ。　弾でいいぜ」

「御手洗数馬。　数馬でいいよ」

「黒神白亜だ。　白亜でいい」

「ちなみに白亜は生徒会長だ」

「生徒会長！？　あの女の子の花園の！？」

「一夏、この人完璧超人？」

「ああ。 ISでは学園2位で成績は常に学年2位。 恐るべき身体能力を持った超人だ」

「2位？ じゃあ1位は？」

「そこにいる長身の男。 総護、ちょっと来てくれ」

「なんだ？ 一夏」

「紹介する。 藍染総護。 学園最強で成績トップ。 白亜以上の超人だ」

「納得のいかない紹介だが、今回は多めに見よう。 私は藍染総護。 よろしく」

「五反田弾だ。 弾でいいぜ」

「御手洗数馬です。 よろしく」

「用はこれだけかい？」

「ああ」

「私は戻るよ」

「楽しんでくれよ」

「わかっている」

総護はそのまま戻っていった。

「一夏、これをやる。プレゼントだ」

綺麗に包装された箱を渡す。少し前に買ったブラックダイヤのネックレスだ。

「開けてみてもいいか？」

「いいぞ」

中身を見た一夏は俺に尋ねてきた。

「なあ白亜……」

「なんだ？」

「……これって、高くないか？」

「まあ10万つてところだ」

「10万！？ 悪いって！ 俺に10万ものプレゼントって勿体ないから！」

「気にするな。金は使わんのでな。これくらいしか使い時がないんだよ」

「………わかった……。大切にする。ありがとう……」

そこまで葛藤するのか？

「それと白亜、このネックレスって何が素材だ？」

「ブラックダイヤだ」

「……………絶対にくさない。これのお返し絶対するから！」

「一夏は気にしすぎだ。くれる物は有難く受け取っておけ。じゃあな」
じ

俺は騒がしい空間の中に入る。

「なあ一夏……………」

「なんだ？」

「白亜って、とてつもなくすごいんだけど……………」

「白亜はすべてにおいて俺達を上回る結果を導くんだよ……………」

そんな会話が聞こえた気がした。

そして時間はあっという間に過ぎていった。

Side～白亜～out

Side～一夏～

「お、よかった。売り切れはないな」

自宅から最寄の自販機。そこで足りなくなったジュースの補充のために、10本ほどのジュースを買っていた。最初は主役にそんなことさせるわけにはいかない！と言っていたシャルたちだったが、俺は何もしてないので志願した。ジュースを買い終え、戻るために歩き出したところで、ちょうど自販機の明かりがギリギリ届かないところに人影を見つけた。

（なんだ……？）

ジュースを買いに来たにしては離れすぎている。俺の知り合いでもない。もう一步踏み出したら、人影が一步前に出てきた。

「……………」

人影は少女だった。見覚えのある顔だった。いや、見覚えがあるなんてものじゃない。

「ち、千冬姉……？」

15、6歳ほどの少女。しかし、その顔は昔の千冬姉に非常に似ていた。

「いや」

少女が口を開く。

「私はお前だ、織斑一夏」

「な、なに……？」

「今日は世話になったな」

「!？ お前、もしかしてサイレント・ゼフィルスの――」

「そうだ」

一歩、俺へと近づく少女。

「そして私の名前は

織斑マドカ、だ」

織斑……マドカ？ 聞いたこと名前だが、どうして俺と同じ名字で……いや、そんなことはどうでもいい。なんでそんなに千冬姉に似ているんだ!？

「私が私たるために……お前の命をもらう」

すつと差し出されたのは、鈍く光を放つハンドガンだった。

パンッ!!

「なっ……!？」

いきなり発砲！？　ここは日本だぞ！？
しかし、その弾丸は俺にたどりつく前に二つに割れた。
そして、一人の男が俺と織斑マドカと名乗った少女の間に割り込んだ。

「白亜！」

「一夏、下がれ」

「お、おう」

白亜はマドカに斬りかかった。しかし、それを両腕で受け止めた。

「なっ！？」

「ほう。俺の斬撃で腕が切れないとはな。恐れ入った、亡国機業」

「……堕ちたものだな、十刃も」

白亜の刀を弾き、ISを展開して夜の闇へと姿を消した。
追えるはずの白亜はそのまま後姿を見送っていた。

「白亜！　追わなくていいのか？」

「お前は襲われた身で他に狙われないという確証はない。それに
いずれまた会える。それよりも無事か？」

「ああ、白亜が助けてくれたおかげでな。サンキュ」

「間に合ったのならそれでいい」

俺は地面に落ちたままの缶ジュースを拾う。

「帰るぞ」

「ちょっとくらいジュースもつの手伝ってくれ」

「ほらよ」

投げ渡されたのは袋。

「助かった」

俺は袋にジュースを入れていく。

「そういえば、どうして俺が襲われているところに間に合ったんだ？」

「ん？ それか……」

白亜は俺の服の襟首部分に手を伸ばし、何かを取る。

「なんだそれ？」

「俺特性の探査回路範囲増強システム。これのある場所から半径25メートルの範囲内を俺の探査回路範囲外の空間からでも探知するための補強システムだ。まだ未完成だけどな」

「未完成？」

「これがあっても俺から離れると使えない。効果範囲は俺から半径3キロだ」

「すげえな。それでも未完成って、完成はどうなるんだ？」

「最低でも俺から半径10キロ以内だな。このシステムの増強範囲は最低でも10メートルだ」

「へえー。すげえな、白亜は」

「そうか？」

「そうだって」

俺と白亜は織斑宅へと向かった。

Side－夏－out

第37話 誕生日パーティー（後書き）

今回の更新で原作の7巻までに追いついてしまいました。

オリジナルの話を書く能力は作者にはありません。ですので、少なくとも一週間は更新を停止します。

オリジナルの話を書くことも思いますが、いい案がなかなか思いつきません。

毎回読んでくださる皆さんにはご迷惑にはなりますが、申しわけありません。

一人の十刃は今回から一週間は更新しません。本当に申し訳ありません。

第38話 パーティー後日談（前書き）

少なくとも一週間と言いましたが、二週間近く更新してませんでしたね。すみませんm(_ _)m

第38話 パーティー後日談

Side 〱 白亜

「襲われた!?!」

月曜の夕食時、箒と鈴が口を揃えて大声を上げた。

「ああ、昨日の夜にな。 まあ白亜が助けてくれたから無事だったけどな」

昨日言わなかったのはパーティーがあつたからだ。

「あ、だから途中でいなくなったのか」

「そういうことだ」

探査回路範囲増強システムのことは伝えていない。

「サイレント・ゼフィルスの操縦者……一体何が目的なんだろう。一夏は思い当たること、ある?」

「さあ、な」

あの女、ブリュンヒルデに似ていたが、訊くのは止めておいた方がいいな。

それと気になったのが一つ。

「セシリア、なぜあの時反膜^{カハ・ネガシオン}の匪を使わなかった?」

「そ、それは……」

「あの時お前が使っていたいればお前がそこまで怪我をすることはなかった。俺達の援護も可能になった」

「たとえばあれがイギリスから奪われたＢＴ二号機で、その操縦者が自分よりも巧くＢＴ兵器を扱っていて、君が向きになっていたとしてもだ」

「……………」

「どうせイギリスのＩＳが奪われたから、自分の力で取り戻そうとしたのだろう？」

「そののなにが悪いのですか！？ 祖国のＩＳが奪われて、その代表候補生が取り戻そうとしてもいいではないですか！」

「俺が何時悪いといった？」

「へ？」

「俺は別に取り戻そうとするのにはどうこう言うつもりはない。だがな、無理して、向きになった結果が今のお前の現状じゃねえか」

「あの時私達が間に合わなかったら、君は最悪死んでいたかもしれない」

「反膜の匪はお前らを護るために俺と総護が改良したものだ。渡しても、お前が死に急ぐようだったら、俺達がやったこと、お前が

やってきたことがすべて無駄になる」

「まあ、君が死にたいのなら私と白亜は止めはしない」

「ちよつと総護も白亜も言い過ぎだつて！」

「一夏さんは黙つてて」

織姫が止めた。　まあ、知ってる分邪魔はさせたくないらしい。

「お前は気づいていたはずだ。初めてサイレント・ゼフィルスと闘ったときから、自分の力では勝てないことに」

「そ、そんなことは……」

「君は弱い。　この中で誰よりも弱い一夏よりもね。　その事実を認めなければ、君は何時まで経ってもサイレント・ゼフィルスには勝てない。　私達が言えるのはここまでだ。　私は部屋に戻るよ」

「俺もだ」

「私も」

クロス・コア所持者は同時に席を立った。

そして現在は部屋。

一応探查回路を広げると、一夏の部屋に専用機持ちが集結していた。

「お疲れ様」

「悪いな」

「それにしても、本当に変わったよね、白亜って」

「俺自身感じていたことだ。正直自分の変わり様に驚いている」

「さすがにあそこまで言ったら、セシリアさんも変わるよね、きっと」

「変わらなかったらあいつは死ぬだけだ」

「そうだね。やっぱり治さなくて正解なのかな？」

「これであいつが変われば正解だ。後で治してやれ」

「そうするよ」

探査回路に反応。この反応は……

俺はナイフを数本手に取る。そしてが扉が開く。

「じゃじゃー」

ストトトトンッ！

楯無の足元と真横を通り過ぎてナイフが突き刺さる。

「毎回この仕打ちって酷くない？」

「なんの用だ？」

「スルー？　と言うか部屋に入ってもいい？」

「……………構わない」

「お邪魔しまーす。　て言うか今の間は何？」

「気のせいだ」

「気のせいじゃ……………」

「気のせいだ」

「き、気のせいよね。　きつと気のせい」

「で、今回は何だ？」

「その……………お願い！」

パンツ！　と手を合わせていきなり拝まれた。

「何が？」

「妹をお願いします！」

「……………は？」

意味がわからん。

S
i
d
e
~
白
~
o
u
t

第38話 パーティー後日談（後書き）

今回からは更新ペースを落したいと思います。

予定としては週に1話のペースで更新していきたいと思っています。それと、今までとは違い、内容を短くしていこうと思います。

第39話

交渉？（前書き）

短いです。

第39話 交渉？

Side 白亜

「妹か……確か名前は更識簪、日本の代表候補生……のはずだった
が？」

記憶にある情報を告げる。

「そう。これが写真ね」

携帯の写真を見せられ、写っていたのはどこか陰りのある女。

「あのね、……私が言っただって絶対に言わないで欲しいんだけど……」

「暗いんだな」

「そうなのよ……。でもね、実力はあるのよ。だから代表候補
生で専用機持ちなんだけど、専用機がないのよねえ」

何かを忘れている気がする。

「……………思い出した。機体名は『打鉄式式』、開発元は一夏の
白式と同じ倉持技研だ」

「よく知ってるわね」

「それでも一応は生徒会長だ。専用機持ちくらいは覚えている」

「へえ……」

「それなら一夏のほうが適任だと思うが？」

「一夏君のほうがいいかもしれないんだけどね、あなたのほうが安心できるのよね……」

「はああ……。俺たちは出るつもりはなかったんだけどな……」

「白亜、組んであげない？ 楯無さんがこうなるのは珍しいし……」

「出ることは別にいいんだよ。けどな、一人ペアができないんだよ……」

俺たちが入ったことにより専用機持ちは13人。少なからず俺は出るつもりはなかった。

「なら私がやめるよ。六花は戦闘向きじゃないしね」

「悪いな織姫。……わかった。組んでやる」

「ありがとう。あ、極力私の名前は出さないでね」

「……一応理由を聞いておこう」

「あの子……私に対して引け目があるっていうか……その……」

「……仲が悪いんだな」

「う……」

「はああ……。用はこれだけか？」

「ええ」

「じゃあ出てけ……とは言わん」

「……へ？」

「お前に俺の仕事をほとんど任せてるからな……お前、最近無理してるだろ」

「そ、そんなことは……」

「お前の体の筋肉が前よりも硬くなっているように見えるが？」

「そんなことわかるの？」

「白亜の観察眼はずば抜けているから、筋肉とかの動きも詠めるんです」

「だからまあ、無理はするな。無理されると俺が困るんだ」

「……白亜君らしいね。じゃあ、少しだけ休ませてもらおうかな」

俺は紅茶を入れ始める。

「そつえば楯無、お前は誰と組むつもりだ？ 総護は一夏と組ませるつもりだから二人は駄目だから」

「うーん……篝ちゃんにしようかな」

「篝ね……それならついでにあいつにデータ・スキャンを受けさせておけ」

「わかったわ」

「よし。紅茶だ。これを飲むまではゆっくりしてけ」

「あ、ありがとう……」

紅茶を口にする楯無。

「……すごくおいしい……虚ちゃん以上だわ……」

「白亜は何でもできるからね!」

「何でお前が誇らしげに言っただ……」

「いいじゃんいいじゃん。事実なんだし」

「はあああ……」

俺はまた溜息をついた。

Side～白亜～out

第40話 誘い

Side 白亜

「取材？」

目の前には黛薫子がいる。

「そう、取材。織斑君と篠ノ之さんも誘ってるんだけど、あなたたち三人にもインタビューさせてくれないかな？ あ、ちなみにこれが雑誌ね」

取り出されたのは、ティーンエイジャー向けのモデル雑誌だった。

「雑誌に載るってことか」

「あ、特に黒神君には受けてほしいかな」

「なぜだ？」

「一番大きな理由はここの生徒会長だからかな」

なんだか面倒になってきている。

「それを受けたとして、俺たちにメリットはあるのか？」

タダ働きは嫌だからな。

「じゃん！ この豪華一流ホテルのディナー招待券が報酬よ」

一流料理店の招待券か。　となりで織姫は目を輝かせていた。

「……いいだろう」

「お、黒神君はOKね。　井上さんと藍染さんはどうする？」

「私も受ける！」

織姫はやはり了承した。

「それなら私も受けよう」

結局誘われた奴は全員受けたことになった。

「じゃあ決まりね。　明後日の日曜日に取材だから、この住所にお昼の二時までに来てね」

「了解した」

「それじゃあね」

黛薫子は颯爽と立ち去っていった。

そして昼休み。 教室中騒がしくなる。

「一夏、お兄ちゃん、食堂行こうよ」

「悪いシャルロット。 用事があるからパスだ。 行くなら一夏を連れて行け」

「用事があるなら仕方が無いね。 じゃあ一夏、行こうか」

「おう」

「言い忘れていた。 一夏、タッグマッチは総護と組め」

「あれ？ 今回は出るのか？」

「出るつもりは無かったんだがな。 野暮用ができた所為で俺と総護が出る羽目になった」

「へえ……。そういうことならいいぜ」

「総護には話してあるからお前から言わなくてもいいぞ。まあ、総護から話しかけてくるかもしれないがな」

「わかった」

俺と一夏、シャルロットは教室を出る。俺は四組の更識簪と話を付けるため、一夏とシャルロットは食堂に行くために。

「待ってたわよ、一夏！」

廊下に出るなり鈴がいた。

「アンタ、あたしと組みなさいよ！」

「すまん、鈴。先約があるんだ」

「は？ 先約？ ——まさか、シャルロットじゃないでしょうね！？」

鈴は俺が出来ることを知らないから、隣にいたシャルロット（前にも組んだから）だと予想したようだ。

「……くう。前にも組んだからって理由で先越されてたまるものですか……」

どうやら当たっていたようだ。

「で？ 先約って誰よ。代わってもらっから、言いなさい」

「えーと、それは……」

「それは？」

「――私だ」

「総護？ まさか、あんたたちが出るって言うの！？」

「残念ながらそのまさかだ。俺と総護は出る。織姫は出んがな」

「というわけで、私は一夏と組む。諦める」

「ちなみに、総護が一夏と組むように頼んだのは俺だ」

「え？ なんで？」

「出る羽目になったからな。一夏は俺が組む予定の奴とやらせて、俺は総護と久しぶりに全力でぶつかるためだ」

模擬戦はアリーナが空いているときにしかできないが、全力を出す
と他にいる生徒に被害が出る。だからこういった邪魔が無い空間
でしか全力は出せない。

「俺はもう行くから」

俺は四組へと向かった。

「ああつ！ 一組の黒神君だ！」

「生徒会長の黒神様よ！」

「え、うそうそ！　なんで!？」

「よ、四組に御用でしょうか!？」

人が集まってくる。　それと黒神様って何だよ。

「更識簪はいるか？」

「「「え……」」」

女子の声がハモった。

「更識簪って……」

「『あの』？」

「このクラスには更識簪は一人しかいない。　いるのか？　いないのか？」

女子の壁が開いた。　その直線上、クラスの一番後ろの窓側に、空中投影ディスプレイを凝視しながらひたすらキーボードを叩いている更識簪の姿がそこにはあった。

「えっと……もしかして、朝のSHRで説明された、専用機持ちのタッグマッチの相手として更識さんを選んだ……とか？」

「強ち間違いではない。　まあ、仕事だ」

「仕事……？」

「でもあの子、専用機持っていないじゃない」

「今までの行事、全部休んでるしさあ」

「それに、あの子が専用機を持っているのって、お姉さんの――」

「勝手な憶測で喋るな。奴には実力がある。代表候補生の名を甘く見るな」

俺はそれだけ述べて更識簪に近づいた。

Side 〱 白亜 〱 out

第40話 誘い（後書き）

これから2週間に1、2話投稿のペースで行きたいと思います。

第41話 交渉（前書き）

二週に1、2話と前回書いたのに、早速遅れました。
すみませんm（ー）（ー）m

第41話 交渉

Side 白亜

俺は更識簪の目の前に立つ。

「……………」

カタカタカタカタと、キーボードを素早く打ち続ける音が響く。
空間投影のタイプではなく、昔ながらのメカニカル・キーボードを
使っている。

更識簪の容姿は髪はセミロングで楯無とは対照的に癖毛のハネが内
側に向いている。

「初めましてと言うべきか。俺は黒神白亜。まあ、生徒会長だ」

「……………」

更識簪の指が止まる。

「……………知ってる」

知らないほうが変わりだけだな。楯無を完封したことで生徒会長にな
るし、その所為でより有名になったからな。

「……………お姉ちゃんの差し金？」

いきなり核心を突くか。

「さあな」

適当にはぐらかす。
不振そうに俺を見る更識簪。

「……用件は？」

「今度のタッグマッチ、俺と組んで出してもらう」

「……何で？」

拒否するかと思ったが、理由を訊いてきたか。

「お前は今まで行事を休んできている。さすがに、これ以上は黙認することはできん」

「……それは生徒会長として？」

「そうだ。それに成績にも関わることだ。教師からの声も少なからずある」

「……ちなみに拒否権は？」

「無い」

「……………」

否定的な目で見てくる。

「これは決定事項だ。異論は認めない」

まるでラウラのセリフだな。

「タッグマッチに出るのが嫌ならば、俺を倒してみろ。俺を倒せば出なくてもいい」

実質無理な話なんだけどな。

「そうだな……無抵抗で俺と組むのなら、お前に利点でも出すか。お前が望めばの話だが」

「……利点？」

喰い付いた。

「お前のIS『打鉄式』の完成を手伝おう」

「！」

「俺と戦って利点ゼロで組むか、無抵抗で組んで俺の出す利点を呑むかはお前の自由だ」

「負けることが前提になってる……」

「決定事項だ。お前じゃ俺には勝てない。有余は一週間。どうするか考えるんだな」

これは一種の脅迫だよな。命令でもあるけど。

「俺は戻る。決めたら俺の下に来い」

俺はそのまま四組の教室を後にした。

「遅いぞ、一夏！ 私はここだ！」

時と所変わって放課後の第三アリーナ。一夏と箒が模擬戦をしていた。

いつもなら一夏が多少勝っているが、『紅椿』あかつばきの単一仕様能力『絢爛舞踏』らんぶとう発動のコツを覚えた箒はほぼ無尽蔵のエネルギーに裏付けされた連続瞬時加速によって一夏と互角以上に戦っていた。

「くっ！」

クロス・グリッド・ターンによる一斉方向転換と同時に『雪羅』の荷電粒子砲を放つ。

それは紅椿の刀『空裂』からわれのエネルギー斬撃によって相殺された。

「はあああああっ！」

瞬時加速と同時に背後の展開装甲を開き、推進エネルギーを放出することで速度を高めた箒は、そのまま一夏に一閃する。

ガキイイーン！

一夏の雪片式型と箒の空裂がぶつかり合う。

展開装甲による自動姿勢制御によって倍速の方向転換を見せた箒は、そのまま『雨月』あまじつきのレーザー速射を白式に浴びせた。

「ぐっ！」

「終わりだ、一夏！」

「負けるかぁ！」

瞬時加速のトップスピード・テリトリーに突入したふたり。
直後、
刀を交えた火花が第三アリーナの空に散った。

「紅椿の性能もあるとしても、箒に追いつかれてきたな、一夏」

「ああ……。今日は特に危なかった。シールドエネルギーを削っても簡単に終わりが見えない。紅椿のワンオフ・アビリティは本当に厄介だよ」

押されつつも何とか勝った一夏。勝ち星は一夏のほうが多いとはいえ、最近の勝率は一夏の方が勝っているが、6（一夏）：4（箒）くらいの比率になってきた。

「気を抜くとすぐに箒に抜かれてしまうよ」

「わかってる。だけど、そう簡単には負けられない」

「頑張れよ。特訓なら付き合ってやるから」

「ありがとう。助かるぜ」

「簡単に負けたら俺たちの特訓の伸びが箒よりも悪いってことになるからな。それに、一夏には強くなって欲しいからな。」

一夏の成長が楽しみだ。

Side～白亜～out

第42話 了承（前書き）

タイトルが思いつかない……。

第42話 了承

Side 〱 簪

IS学園、IS整備室。 各アリーナに隣接する形で存在するその場所は、本来二年生から始まる『整備科』のための設備。そこに私はいた。

「……………」

上手くいかないISの調整をしながら私は考えていた。

前生徒会長で私の姉である更識楯無と、現生徒会長黒神白亜。

姉さんと彼の戦いを観た為、自分が勝てるなんてことは万に一つも無い。

ISの完成を手伝ってくれと言ってくれたのは正直嬉しかった。

だけど、自分でISを実用化くらいできなければ、姉の影さえ踏めない。

そう思うと、彼の申し出に答えるのを悩んでしまう。

「ふう……………」

ため息をついて、ディスプレイを閉じてキーボードを片付けた。

（帰ってアニメでも見よう……………）

私の趣味は古今問わずアニメを見ること。

ジャンルは決まってヒーロー・バトルもの。

主人公が悪を倒す、ベタでシンプルなものが好き。

（今日は何を見よう……）

そんなことを考えて整備室を出ようとしたときだった。

「……なんでここにいるの」

そこにいたのは整備室の壁にもたれかかり、私を見ていた黒神白亜だった。

「俺と組む相手の手前を見とこうと思ってな。まあ、今日は放っておくつもりだったんだがな」

彼は仕事でやっているのだ。乗り気ではないのはわかっている。彼は天才だ。それも姉さん以上の。そんな彼から見た私なんて嘲笑の的になるに決まっている。

「笑いたければ笑えばいい……」

「なぜ俺がお前を笑わんといかん」

「……あなたから見れば私なんて……」

「確かに俺から見れば格下だ。だが、それはこの学園のほとんどがそうだ。だが、努力している者を、お前を笑うつもりは無い。にしても……」

「？」

何を言うつつもりなの？

「お前、想像以上だ。代表候補生の名は伊達じゃないな。一夏とは大違いだ」

褒められた？

「お前の实力を見たくなつた。お前を参加させることに關しては乗り気ではなかったが、乗って正解だったな。これは面白くなる」
やっぱり乗り気じゃなかったんだ……。

「戻るか……。じゃあな、更識簪」

彼はそのまま整備室を出て行こうとした。

「……ま、待つて！」

「なんだ？」

「あ、あなたと組みます。だけど、機体のことについては考えさせて……ください……」

私がそう言つと彼は口の端を少し上げてから、口を開いた。

「わかつた。だが、できるだけ早めにしてくれよ」

そう言つて彼は去つた。

Side 〱 簪 〱 out

S i d e 〱 白亜 〱

更識簪からの返事を受けてから、俺は部屋に戻っていた。

「楯無さんの妹さんどうだった？」

「俺と組むことが正式に決まった」

「脅してない？」

織姫の口からそう言われるとはな。

「最初は命令。 整備室であつたときに奴から返事を貰った」

「へえー。 でもやっぱり最初は命令だったんだ」

「やっぱりとはなんだやっぱりとは」

そう言いながら俺はナイフを手取る。

「楯無さん？」

「そうだ。 奴が来ている」

コンコン。

「ほらな」

「楯 〱……」

ストトトンッ！

恒例のナイフの投擲。

ナイフは楯無の足元に刺さる。

「最後まで言わせてよ！」

「何の用だ楯無……」

「簪ちゃんの様子を訊きに來たの。 シュークリームあるわよ？」

シュークリームに織姫が反応した。

「……とつとと入れ」

「お邪魔しまーす」

俺は紅茶の準備をする。

「で、簪ちゃんはどうだった？」

「奴も了承し、正式に組むことが決まった」

「流石というところね……。 まさか一日で簪ちゃんを崩すなんて

……。 ね、ねえ」

「なんだ？」

「簪ちゃんに何したの？」

「特に何かした覚えはないぞ。　まあ、交渉はしたな」

「交渉？」

「反抗せずに組めばISの完成を手伝うってな」

「交渉というより脅しじゃないの？」

「お前もそれを言うか。　まあ、脅しじゃない」

「そ、そう。　あ、シュークリーム食べましょ？」

「ちょうど紅茶もできた。　それに、織姫が我慢の限界だろうしな」

織姫が目を輝かせて、楯無の持つシュークリームが入った箱に視線を釘付けにしていた。

「あはは……」

それから俺たちは楯無の持ってきたシュークリームを食べたり、楯無を追い出したりした。

S i d e 〱 白 亜 〱 o u t

第42話 了承（後書き）

なんかキャラが崩れてきたような……。

第43話 取材（前書き）

この作品ではお久しぶりです。
黒翼です。

遅くなりましたが、43話です。

第43話 取材

Side 白亜

「おい」

「……………」

「待てつてば、箒！」

「うるさい！ 私は一人で行きたいんだ！」

俺たちの目の前で一夏と箒が口論をしながら、取材先まで向かっていった。

「……あいつら、何してんだ？」

「あ、一夏さんがまたやってるよ」

機嫌の悪い箒をいつものツンデレに戻していた。

「あいつ、女を落すことに関してはピカイチだよな」

「あ、今度は手を繋いだ」

「箒はあれだから気づかれないんだよ……」

総護は箒の恋路の心配をしていた。
俺と織姫と総護は雑談をしながら、一夏の声は聞こえたが、箒はず

つと黙ったままだった。

「どうも、私は雑誌『インフィニット・ストライプス』の副編集長をやっている黛渚子よ。今日はよろしく」

「あ、どうも。 織斑一夏です」

「篠ノ之箒です」

「黒髪白亜だ」

「藍染総護だ」

「井上織姫です」

取材のために通された部屋はそれなりに広く、ソファが並んでいた。

「えーと、それじゃあ先にインタビューから始めましょうか。 そのあとで写真撮影ね」

写真か。

ほとんど撮ったことがなかったな。

「それじゃあ、最初の質問いいかしら？ 織斑君、黒神君、藍染君？、さん？ どちらでもいいか。 女子校に入学した感想は？」

「いきなりそれですか……」

「だってえ、気になるじゃない。 読者アンケートでも君たちへの特集リクエスト、すっごく多いのよ？」

「えーと……使えるトイレが少なくて困ります」

「ぷっ！ あは、あははは！ 妹の言ってたこと、本当なのね！

異性に興味のないハーレム・キングって！」

強ち間違ってるな。

「黒神君と藍染さんは？」

結局“さん”にしたのか。

「女子がうるさい」

それ以外に思いつかん。

楯無やら一夏ラバーズがいい例だ。

「確かに、彼女たちは騒がしいね。私はあまり考えたことがないね。まあ、うるさいというのは肯定するよ」

総護は元々虚圏を潰すためにIS学園に来たんだよな。

「これも妹の言った通りね。異性に興味がない会長様と、謎だらけの藍染さん、それと何を考えているかまったくわからない二人だつて」

あいつは何を言ってるんだ？

「井上さん、黒髪君と付き合ってるって噂があるみたいだけど、その真相は？」

「付き合っていないせん。まあ、ずっと同じ部屋で暮らしているから、そんな噂が流れてもおかしくないと思いますけどね」

「黒神君は女子と同室って嫌じゃないの？」

「……織姫だからまだいいんだよ。元々俺は一人だったのに……」

「一人が良かったんだ」

「当たり前だ。総護や一夏ならまだしもな。女子はごめんだ」

「東さんの所為なんだよね」

「黒神君と藍染さんのISは普通じゃないみたいだけど、どういうこと？」

「これは答えられないね。わざわざ私たちのISの秘密を一般人に教えるほど、私たちは甘くないよ」

「じゃあ次は、篠ノ之さんにお姉さんの篠ノ之東博士の話を――」

がたつと音を立てて立ち上がる筈。
相変らず、仲悪いな。

「……ディナー券あげないわよ？」

「うっ！」

ソファーにかけなおす筈。

一夏と二人っきりの時間がそんなに欲しいのか。

「いい子ね。うふふ、素直な子って大好きよ。それで、お姉さんから専用機を貰った感想は？ どこかの国家代表候補生になる気

はないの？ 日本は嫌い？」

「紅椿は、感謝してます。……今のところ、代表候補生に興味はありません。勧誘は多いですが。日本は、まあ、生まれ育った国ですから、嫌いではないですけど」

全問全答する筈。

「オーケー、オーケー。この中で一番強いのは誰？」

「「白亜」」

「「総護（藍染さん）（私だね）」」

総護の本気を見たことがない一夏と筈は俺を言ったが、俺と織姫は総護を挙げる。総護自身、自覚してるしな。

「黒神君は藍染さんの方が強いって言うの？」

「ああ。総護は俺よりも強い。おそらく、総護に勝てる奴はいないだろう」

「白亜なら勝てるかもしれないね。私の力について詳しいからねよく言うな。」

「んーじゃあ、織斑君と篠ノ之さんと井上さんの中だと誰が一番強いのかな？」

「「「一夏^{さん}だね」」」

俺と織姫、総護が言う。

「今はまだ一夏の方が強いな。　ISのスペックと単一仕様能力の性質上、最近は筈が勝つこともあるが、操縦技術なら一夏の方が上だ。　スペックの差がなければ一夏が勝ち越すだろう」

「そうだね。　一夏の白式は燃費が悪く、筈の紅椿も燃費が悪いが、単一仕様能力でエネルギー補給ができるからね。　性質上は筈の方が勝ちやすいね」

「ほお、じゃあまだ織斑君のほうが強いけど、すぐ追いつかれちゃうかも知れない訳ね」

「間違ってるな」

「そう言えば、織斑君、黒神君、藍染さんは生徒会に入ってるみたいけど、というか、黒神君は生徒会長やってるみたいけど、楯無ちゃん、イカすでしょ？」

イカすって全然聞かなくなったな。

「普通に大変ですよ。　ISの特訓もあるのに、その上執行部の仕事で色々部活動に行ったりするんですから」

「あー、薫子が新聞部に来ないって愚痴ってたわよ。　どうにかならないの？」

「それは毎回くじ引きだが、どれだけくじ運が悪くても最終的にはどの部にも回るようにはなっている。　いつになるかは知らんが、

新聞部にもいずれ一夏は行くことになる」

そんな感じで、雑談が混ざりまくったインタビューは終わり、写真撮影に移った。

「それじゃあ地下のスタジオに行きましょうか。更衣室があるから、そこで着替えてね。そのあとメイクをして、それから撮影よ」

「え？ 着替えるんですか？」

「うん。 スポンサーの服着させないと私の首が飛ぶもの」

そう言って首を手刀で切る仕草をする。

「順番は織斑君と篠ノ之さん、黒神君と井上さんと藍染さん、黒神君と井上さん、黒神君と藍染さん、男子三人の順だからね。数が多いけど頑張ってね。それじゃあ、行きましょう」

俺が一番多いのは何でだ？

生徒会長になった所為か？

今一わからんが、俺たちは移動を開始した。

Side 〱 白亜 〱 out

第44話 取材終了（前書き）

グダグダです。

それに＋滅茶苦茶内容薄いです。

第44話 取材終了

Side 白亜

「スーツか。あまり来たことが無かったな」

「それでも似合っているではないか」

「そういうお前もな」

「一夏、まだか？」

「あ、悪い、先に行つてくれ」

「わかった。あまり箸を待たせるなよ」

「なんで箸だけなのかは知らないけど、わかった」

鈍感だな。

「行こう白亜」

「だな」

俺たちは一夏を置いて更衣室を出る。

「黒神白亜君、藍染総護さん、入りまーす」

「あ、白亜！」

「織姫か。 似合ってるな」

「そうだね。 似合っているよ」

織姫が着ているのはピンクのドレスだ。
ちなみに、俺たち男子陣は全員スーツだ。

「にしても、箒は似合っているが、珍しいな」

「そうだね。 箒にしては珍しい」

「すみませーん、遅れましたー。 織斑一夏君、入りまーす」

「ちょうど相手も来たようだね」

「うーん、なんかこれ変じゃないですか？」

あいつは似合っていたぞ。

「ぜーんぜん！ 超似合ってるわよ。 十代のスーツ姿っていうのもいいわねえ」

箒が一夏のほうを向いた。

「あ……………」

見惚れたな。

「い、一夏……………」

「お、おう。待たせたな、篤」

「う、うむ……」

「何だ？ あの空間は」

「二人だけの世界に入っちゃったね」

「この際付き合ってしまえばいいのに」

あの二人が醸し出す雰囲気はもう恋人同士が出すそれと同じだった。
もう付き合えばいいのに。

「はい、それじゃあ撮影始めるわよ！。時間押してるし、枚数
も多いからサクサクいっちゃいましょう！」

「お疲れ様！ 特に枚数の多かった黒神君は尚更ね。じゃあ、皆
着替えちゃって。あ、服はそのままあげるから、持って帰っちゃ
って！」

「は、はあ……」

「わ、わかりました……」

「えーと、デイナー券は後日携帯にデータ転送してあげるから、帰
る前にアドレス教えてね。それじゃあお疲れ！」

「お疲れ様でした」

「律儀だな」

「そうでもないよ。白亜に藍染さんもお疲れ様」

「着替えるのでしょうか」

「ああ。早く帰ろう」

「よし、帰るか」

「ああ」

「ねえ白亜、藍染さん」

「何だ？」

「一夏さんと箒の後着けてみない？」

あの二人っきりの空間を醸し出している二人か。
どうやら外食をするみたいだな。

「俺は遠慮しておく。流石に疲れた」

「私も遠慮しておこうかな。箒の邪魔になってしまうしね」

「うー、じゃあ私も止めておこ」

「帰るか」

「ああ」

俺たちの取材は終わった。

Side～白亜～out

第44話 取材終了（後書き）

すみません、写真撮影の内容が思いつきませんでした。

第45話 白亜の心（前書き）

皆さん、お久しぶりです、黒翼です。
スランプです。

文が思いつかない……。

第45話 白亜の心

Side 白亜

俺と更識簪が組むことが決まって一週間が経った。
今は食堂だ。

「マルチ・ロックオン・システムは流石に俺でも時間が掛かる。
大会に間に合うかはわかん。通常のロックオン・システムが、
マニュアル誘導システムを使うことも一応考えておけ」

「わかり、ました」

ちなみに、この場にいるのは俺、更識簪、総護に織姫だ。

「総護、一夏の方はどうだ？ あいつのことだ、白式の調整なんか
全くしてなかっただろう？」

「ああ。あれだから燃費の悪いままなんだ」

「あいつは専用機持ちとしての自覚がなさ過ぎる」

「確かにね。勉強もしてるみたいだけど、自分のISの方が疎か
になっちゃってるみたいだしね」

「……あの馬鹿はお前に任せる」

「わかってるさ」

俺と総護は一夏の話をしている。

「あ、あのっ」

「どうした？」

「あ、その、他の人に教えちゃってもいいんですか？」

何だ、そんなことか。

別に教えても構わない。

なぜなら、

「「総護（白亜）に教えても、相手が総護（白亜）以外なら結果は変わらないからな（ね）」」

総護に更識簪のことを言った程度では結果は何も変わらない。

圧倒的な力の前では、そんな些細な情報と力など無意味でしかない。圧倒的な力には、それと同等になるように情報と力がなければ結果は何も変わらない。

「更識さん、この二人にそんな些細なことは関係ないんだよ。圧倒的な力には、それと同等の力をぶつけなきゃ」

「そついう、ものの……？」

「そうだと思うよ。 実際、私と白亜に策なんてものは通じないしね」

ブリュンヒルデレベルの相手がやる策ならわからんがな。

いくら俺と総護が圧倒的な力を保持しているとはいえ、相手もそれ

に順ずる力を持てば手こずる。

俺は総護以外に負けることはないが、それが100%約束されているわけではないからな。

「……よくわからないけど、全く問題ないってことはわかりました」

俺と総護に一般人の常識は通用しない。

俺は元々人間ではないし、総護は人間と言う人種の遙か上にいる、人間の頂点。

ただの人間からしてみれば、総護の力は神の如き存在に等しい。そんな俺らに常識なんてものが通用するはずがない。

「更識さん、白亜と藍染さんと付き合うなら常識は捨てた方がいいよ。だって二人に常識なんてものは存在しないんだから」

付き合いの長い織姫はわかっているようだな。

人間の常識は把握しているが、それが俺たちに全て通用するわけではないからな。

「……わかり、ました？」

戸惑うのは仕方がないか。

俺が人間の心を手に入れたとしても、元々は虚無を司ったエスパーだ。

本当の人間と同じ感情を手に入れているわけではない。人間がわからなくなるな。

「更識簪、俺は行く」

「あ、はい」

俺は席を立ち、教室へと戻った。

S i d e 〱 白亜 〱 o u t

S i d e 〱 総護 〱

白亜は去っていった。

また人がわからなくなったようだね。

「あの、黒神会長ってどんな人なんですか？」

更識簪が白亜について訊くとは。

もしかすると、織姫のライバルになるかな？

「白亜は人間がわからないんだ」

こんな感じでいいかな？

これが白亜の人間性だしね。

「人間が……わからない……？」

「そう。なぜだかわかるかい？」

「……いいえ、わかりません」

「白亜には全く心がなかった。今は彼女のおかげで、心……感情を持つようになった」

まあ、表情が変わってない様に見えることもあるけどね。

「心がない人間が、少しずつ心を得ていった。私の私見だが、一般人は元から心があるものだ。だけど、白亜には元々なかったんだ」

「心がない……」

「白亜は多分、心を得た自分の感情が、他の普通の人間の感情とは違うのではないかと、こう考えるんだ。それは実際にそうかもしれないし、違うかもしれない。まあ、価値観の違いだね」

人の命が重いと考える者がいれば、特定の人物以外はどうでもいいと考える者もいる。

価値観は人それぞれだ。

「白亜は自分の価値観が、一般の人間と似ているのか、かけ離れているのか、考えているんだ。だから、白亜は冷淡だけど、人と関わろうとするんだ。自分の感情を照らし合わせる為に」

白亜は本当の人間になろうとしている。

まあ、私としては既に白亜は人間だ。

人の心を持ち始めた時点で、白亜は人間になれてたんだ。

「私からはここまでだね。白亜と……否、私たちに深く関わるなら、覚悟を決めるんだ」

世界の裏よりも、もっと暗い、世界の闇を見る事になるのだから。

「私も行くでしょう」

「またね、更識さん」

Side 総護 out

Side 簪

黒神白亜。

IS 学園の生徒会長で、いろいろなことが謎の男。彼と親しい藍染総護さん。

彼から聞いたのは、黒神君のこと。

私に告げられたのは予想の斜め上に行くものだった。彼には心がない。

正確にはなかったけど、それは私にとって衝撃的だった。

私はどんな人でも少しは心を持つてると思ってた。

だけど、昔の黒神君は全く心がなかったって聞いた。

それは、嬉しさも、悔しさも、楽しさも、悲しさも、何もわからなかったってこと。

今の彼は、表情の変化は稀にしか大きく変わる事がないし、冷淡。

彼は人間を観察して、自分の心と照らし合わせてる。

そして、話している途中であった、僅かな表情の変化。

「……あなたたちは……あなたたちが見ているものって何なの……？」

彼たちに深く関わるなら覚悟を決めろって言われたけど、彼たちはどんな過去を背負ってるんだろう……。

「…黒神…白亜…」

Side
簪
out

第45話 白亜の心（後書き）

久しぶりでキャラが崩れていないでしょうか？
簪にフラグの兆が……。

第46話 飛行テスト

S i d e 〱 白亜 〱

いつもの如く、打鉄式式を完成させるために第二整備室で作業を進めていた。

「あ、あの……飛行テスト……付き合って欲しい」

「わかった。場所は第六アリーナでいいか」

飛行テストならキャノンボール・ファストのときに超高速飛行訓練に使われた場所だ。

「悪いが、少し我慢しろよ」

「え？ きゃっ」

俺は更識簪を抱きかかえ、響転で移動した。

「到着だ」

俺は更識簪を降ろす。

「え？ ええ？」

何があつたのか理解できていないのか、困惑している。

「俺の使える高速移動法だ。いつまでも呆けてないでやるぞ」

「あ、はい。　おいで……打鉄式式……」

更識簪は自身の愛機『打鉄式式』を纏い、コンソールを開きながら数値をチェックしていった。

やはりこいつもそれなりの天才だな。

俺の周りにはとんでもない奴らばかりだから大分見劣りはするものの、天才の域に入ってはいるだろう。

「スラスター出力……チェック……」

こいつの機体は大分形になってきた。

試していないから不安の部分が大半だが、このまま行けば十分間に合う。

一つ不安なのがマルチ・ロック・オンシステムだが、まあ大丈夫だろう。

「……行けるか？」

「うん……うん……」

「先に俺が行く。　タワーの上で合流するでしょう」

「わ、わかった……」

俺は十刃を起動し、空を蹴る。

響転を使えば速いが、あえてそれはしない。

俺が頂上に辿り着いて、更識簪の方を見ると、ディスプレイを呼び出し、キーボードを叩きながら飛んでいた。

「どこか不具合があったか……」

俺の手が及んでいない部分なのか、俺のミスなのか、はっきりしない。

そうこう考えているうちに、更識簪がすぐ近くにまで近づいていた。

「来たか。機体の方は大丈夫なのか？」

「大丈夫……」

「そうか、それならいい。訊くが、それは俺のやったところか？」

「違う……私がやったところ……」

俺の手が及んでいなかったところのようだ。
これからは確認だけはしておくか。

「じゃ、じゃあ……先……戻るから……」

「わかった。一応後が続くでしょう。何かあったときに反応しやすいのでな」

実際のところ、響転があるからそこまで気にしなくてもいいのだが。

「じゃあ、行くね……」

更識簪は降りていった。

打鉄式式の速度はセシリアのブルー・ティアーズに近い。
若干打鉄式式の方が勝っている感じた。

（あれは……）

更識簪の纏う打鉄式式の脚部ブースターのジェット炎が、ぱっ……ぱっ……とちらついた。

（一応教えておくか……）

俺がプライベート・チャンネルで更識簪に伝えようとした瞬間、打鉄式式の右脚部ブースターが爆発した。

「!？」

「遅かったか……!」

突然の爆発衝撃と、ブースターの片方を失った事による姿勢崩壊で更識簪は機体ごと大きく傾いて中央タワーの外壁へと突き進んでいく。

俺は速度をさらに上げる。

だが、更識簪はぐんぐんとタワーに接近していく。

「更識簪!」

俺は響転で更識簪と壁の間に入り込む。

霊圧で足場を作り、タワーに触れることなく受け止めるつもりだ。

「くっ……」

思いのほか衝撃が大きく、軽く後退させられた。

「く……くろかみ……くん……」

「無事か？」

「う、うん……」

「それならいい。すぐに着くが、少し我慢しろよ」

「う……、うん……」

更識簪の返事を聞き、俺は響転で移動した。

そのとき、彼女の頬が赤く染まっていたのは見間違いではないだろう。

ピットに着き、更識簪が俺の方を向いている。

「どうした？」

「あ、あの……怪我……してない……？」

「大丈夫だ。十刃も俺も丈夫だ。あの程度で怪我をするほど柔ではない」

「よかった……」

安堵した表情を見せる更識簪。

「これからは俺がお前のやった部分を確認するようにする。また
こういうことが起こるのだけは防ぎたいからな」

「わ、わかった……」

更識簪はうつむいた。

自分のやったところに不具合が起こったことを気にしているのだろうか。

何と声をかけたら良いのだろうか。

「あ、ああつ、あ……！」

俺が考えていると、更識簪は俺の前に迫っていた。

「ありがっ！ ……………とう」

「ん？」

「あ、あの……ありが、とう……。 さっき、助けてくれて……」

更識簪はぱつと俺から離れながら横を向いた。

「そのことか。 気にするな。 俺は生徒会長であり、生徒を守る
のは俺の仕事だ。 それに、お前は俺のパートナーでもある。 パ
ートナーに怪我をさせるほど、俺は愚かではない」

「……………」

じーつと俺を見てる。
どうしたんだ？

「……格好、いい……」

「は？」

「な、なんでも、ない……」

格好いい？ 俺がか？

「……そうか」

追求はしない。

更識簪がなんでもないと云うのなら、なんでもないのである。
そこまで気になる事ではないのでな。

「帰るぞ。 身体が冷えてきているようだし、 風邪を引くぞ」

「う、うん……」

肯きはしたものの、歩き始めない。

「……」

「どうした更識簪？ 帰らないのか？」

「よ、呼び捨てで……いい……」

ボソツと言ったものだが、俺には聞き取れた。

「……いいのか？」

「いい……。か、簪で……。いい」

そう告げると、だだつと逃げ出すように走り去った。

S i d e ～ 白 亜 ～ o u t

第47話 報告

Side 簪

(い、言っちゃった……)

私は自分の部屋で熱いシャワーを浴びながら、胸をドキドキと高鳴らせていた。

下の名前で呼ばせることは、更識家の女には重要な意味があるから。

「……………」

唇をなぞる。

そこには言葉を浮かべて。

「は」「く」「あ」……と。

「！／／／」

絶対顔が赤い……。

私はドキドキと鳴りっぱなしの心臓を包み込むかのような優しさで胸に触れる。

そして、自分の胸を触って少し落ち込んだ。

「本音は……いいなあ……」

同じ年なのに2カップもサイズが違う。

本音の姉の虚さんもしっかりとした膨らみがある。

それに、姉さんも――

「ッ！」

姉さんのことを考えた瞬間、急激に頭が冷えていった。

（楯無……姉さん……）

私の憧れで、私じゃあ届かない目標。

優しかった、優秀だった、強かった、魅力的だった。

白亜ほどじゃないけど、それでも私の中では変わらない完璧な存在。

（私じゃあ……あの人には敵わない……）

そう思ったのはいつだったっけ……。

——その背中を追わなくなったのは。

——その顔を見つめられなくなったのは。

——同じ名を背負うことに苦痛に感じ始めたのは。

……だけ……

「もう平気……。姉さんは、姉さん……。私は、私……」

彼といて、彼と話して私は気づいた。

あの人を追うことを止めたときからもう私は歩みを止めていたことを。

私が一人でやろうとしていた『打鉄式』の製作。

あれのときは姉さんに追いつきたい、ではなく、否定されてきた自分を否定するため。

私はあの人には敵わない。

それはどうしようも無いほど大きな壁。

だけど、私はあの人に勝つことはできなくても、何か一つのことでも追いつければそれでいい。

あの人の妹だからと言うだけで勝手に期待され、そして失望される。皆は姉さんのおかげで専用機を手に入れたと言っている。

私が専用機持ちになったとき、そのときはまだ私は姉さんの背中を追っていた。

黒神君も言ってくれた。『専用機持ちであるのは妥当だ』って。

だから私はまた歩もうと思う。

いくら周りが私を否定しようとも、私は私で頑張るだけだって。そう教えてくれた私のヒーロー。

表情の変化に乏しい、冷淡だけど強いあの人。

「黒神、白亜……」

その名前を呼ぶだけで自然と力が湧いてくる気がする。

彼に最も近いと言われている井上織姫。

彼女は彼の過去を知っている。

だからと言って、私は負けない。

S i d e 〉 簪 〉 o u t

S i d e 〉 白亜 〉

「で、何のようだ？」

俺の部屋にはまたもや楯無が来ていた。

「簪ちゃんの様子はどうかなくて」

「お前、またか……」

「物凄いシスコンだね」

三日に一回は俺の部屋に来て、コイツは簪のことを訊いてくる。
とてつもないシスコンだ。

「少しは妹離れしたらどうだ？」

呆れながら言う。

「いいじゃない。せめて昔みたいに戻れるまでは、シスコンでも」

「戻れても余計に酷いシスコンになるだろ」

「それならそれでいいわよ？」

「もしもそれが原因で避けられるようになったらどうするですか？」

「……………（うるうる）」

「なぜ泣きそうになる……」

織姫の発言で楯無は目に涙を浮かべた。

もしもの話しだし、そもそもまだそこまで行く過程は揃っていない。

「か、簪ちゃんにこれ以上拒絶されと思ったら、し、自然に涙が……」

「これは重症だな」

「そ、そうだね……」

あまりのシスコンぶりに、俺も織姫も呆れていた。

「で、簪の様子だったか？」

「！ え、ええ…… って『簪』？」

俺が声を掛けると我に返ったが、俺が呼び捨てにしたことに疑問を感じたようだ。

「あいつが名前でもいいと言ったのでな。 だから名前で呼んだだけだ」

「そ、そう」

「俺を睨むな」

「だ、だって羨ましいんだもん！ 簪ちゃんに普通に接してもらえるだけじゃなく、名前で呼ばせるほど仲がいいなんて！」

もうコイツのシスコンはどうしようにもないな。
織姫も顔引きつらせてるしな。
珍しい。

「た、楯無さん落ち着いてください」

「はっ！　で、簪ちゃんはどうだったの！？」

「今日飛行テストしたときにISのブースターが爆発「簪ちゃんは大丈夫なの！？」いいから落ち着け……」

「落ち着いてられないわよ！　簪ちゃんが怪我なんてしたら……！」

「だから落ち着けといっているだろう。　簪は無事だ。　タワーにぶつかる前に俺が止めた」

「そ、そう……」

安堵した表情になる楯無。

「まあ、完成は近いぞ。　初期のスペックよりも多少上昇させるつもりでもある」

「……じゃあ、これから簪ちゃんをお願いね」

「ああ。　完成はさせるさ」

「じゃあまた来るわ」

「来るならもつと日を置け」

俺の声が聞こえたかどうかは知らんが、せめて週一にしろ。

「はあ……」

S.i.d.e ~ 白亜 ~ o.u.t

第47話 報告（後書き）

楯無さん異常なシスコン化w。
簪の部分は独自解釈です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5557s/>

IS インフィニット・ストラトス～一人の十刃～

2011年12月2日20時50分発行